今日のソ連邦

1978
5
3. 1.



建設進む世界最大の水力発電所

国際婦人デー（3月8日）特集

カフカズに獲物を追って（下）

今日のソ連邦

第5号　1978年3月1日

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

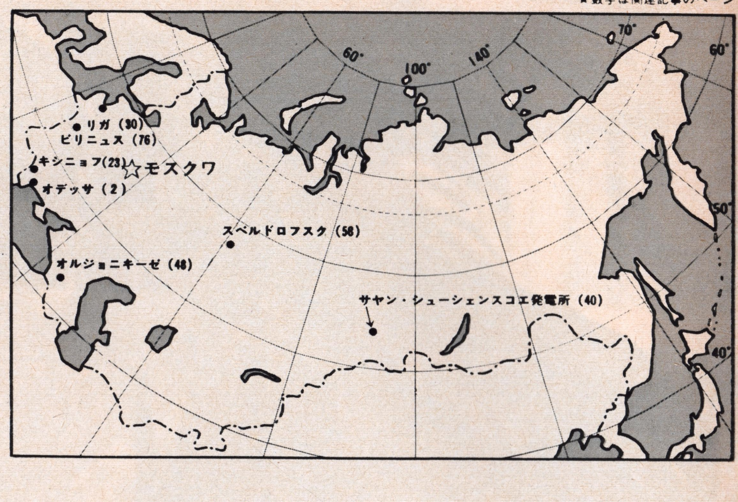
下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……1200円

1年分送料……2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2—1—1　電話(583)4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141　電話(03)447—3536(代表)
振替口座東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

“海の男”の巣立つ場所

——オデッサの商船大学

リュボーフィ・イワノワ

カメラ　L・ノーソフ



嵐が未来の海の男たちの意志を鍛える。

オデッサ商船大学（ウクライナ共和国オデッサ市）の卒業生は、商船や客船、海洋研究所、造船所などで働いている。

この大学の学生になるのは、簡単なことではない。若者らしい夢だけではとてもなれない。まず第一に入学試験を受けて、競争率が最低でも5倍という難関を突破しなければならない。第二に、判断力、機敏さ、そしてもちろん健康を証明しなければならない。

海への次の一歩は、5年間の勉強である。6時間の講義、自習、体育の時間というように、一日の時間割りはぎっしりと詰まっている。夕食後だけが、自由な時間だ。

この大学の授業は、ソ連のすべての教育施設の場合と同様、無料。学生たちは、国によって完全に生活を保障されている。

船舶操縦、船舶工学、電気工学、オートメーションの四つの学部があり、教授、助教授、経験豊かな船長や航海士が学生たちを教えている。教室にはありとあらゆる最新の教育機器が備えられている。たとえば、コンピュータで作動するシミュレーション装置が、海上での最も複雑な事故の情況を再現する。学生たちはこの装置によって大型船の操縦、船舶用機器やシステムの運転を学び、制限された視界の中で船の衝突を避ける訓練をしている。

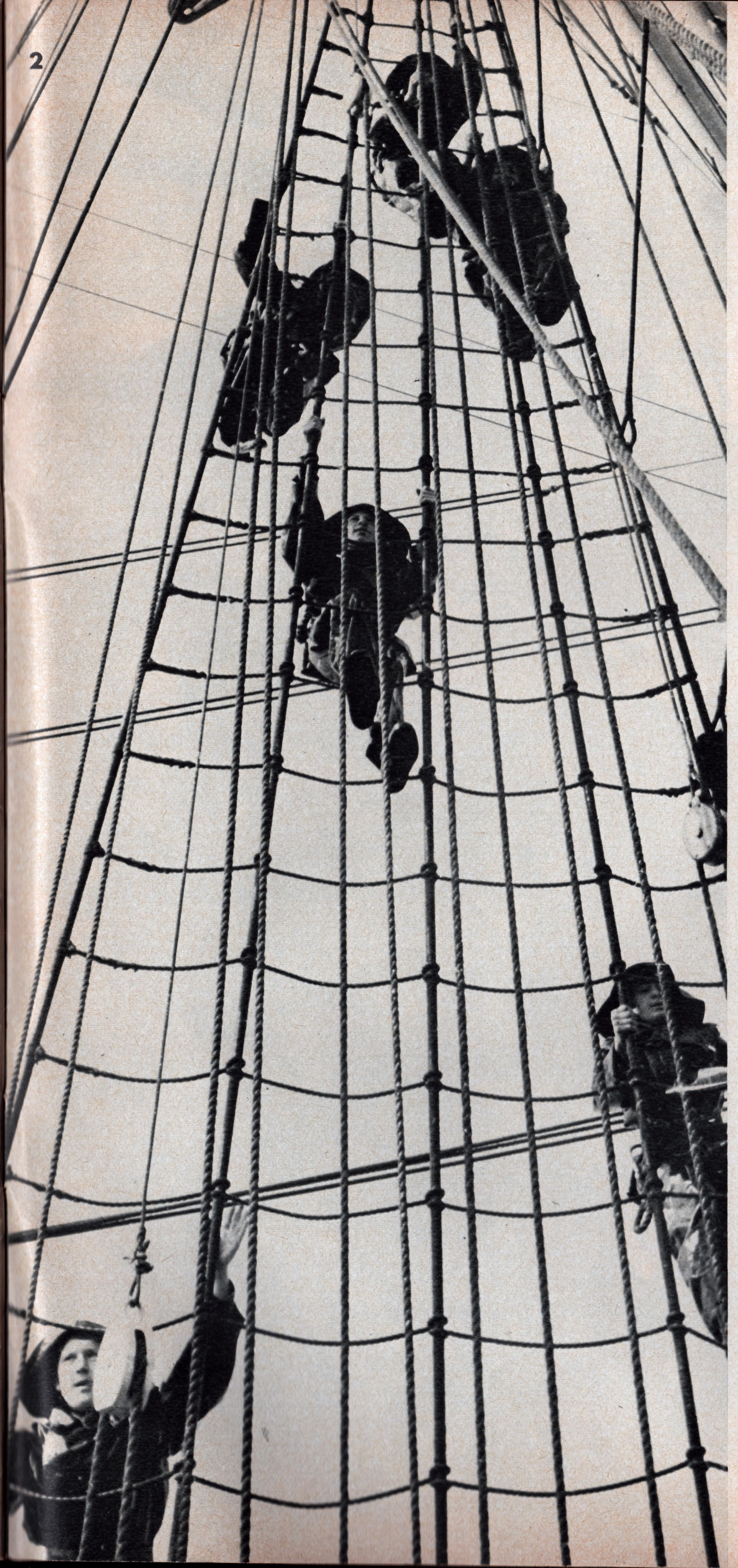
しかし、本物の海の男は実際の航海で作られる。だから学生たちは、年に2ヵ月から6ヵ月間、練習船で航海に出かける。



オデッサ商船大学にはこのような練習船が5隻ある。学生たちははじめは水夫の仕事を学び、次に機関部や操舵室での実習を受ける。最終学年になると、学生たちは船の操縦も任される。

帆船〝タワーリシチ〟（同志）号での実習も、必修だ。この帆船の25回の航海で、オデッサ商船大学の学生七〇〇〇人が実習を終えた。若者たちは嵐や凪（なぎ）との闘いで本物の海の男になる。彼らは肉体的にも、精神的にも鍛えられ、機転や慎重さ、分別のある勇気を身に付けて行く。そして、海の友情を大切にし、どんな時にでも友人を助けるためにはせ参じる心構えを大事にすることを学んでいるのだ。

オデッサ商船大学の学生たちを乗せた3本マストの〝タワーリシチ〟号は、一九七四年、一九七六年の2回、このクラスの帆船の国際レガッタで優勝を飾った。〝タワーリシチ〟号の乗組員たちが数日過ごした米国バルチモア市で、やはりこの大学の卒業生である船長のオレグ・バンデンコは市民たちから質問攻めに遭った——「こんなに明るい、規律正しくしかも勇気のある若者たちを、あなたはどこで見つけたのですか？」と。





1　商船大学の教員と学生たちはオデッサ少年航海クラブの活動をいろいろと後援している。

2　帆船〝タワーリシチ〟号での訓練。「帆を張れ！」の号令一下、練習生たちは帆げたをめざして駆け上がる。

3　授業が終わった…

ソ日経済協力シリーズ③

発展するライセンス貿易

V・タラネンコ

技術的達成の交換

世界経済の全部門をとらえている科学技術進歩は、学術・研究活動と実験・設計作業の実施にともなって増大の一途をたどる支出と直接に結びついていると同時に、そのような支出の結果でもある。しかし学術・研究活動と実験・設計作業への支出と、それによって得られた結果の大きさは、さまざまな理由により、国によって異なる。このような事情から、さまざまな国、機関、会社の間の科学技術的達成の交換が商業ベースでの交換をも含めて、たえず拡大されている。

このような交換は互恵的なものであり、また例外なくすべての国の科学技術進歩の発展にいちじるしく寄与している。

わが国は建国以来60年間に、経済、科学、技術の面で長足の進歩をとげた。

ソ連は現在、自国のすべての国民経済部門に現代的な設備を保障することができるし、現実に保障している。世界の先進工業諸国の専門家に認められている最新の機械と設備、ユニークな技術工程がソ連の学者と技術者の手で開発されている。

ライセンスの輸出公団

ソ連の諸機関は近年、「リツェンズイントルグ」（全ソ工業所有権輸出入公団）の協力と援助のもとで、工業の発達した資本主義諸国をも含めた世界の数多くの国へソ連の発明と技術的成果を輸出するようになった。

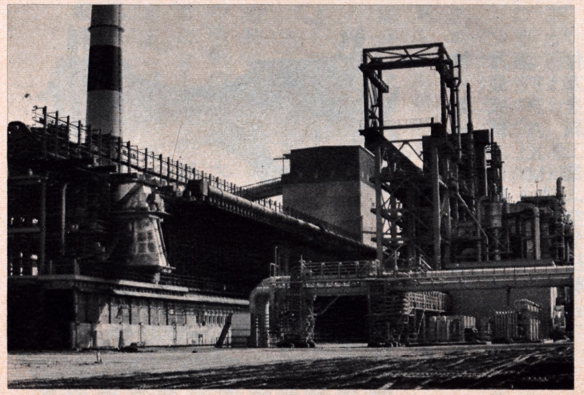
全ソ工業所有権輸出入公団は、すべての工業生産部門で学術・研究機関と企業が開発したソ連の技術にたいするパテント、ライセンス、ノウハウ（技術情報）を販売する外国貿易業務を行っている。同公団は、ソ連の企業で外国の会社や機関の専門家を訓練することによって、また外国の会社や機関の企業にソ連の専門家を派遣することによって、ライセンスの買い手に技術的援助を与える義務を引きうけている。

この場合、全ソ工業所有権輸出入公団は、自己が引きうけた義務の遂行に関連したさまざまな技術的問題の解決にあたって、学術・研究機関、ソ連と連邦構成諸共和国の科学アカデミー、さまざまな工業部門の生産企業などの資格の高い専門家、また世界的に有名な学者や有能な技術者らの協力を広く得ることができる。こうしたことから、外国の諸会社は公団と進んで協力するようになっている。

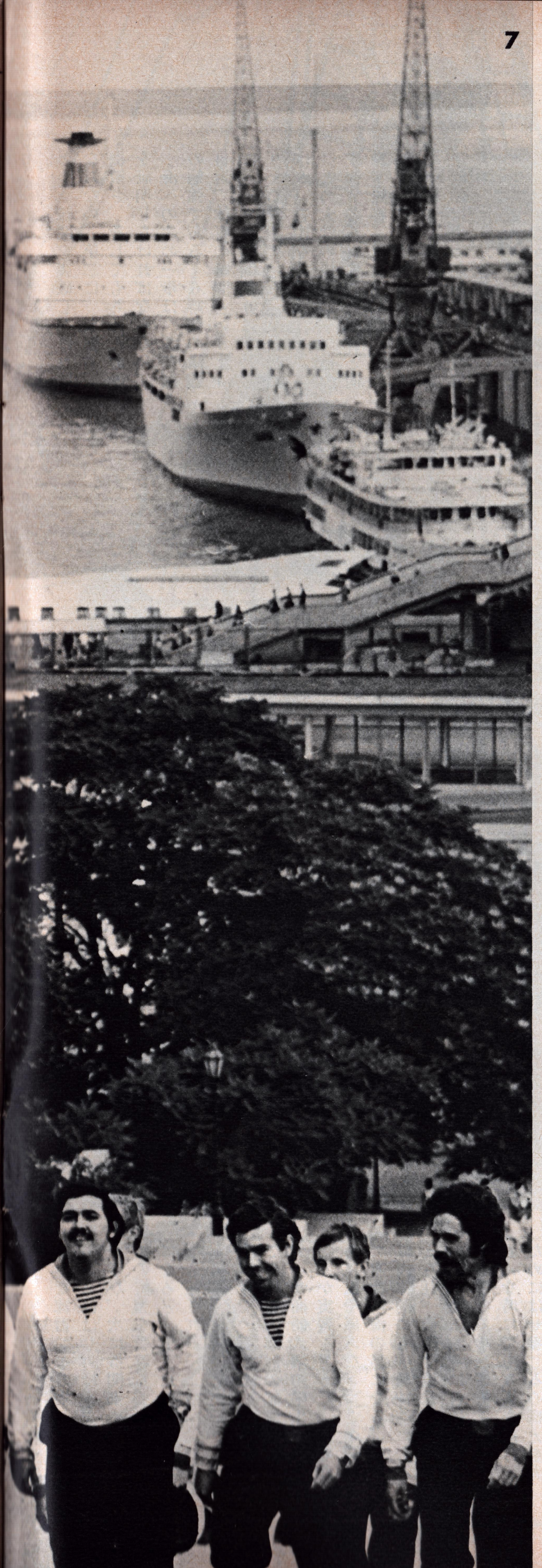
そのほか、同公団が、入念に選び出され、すでに実用化されている技術のライセンスを提供していること、また公団が業務を遂行するにあたって、ウラル重機工場（ウラルマシ）、レニングラード・メタリーチェスキー工場、パトン記念電気溶接研究所、国立冶金工場設計研究所（ギプロメズ）、中央機械製作技術研究所（ツェニイトマシ）などといったソ連の指導的な工業施設や学術・研究機関をバックにしていることも、外国の会社に公団との協力を魅力あるものにしている。

前述したすべてのことから、全ソ工業所有権輸出入公団は比較的短期間に、世界30カ国の数多くの会社や機関と確実で互恵的な商業的、実務的関係を確立し、ソ連の技術ライセンスの販売を大幅に増やすことができた。

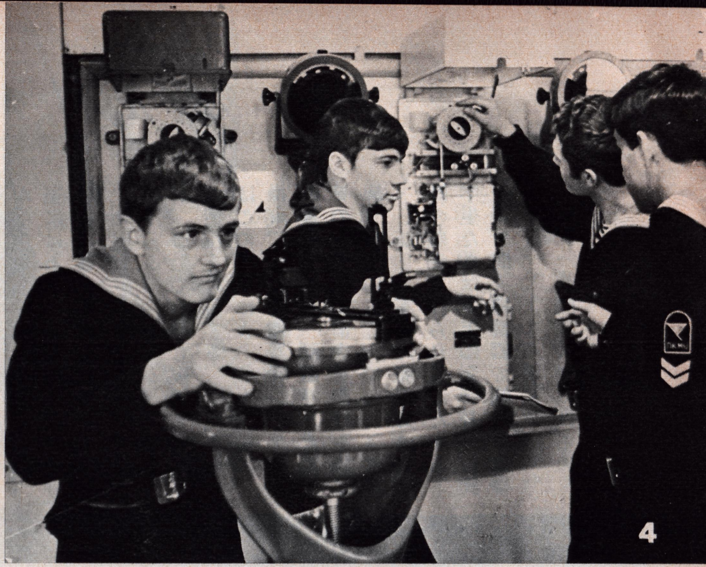
製鉄を含めた現代工業のほとんどすべての部門が、全ソ工業所有権輸出



日本鋼管・京浜製鉄所扇島コークス工場の乾式消火設備



7



4



5



6

4 航海計器を学ぶ学生たち
5 モダンな学生寮。"客船"と呼ばれている。
6 語学練習室で
7 商船大学生たちはやがて、このオデッサ港を出入りするソ連商船隊の船で働くようになる。

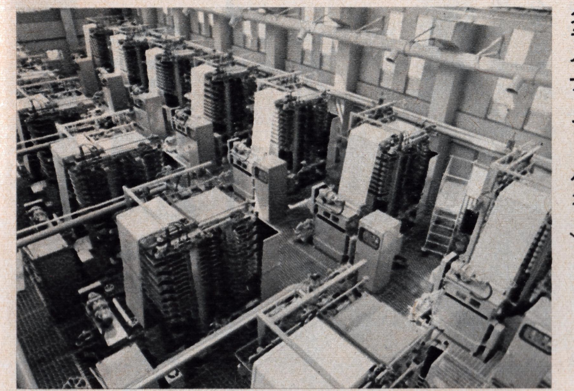
入公団の取扱い品目に反映されている。

日本への技術輸出

ハリコフ市にある全ソ製鉄・発電廃棄物処理研究所が開発した高炉蒸気冷却技術もこのような発明の一つ。この技術は、ソ連の多数の高炉で採用されて優れた結果を収めた。その後、日本、米国、オーストラリア、ドイツ連邦共和国、ベルギー、イタリア、フランス、カナダ、英国、スペインその他多くの国の高炉でも応用され、同じように優れた結果が得られた。

新日本製鉄が買ったソ連のこのライセンスによって日本では約30基の大型高炉がこの方式を採用した。蒸気冷却技術のサブ・ライセンスは、新日本製鉄からさらに神戸製鋼所、石川島播磨重工業、日新製鋼、川崎製鉄、住友金属工業が購入している。

新日本製鉄技術開発部の梅根英二元専門部長は「蒸気冷却方式の使用は、世界のすべての国の金属工業にその後広く普及した転炉の出現にも比肩すべき製鉄業における新しい注目すべき段階」と呼んだ。



月島機械が製作し、大阪府大庭浄水場に設置されたフィルター・プレス（ウクライナ・フィルター）

外国の多くの会社はソ連で開発された鋳型・中子用自硬剤の製造・利用法に大きな関心を示した。日本鋳造株式会社、日本鋳造普及協会を含む15社がこの技術を利用するためにライセンスを購入した。

日本鋳造の坂本光彦取締役はこの工程を次のように評価した。「一九六九年に川崎市の私たちの工場が全面的に自硬剤を使用してからは、鋳造の生産高は大幅に伸びただけでなく、自硬剤のおかげで鋳造生産の作業量は30％減りました。労働条件が本質的に変わったのです。ダストは減り、騒音、振動のレベルが下がりました。肝心なことは、自硬剤の導入によって鋳型と中子の製造工程を集中管理することができるようになったことです。鋳物の質も改善されました」

パトン記念電気溶接研究所で開発した新しい方法や工程、とくに金属と合金の電気スラグ溶解工程に多くの先進工業国が強い関心を示している。フランス、米国、スイス、オーストリア、日本の会社がこの工程のライセンスを買った。

日本真空技術株式会社が新日本製鉄のためにソ連のライセンスで製造した電気スラグ溶解炉（インゴットの重量40 t）は、すでに3年間順調に使用されている。

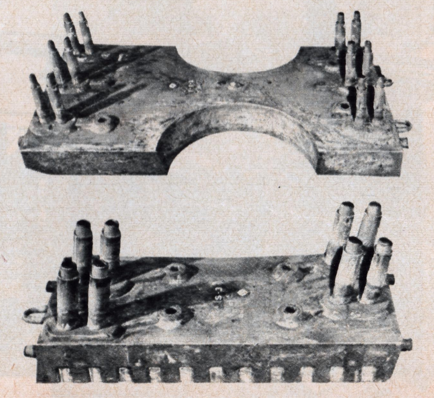
ハリコフの国立コークス化学工業企業設計研究所によって開発されたコークスの乾式消火法はソ連や諸外国のコークス化学企業に広く導入されている。日本、米国、イタリア、西独、スペイン等の諸会社がこの技術のライセンスを買った。このライセンスを買った新日本製鉄、日本鋼管、石川島播磨重工業はコークスの乾式消火装置の建設と始動を成功裏に実現した。日本鋼管は最初の装置を始動させたのち、第二期のコークス乾式消火装置建設に取りかかっている。全ソ工業所有権輸出入公団は日本の他の諸会社との間にも良い実務的関係を確立している。

これまでソ連のライセンスは、たとえば次のような日本の会社によって成功裏に利用され、あるいは今も利用の過程にある。

神戸製鋼所（連続鋳造設備）
月島機械（自動フィルター・プレス「FPAKM」）
住友金属工業（空気圧輸送）
東芝セラミックス（サファイアの結晶成長）
石川島播磨重工業（圧延設備用PVローリング）
東洋エンジニアリング（チェキノ廃液燃焼装置とギアプ回転薄膜蒸発器）

全ソ工業所有権輸出入公団はパテント、ライセンス、ノウハウの輸出とならんで、ソ連国民経済の事実上すべての部門のために外国からライセンスを買い付けている。近年同公団は、村田製作所、製鉄化学工業、小野田セメント、岩崎電気等とライセンス協定を結んだ。

☆ ☆ ☆



新日鉄がソ連のライセンスで導入した高炉冷却装置

日本側当事者は語る

成功した技術導入

月島機械株式会社
取締役・営業本部副本部長　黒板　行二　氏

わが社がソ連からライセンスを買ったのは、このFPAKM型自動フィルター・プレスが初めてです。

このフィルター・プレスは、日本国内では商品名をウクライナ・フィルターとしていますが、主に上水道の砂泥処理や下水処理に使用されています。また化学工場からの引き合いもあります。フィルター・プレスの一九七六年までの売上げ実績は、一九三台で、上水用に一三九台、下水用に44台、その他が10台となっています。

フィルター・プレスに要求される性能は、原水に含まれる砂や泥を自動的に脱水処理することであり、また脱水処理能力の大きなものが要求されています。この点で、ソ連の自動フィルター・プレスは優れており、また従来から日本にあるものよりも大型であるということで、このライセンスの導入に踏み切りました。わが社のあげた実績に対しては、全ソ工業所有権輸出入公団から高い評価を受けており、こんなに成功した技術導入は他にないのではないかと考えています。

今後も新しいライセンスがあれば、どんどん取引に応じて行く構えでおります。またソ連からわが社に対する引き合いもあり、今後のソ連との貿易関係に明るい見通しを持つことができます。

省エネルギーを促進するソ連技術

日本鋼管株式会社
重工技術部部長　徳屋　章彦　氏

当社は一九七二年4月にソ連からCDQ（コークス乾式消火設備）のライセンスを導入しました。

この乾式消火設備は、省エネルギーの面で大きな効力を発揮しております。たとえば、京浜製鉄所扇島コークス工場に設置した設備の場合には、同所の生産工程で使う蒸気の33％をこの設備から自家調達しております。なお同所で稼動中のものは、コークス冷却能力70 t／hのものが3基あり、これが完成すれば、前記の蒸気調達率は67％に高まる見通しです。投資金額の回収面でもこの発生蒸気の有効利用が大きな役割を果たしています。

CDQライセンス以外に、一九七四年にわが社は、海底パイプラインのフラッシュバット溶接設備（パイプ端を電気溶接する装置）の製造技術を導入しております。

以上のようなソ連の技術を導入することにより、当社はかなりの経済効果を上げています。今後とも当社が必要とする技術はどんどん導入して行き、また当社の保有技術でソ連が必要とするものは積極的に販売して行きたいと考えています。

製鉄技術の発展に寄与

新日本製鉄株式会社
設備技術センター製銑プラント
エンジニアリング部長　長谷川　晟　氏

高炉体の従来の冷却技術は、不備な点が多く、高圧操業に不適でした。ソ連の高圧操業のレベルが高いことを知り、当社はこのソ連の冷却技術（ステーブ方式）を導入しました。

このソ連の冷却技術は、高炉のガス漏れがなく、高圧操業に適しており、整備費も安く、整備も容易で、また運転費が安く、労働負荷も少ない、という利点を持っています。

一九六九年に名古屋および室蘭の製鉄所でこのステーブ技術が最初に採用されました。その後この技術の優位性が認められ、他所でも広く採用されるようになりました。

ステーブ技術導入後の成果として高炉の長寿命化に寄与し、炉体の均一冷却が行われ、冷却強化がされると同時に生産性の向上に大きく寄与しました。

このほか、コークス炉から赤熱コークスの熱を蒸気として回収し、エネルギーの再利用をはかり、合わせて環境保護対策の一手段とするために、ソ連の乾式消火技術を一九七三年に導入しました。

ソ連から導入された高炉冷却技術は当社において幾多の改善がなされ、この技術の発展に大きく寄与しています。またコークスの消火技術も、省エネルギー、環境対策に役立ち、コークスの品質が向上し、高炉の操業に大きな貢献をしています。

インド洋を平和な海に!

S・ウラジーミロフ

軍縮は時代の命令

現在、軍縮交渉で討議されている問題の範囲はきわめて広いが、インド洋水域における軍事活動縮小のテーマは、その中でも比較的新しいものである。インド洋に関連する若干の諸問題についてのソ米間交渉は、わずか半年前に始まった。交渉の本質は、地球のこの広大な地域での軍拡競争の展開を中止し、そこに存在する軍事的緊張の根源を取り除くことにある。

このような目的の達成は、多くの国、とくに一〇億人以上が住んでいる沿岸諸国にとってとくに緊要である。この地域の諸国は、インド洋が軍事的対決の舞台になりはしないかということに強い関心を持っている。これらの国にとってこれは、言葉の直接の意味において民族安全の問題である。すでに数年前、この地域の諸国がインド洋地域を平和地帯に変える構想を国連に提起し、この構想の具体化をねばり強くかちとろうとしているのは偶然ではない。

インド洋で軍拡競争が展開されるのを防ぐことは、わが国にとっても大きな意義を持っている。ソ連ヨーロッパ部とソ連極東地域とを結ぶ、一年中通行可能な唯一の水路がインド洋を通っているからである。欧州またはアジアの他のいかなる国もこのような立場に置かれていない。

米国、西ヨーロッパ諸国、日本、その他の資本主義国もまた、インド洋における軍事的緊張緩和に関心を持っているにちがいないと考えるのが論理的だろう。ここを通る水路によってこれらの国が消費する石油や他の原料資源の大半が輸送されているからである。

インド洋水域の状況には、他の特殊性もある。すなわち軍拡競争はある程度この水域を巻き込んでいるとはいうものの、ここではむしろその初期の段階にあるということである。そこでは鋭い軍事的緊張はない。従ってその起こりうる発生を防止することは今からでも遅くない。

ソ連の立場

ソ連の行動はこの目的に完全にこたえている。わが国はインド洋に軍事基地を設置したことはなかったし、いまも設置していない。また戦略的軍事力を集中していない。ソ連の艦艇が時としてその水域を航行しているとすれば、それは航海と科学的研究の自由にかんする国際法規に厳格に従って行われているのである。沿岸諸国の港にソ連の艦艇が立ち寄るのは、飲料水や食料の補給のためか公式友好訪問の時だけである。

ソ連は、インド洋に緊張状況をつくり出すような措置をとらないことについて合意するよう再三提案した。長い間これらの呼びかけはワシントンの反響を呼び起こさなかった。反対に、米国はすでに一九六〇年代の末からこの地域で軍事活動を活発化する方針をとった。時には空母を含む米国の大艦隊が定期的にインド洋に派遣されるようになった。フランスの空母、英国の巡洋艦もそこに現れるようになった。米国の艦艇は、オーストラリアを含むインド洋沿岸の同盟諸国の基地と港湾をますます利用するようになった。米国、イラン、パキスタンの艦艇が参加したCENTO(中央条約機構)の海軍演習は定期的な性格を帯びた。一九七五年から米国はジエゴガルシア島の海軍基地と空軍基地の拡張に取りかかったが、それはこの島を戦略的軍事力の拠点に変えるためである。

当然、こうしたことすべては沿岸諸国の不安を呼び起こさないわけにはいかなかった。ソ連も、米国やその同盟国の軍事力の増強に無関心ではいられなかった。なぜならインド洋水域の一部区域、なによりもその北部と北西部の水域は、核ミサイル時代の尺度によれば、わが国の南部地域までごく近いからである。戦略的見地からこの状況の意義は明らかである。

唯一の近道は共同の努力

七〇年代半ばになってから、ソ連はインド洋における大規模な軍拡競争の展開を防止するための努力を断固とし

て強化した。ソ連は他の多くの国と一緒に、国連においても、迫りくる危険に断固反対した。

このような努力の最初の結果が、昨年現れた。カーター政権は、ソ連とインド洋における軍備制限にかんする交渉に取りかかる用意があることを表明した。両国代表団の会談は一九七七年6月22日に始まった。それ以後会談は定期的に行われている。

明確な信頼できる協定が必要

この交渉はどんな結果をもたらすことができるか? 交渉から何を期待することができるか? 問題の抜本的な解決がもっとも効果的であることは明らかだ。ソ連がたえず提案してきたのは、まさにそのことである。一九七六年9月28日に国連へ提出された軍拡競争中止と軍縮問題にかんする覚書の中で、これについて具体的な提案が行われた。その提案は、インド洋地域ですべての外国軍事基地を撤去することについて合意すること、新しい基地を設置しないこと、非沿岸諸国の軍事的存在を相互に縮小することである。この提案はその後再三ソ連側から確認された。

一時は米国も抜本的な解決に同意しようとしているように思われた。しかしその後、米大統領を含む米国の高官は、この問題の解決は段階的でなければならない、インド洋における双方の積極的な軍事活動の〝安定〟または〝凍結〟から始めなければならないと言うようになった。

もちろん、軍縮問題解決の抜本的な方法は、つねにより多くの効果を約束している。しかしもし双方の一方にそのための用意ができていないならば、漸進的な、段階的なアプローチを利用することも可能である。このためにはこのアプローチの適用にあたって、双方はすでに第一段階として重要な、現実的な措置について合意することが必要である。従って、問題にされなければならないのは、すでに第一段階で、今日までインド洋にはなかった兵器の体系をそこに導入したり、その水域、沿岸、諸島で展開したりすることを禁止し、インド洋水域における艦艇の存在、およびその上空や飛行場における軍用機の存在を現在の水準にとどめ、そこに新しい軍事基地を建設することを拒否し、既設基地の拡張を中止することである。

インド洋地域での軍備制限とそこでの積極的な軍事活動の〝凍結〟にかんする協定はまた、いかなる抜け穴も含まず、内容が明確であり、適用においては信頼できるものにすることが重要である。軍備制限にかんするあらゆる協定と同様に、その協定はそのすべての規定において双方の平等と同等の安全という原則にもとづかなければならない。

だれが交渉を妨げているか?

ソ米交渉はまだ終結にはほど遠い。交渉は実際的な段階に入ったばかりである。しかし、報道によると、交渉は前向きに進められており、このことは世界の到る所で一定の期待を込めて受け取られている。つい最近、国連総会はその決議の一つでこれを指摘した。しかしもしそうならば、交渉の進行を複雑にし、交渉の目的と可能性にかんして国際世論をまごつかせるどんな試みにたいしても適時に、断固反撃を加えることがなおさら必要である。だが、このような試みは依然として行われており、しかもさまざまな方面から行われている。

かつて高い地位を占めていた米国のある退役海軍将官は、インド洋にかんするソ米交渉が〝ロシア人に大きな特権を与える〟かのように主張している。また、インド洋問題にかんする国連特別委員会での中国代表は、ソ米交渉は〝公然または秘密の軍事基地〟を設置し拡張するのを容易にすることを目的にした〝まったく許しがたい策略〟だと主張している。また、沿岸諸国の一部の活動家は、おそらく問題の本質をよく理解していないためか、あるいは他人の言葉に同調してなのかどうか知らないが、インド洋における軍備制限交渉を奇妙にもこの地域での〝勢力圏の画定〟と結びつけている。

軍拡競争中止と軍縮にかんする交渉は、複雑でデリケートな、きわめて責任のある仕事であり、その参加者にたいしては交渉の成功的な終了をめざす政治的意志を要求している。インド洋での軍事活動の制限と縮小にかんするソ米交渉について言えば、一つのことだけは疑問の余地がない——それは、もし交渉が協定の締結をもたらすならば、これは双方の相互利益にこたえ、国際緊張のいっそうの緩和に資するだろうということである。

国際婦人デー（3月8日）特集

ソ連に見る男女同権への道

社会学者 ラリサ・クズネツォワ

人は遠いむかしから、女性をめぐって、女性の姿かたちをめぐって情熱をたぎらせてきた。女性の容姿にたいする関心は衰えたことがない。女のなぞを解こうと、数多くのことが書かれてきたし、これからも書かれることだろう。問題がなくなり、論争が停止することは恐らくあるまい。実生活が新しい問題をつぎつぎに絶え間なく提起しているのである。

一九一七年の10月革命は、帝政ロシアに住む幾百万、幾千万の婦人の運命にはっきりと分水界をひいた。しかし婦人の解放とその社会的役割の向上は、それほど簡単に、容易に、急速に行われる事業ではなかった。ソビエト政権は、男女同権ということでは、まったくゼロから始めなければならなかった。若い共和国は、この上なく深刻な経済的、心理的、道徳的遺産を受けつぐことになった。このため、実際の婦人同権への道をきよめることは、それまでに形成されていた見解、原則、習慣、観念を根本から破壊し、偏見と誤解を根絶すること、つまり社会革命だけでなく、真の習俗革命をも前提としていた。

法律上の同権から実際の同権へ

社会的、道徳的再教育は、長年にわたる家父長制に慣らされてきた男たちと同様、自分たちは社会的に劣等であると感じる古くからの習わしに毒されてきた意識を持つ婦人たち自身についても行われねばならなかった。婦人大衆は、彼女たちがかたく結びつけられていた後進性の深淵から引き出されねばならなかった。

深刻な、時には苦しみに満ちた道徳的改造が長年にわたって進められたが、これに先立って、婦人を法律的に男性と同権にするという、ソビエト国家の急進的立法作業が行われた。新しい法制的基礎が、倫理と心理の新しい基礎への道を開いた。「……ロシア・ソビエト共和国は、立法上の婦人の不平等を例外なく、のこらず、跡方もなく一掃して、婦人に法律上の平等を一挙に保障した。

文化水準は婦人の法律上の地位によってもっともよく特徴づけられる、と言われている。この言葉には深い真理の一片がある。そしてこの見地からすれば、プロレタリアートの独裁だけが、社会主義国家だけが、より高い文化水準を実現することができたし、また実現したのである」（レーニン全集、日本語版、第30巻四二二ページ）――これはV・I・レーニンの言葉である。

しかしレーニンは、これとは別のことをも一度ならず指摘し、婦人にとって古い、侮辱的な法律の廃止にかかわるすべてのことは、課題の最初の比較的容易で簡単な部分でしかない、これはまだただの始まりにすぎない、と述べている。レーニンは同権をめざす闘争の全体を、何かから何かへの急激な一時的努力とは見ず、忍耐を要する長期で細心の注意を必要とする仕事と見たのである。

実際の同権とは？

その時から半世紀以上が過ぎた。この間を通じてソ連の婦人たちは、法律上の同権から実際の同権へと前進した。婦人は教育と労働にたいする男子と同じ権利を得ただけでなく、生産にも積極的に参加して、法律的にも独立しただけでなく、経済的にも独立した。

ソビエト婦人は同時に、真の同権をめざして、恐らく最も重要と思われる一歩をふみ出し、社会的、組織的、国家的活動のなかでその可能性を発揮している。地方ソビエト（ソ連の権力機関である人民代議員ソビエト）の全代議員のほとんど半数が婦人である。ソ連邦最高会議では一五一七人の代議員のうち四七五人が婦人、また連邦構成共和国と自治共和国の最高会議では、九二〇〇人の代議員のうち約三五〇〇人が婦人である。婦人はソ連邦最高会議幹部会員にもなっており、また連邦構成共和国の閣僚会議の副議長（副首

相）のポストをも占め、多くの省の大臣をしている。ソ連共産党、労働組合その他の大衆的社会団体の活動のなかでの婦人の役割は大きい。

婦人は何のために働くのか？

ソ連では総労働の原則が実施されている。婦人は男子と同様、労働の権利を保障されている。この原則にもとづいて、国民経済における婦人たちの雇用は、ますます拡大する過程をたどっている。家に〝座していない〟婦人の割合は年とともに増大し、一九二二年には労働者・職員の総数にたいするパーセントはわずかに25%だったが、一九四〇年には39%に増加、一九六〇年には47%、一九六九年以降は51%が定着している。

懐疑的な読者は言うだろう――ソビエト政権が確立されてからすでに五年目の一九二二年に25%から始まったとは、婦人の労働への奮起も、なんと緩慢だったのだろう、どうも、あまり働きたくなかったようだ、と……。ひとつ事実と歴史に目を通してみよう。

一九二〇年代の初頭。内戦の終結後、男たちは生産に復帰した。言うまでもなく、かれらは婦人たちよりも技能資格が高かった。そして婦人は当然のことながら、偶然のめぐり合わせで、労働市場に婦人に好意的な状況が作り出される次の時機までは家庭に、台所に引きさがっていなければならなかった。しかし婦人たち自身がこれには驚いたのである。彼女たちは自分が失業することを望んではいなかった！ 社会主義は、両性の、景気に左右される安物の社会的同権ではなく、安定した社会的同権を保障するはずである。このため二〇年代になって、婦人を生産面で維持し確保する決定的措置がとられるにいたった。労働人民委員部、全ロシア労働組合中央評議会および最高国民経済会議の一九二二年2月20日付け決定は定員縮小の手続きを定めたが、これによると、婦人の解雇は男子と同一比率でなければ許されなかった。そのうえ、妊娠中の婦人労働者と1歳未満の子供のある独り者の婦人労働者は、優先的に自分の職場にとどまることができた。

共産党第8回大会（一九二四年）で採択された「婦人労働者と農婦の労働について」の決議のなかでは、党、労働組合、経済各機関は生産において婦人労働力を維持し、資格を向上させ、婦人労働がまったく用いられていないか、あるいは十分に用いられていない国民経済部門に婦人を引き入れる仕事を強めなければならないと述べられている。これらの施策の結果、婦人労働者の数は、一九二四年から安定の方向へ向かった。このように、当時は婦人労働者の数の安定化をはかり、婦人を解雇させず、婦人の仕事を奪わず、婦人が失業しないようにするためにたたかわねばならなかったのである。

労働の領域におけるソビエト婦人の位置が教育の領域におけるその位置とかたく結びついていることは言うまでもない。革命はまさしく教育一般のブームを生み出した。婦人の教育についてはとくにそうだった。ソビエト政権確立の当初から始まったこのブームは、こんにちもおさまってはいない。一九七七年には、高等、中等専門教育を身につけた、この国のすべての専門家のうち、その59%が婦人だった。

働くことが当たり前

ソ連では、技師のほとんど半数が婦人、医師の4人のうち3人が婦人、一〇万二〇〇〇人以上の婦人が博士と修士の学位を持っている。約二五〇〇人の婦人がソ連科学アカデミーと各共和国アカデミーの正会員あるいは準会員であり、大学教授である。

知識と仕事を身につけ、すでに独立の空気を吸っている婦人にとっては、家に座っているか、それとも仕事に出かけるかは恐らく問題になるまい。

ほとんど10年（！）も前にモルダビア共和国（ソ連欧州部の西南部）で実施されたアンケート調査の結果から見てもこの点は明らかである。

当時すでに70%の婦人が、仕事を離れて全面的に夫あるいは親の世話になることは望まないと答えている。この割合は若者の間ではさらに大きかった。このような調査を、もし現在実施したとすれば、この関係は$\frac{7}{10}$ではなく、$\frac{9}{10}$になるものと推定できる。

このような関係の推移は自然の成り行きである。というのは、婦人にとっては仕事をすることが常規であって、家にいることは常規からの逸脱であるという意識が年ごとに強まっているからである。そのうえ婦人の教育水準はたえず向上している。そして婦人が教育を身につけていれば、家に座っていることは彼女を苦しめるだけだ。知識はつねに、実際に用いられたいという強い衝動にかられるものである。したがって、今や婦人は、自分が教育を身につけているという事実自体によって解放されるのである。たとえばレニングラードの婦人労働者の間で行われた

社会学的調査は、中等教育を受けた婦人たちの場合でさえ、仕事を辞めたくないものが全体の93%を占めていることを示している。

仕事プラス家事……

しかし母親である婦人が仕事に出て、自分の真価をりっぱに発揮するためには、彼女の家庭は調子の乱れを知らないメカニズムでなければならない。そしてこの場合、言うなれば家庭の〝機械技師〟となるのは普通は主婦、母親、妻である。彼女たちは、複雑な家庭装置の活動を狂わせる故障をいち早く見つけて、このような故障から免れるよう最大限の努力をはらうのである。もしも職場が家から余りにも遠すぎるような場合、婦人労働者はこのことを不満とし、もっと近いところに仕事を見つける努力をするようになる。家の近くに子供の施設があるかないかということも、小さい子供を持つ婦人にとっては、無関心ではいられない事柄だ。

他方、赤ん坊が生まれれば、母親は数カ月にわたって、時には数カ年にわたって仕事を休まないわけにゆかない。

言い換えると、婦人の転職、職場の変更あるいは勤務期間の中断は家庭の事情による場合が最も多いのである。

ところが男子の場合、転職、職場の移動、退職、労働の中断は主として、〝より適したもの〟の探求、つまり興味があって賃金がよく、将来性のある仕事の探求のためである。

これらすべてのことは、婦人を家に、私事に結びつけている糸の方が、彼女を企業に、労働に結びつけているものよりも強い場合が多いことを証明している。しかしこのことは、興味のある、資格の高い労働に従事したいという婦人労働者の熱望を少しも弱めるものではなく、その労働の内容が充実していればいるほど彼女をいっそう強く〝引きつける〟のである。婦人の技能等級が高ければ高いほど、職務上の地位が彼女の気に入っていればいるほど、〝家庭の事情〟が問題になることは少なくなるのである。婦人はこの〝家庭の事情〟のために、自分の仕事上の運命を何ほどか変えているのである。

婦人への特典とサービス

婦人が家事にどれだけの時間をついやしているか、台所にいるのは一週間に何時間か、子供といっしょにいる時間は、洗濯や片付けについやす時間は――こうした細かい計算がソ連の初期の社会学者たちにより、はやくも一九二〇年代と三〇年代に行われている。

しかし婦人の全般的雇用が安定的現象となった七〇年代の初めごろ、問題は切実な性質を帯びるにいたった。

婦人の職務上の昇進はどのように行われるか、このための条件と障害は何か、男子と比較して婦人の仕事上の可能性はどのようなものかなどの問題が精力的、集中的に研究された。

家庭、家事、男女の心理学的差異、労働の生理学、疲労その他にかんする一切のことも詳細に研究された。

言うまでもなく婦人は、〝肉体労働者〟としては男子労働者よりもかなり劣る。なぜなら婦人の体力は男子の体力の約0・6だからだ（婦人の筋肉の力は年齢とともに変化する。最も大きいのは20歳のときだが、それでも男子の筋力の65%にすぎず、最も小さいのは55歳のときで、男子のわずか54%）。

同時に、婦人の働こうとする志向は普通、客観的現実に、つまり家事を見、子供の養育に多くの時間と力を割かねばならぬという現実に結びつけられている。もちろんこの故に国家は、労働における婦人の同権が婦人にとって耐え難い負担にならないようにし、婦人のために便利な一定の社会施設を設け、生活と家庭の多くの問題の解決を容易にする措置をも講じているのである。

ここではまた、子供の就学前教育施設や学童保育施設の広範な施設網がとくに重要な役割をはたしている。また働く母親への一定の特典、サービス施設の生産現場への接近その他多くのことも重要な役割を演じている。

国家と社会は、婦人が家庭で多くの義務を遂行していることを考慮して、婦人の労働条件を軽くするために、可能なあらゆる措置を講じている。男子と平等だというのは、権利において平等だということで、男子と同じことを要求されるということではない。

レーニンが、婦人労働について述べ、次のように強調したのは偶然ではない――「問題は、労働の生産性、労働の大きさ、労働時間において、労働条件その他において婦人を同等視することではない」

婦人とはそも何者？

それにしても、心理現象のなかには、婦人だけに特有のなにものかがあるのだろうか。婦人は優しくて親切、愛想がよくてなごやか、従順、侮辱にたいして敏感、献身的でがまん強い、少しばかりあくせくしておしゃべり、気まぐれで弱々しく、気分やで衝動的だ、という意見が広く行われている。もっとたくさん列挙することもできよう。

しかし婦人のまったく別の特質を列挙することもできるのではないか。われわれは断固としていて忍耐強く、精力的で皮肉やの婦人、鋭く、敵意に満ちた、頑固な、危険で峻厳な婦人を知っている。これらの特質を、前記の一連の〝優しい〟特質と、どうすれば調和させることができるだろうか。これはどうしても一致させることはできない。なぜなら、われわれが列挙しているすべては、生活上の観察と比較にもとづくものであるからだ。ここには客観的・科学的認識がまったくない。

しかしこのことは、われわれが、ごくありふれた意識のワクの中で、婦人を男子とは異なった別の心理的現象として理解することを妨げるものではない。このため、婦人がとくに〝女性的な〟狭い生活領域のなかで生活するのは自然の摂理であるという結論には科学的確証がないのである。

しかしわれわれはここでは、差し当たって実地に優る真理の規準を見出すことはできない。そしてわれわれはいま、労働一般の世界に婦人を最も広範に引き入れる道を大胆に進んでいるだけでなく、婦人にたいして〝上に向かって〟進む道を全面的に保障するためにも努力しているのである。

ソ連憲法と婦人の権利

昨年採択されたソ連邦憲法はその第三五条にソビエト婦人の地位について次のように規定している。

「ソ連邦においては、男女は平等の権利を持つ。

これらの権利の実現は、一般教育と職業教育、労働、労働にたいする報酬、職場での昇進、社会・政治活動および文化活動において男子と平等の可能性を女子に与えることにより、また女子の労働と健康の保護にかんする特別の措置により、女子が労働と母性を結合できる条件をつくることにより、妊婦と母親への有給休暇ならびにその他の特典の提供、年少の子どもを持つ女子の労働時間の漸次的縮小をも含めた母性と子どもの法的保護と物質的精神的支持によって保障される」

ここで指摘しておくが、審議に付せられた憲法草案では、われわれがここに引用した条文の最初のくだりとは異なり「ソ連邦において女子は男子と同等の権利を持つ」となっていた。男子の権利が基準とされ、これに婦人の権利が比肩されるという草案の規定は、草案の全国民的審議の過程で当然の批判を受けて修正されたのである。



時計の組立ては熟練と根気を要するデリケートな仕事……

時計工場は女性の職場

——第二モスクワ時計工場から

イーゴリ・ツィガノフ　カメラ　A・ガガーリン



第二モスクワ時計工場の組立て職場の一つ。この工場では全従業員1万1000人のうち、7割以上が婦人である。



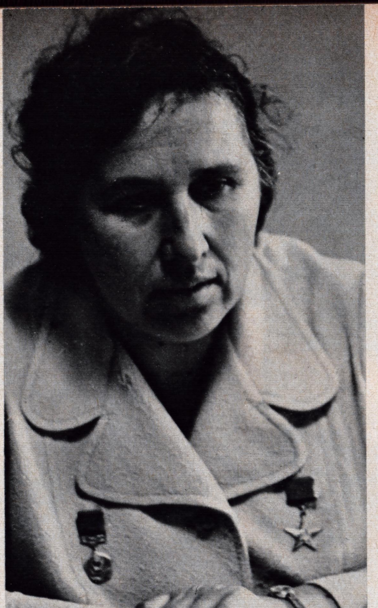
時計を組み立てている婦人たちには、特に運動が必要。コンベヤ労働の疲れをいやすために職場体操が行われている。多くの婦人はさらに工場のスポーツクラブに参加している。



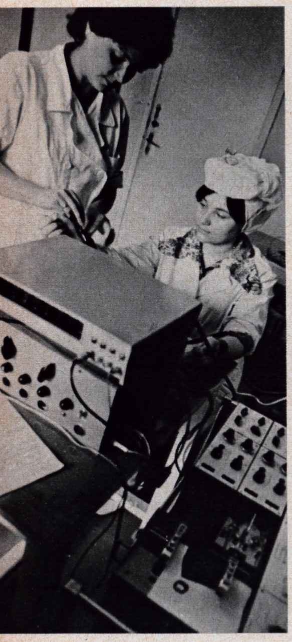
工場のクラブにある舞踊部は婦人従業員たちの人気を集めている。写真はモルダビアの民族舞踊を練習する組立て職場の娘たち。



工場の中央測定実験室に勤めるワレンチナ・デニソワに女の子が生まれた。さっそく、同僚たちがプレゼントを持ってお祝いにやってきた。



組立て工のアントニーナ・ボフメリノワはモスクワ市ソビエトの代議員。少なからぬ時間を選挙民との面会、依頼や公約の遂行に当てている。



▲職業技術進路指導室ではこういう装置を使って新人のテストをする。新人が自分に適した専門職種を選ぶのに威力を発揮している。

それはモスクワの中央にあって、ごく平凡に第二モスクワ時計工場と呼ばれている。向かい側にはベロルシア駅があり、ここのプラットホームからは毎日、ワルシャワ、ベルリン、パリ行きの列車が発車している。第二モスクワ時計工場で作られた時計も、この駅から前記各地のほか多数のあて先に向けて発送されている。

工場の小さい博物館には、工場の写真、表彰状と賞品、そしてもちろん各種の時計などが陳列されている。時計の中には懐中時計、小型の腕時計、直径半メートルの街頭時計、卓上時計などがある。そして工場の50年の全歴史がこの博物館のなかに反映されている。しかし50年間に、製品、工作機械、技術などがどう変わったとしても、確固として不動のものが一つだけある——それは時計の質である。この時計の質は、要するに正確、長持ち、現代的、という三つの言葉で表わすことができる。

こんにちの第二モスクワ時計工場は、時計工場としては世界有数の大工場である。そして年間八〇〇万個の時計を生産している。

ここでは音叉時計、電子時計、日付と曜日を示すカレンダー付きの時計なども生産されている。潜水技能士用、航空士用の時計、婦人用の首飾り、腕輪に付ける時計などもある。婦人持ちの時計だけでも、それぞれの好みに合った80種類の型がある。ここでは腕時計のほかに電子目覚まし時計も作っている。これにもさまざまな型がある。暖炉の上に置かれる、古風なひつの形に仕上げられた金張り時計も評判がよい。

ここで働いている人たちが、国の内外を問わず他の会社の時計よりも自分たちが作った時計の方を選んでいることが、この工場の製品の質を何よりも証明している。かれらは時計の真価をよく知っているのである。ついでに言えば、ここの多くの婦人労働者が永年勤続にたいする賞として名前入りの時計を授与されている。

時計の組立てはデリケートな仕事である。世界のどこでも同じだが、ここでも婦人の手がこの仕事をしている。工場の一万一〇〇〇人の従業員のうち70%以上が婦人である。この仕事は刺しゅうか編み物に似て、根気と熟練を必要とする。

婦人従業員の数は七五〇〇人。彼女たちは時計を組立て、工場食堂で食事を作り、生産計画を立て、工場診療所で患者を診察し、会計課で計算書を作成し、その他あらゆる作業場、部局で働いている。

体育とコンベヤ

生産の過程で体操をすることは、さまざまな企業ですでに普通のこととなっている。この時計工場では、婦人たちは毎日15分の体操をしている。特別の体操を行うことによって疲労を去り、一日を元気に働く活力が出てくる。婦人時計師たちの労働保護はここから始まるのである。さまざまな側面をそなえているコンベヤ式生産の条件下では問題は複雑である。

たとえば、女性の時計組立て工の場合、仕事上の主な負担がかかるのが目であることはよく知られている。このためこの工場では、視力管理がとくに入念に行われている。工場診療所は婦



"祝日の夜、工場のクラブで何をするのが一番いいかしら？"——同僚たちと相談する第19職場のコムソモール活動家ターニャ・アキモワ。

人労働者について定期的に視力検査をしている。そのうえ、全従業員が定期的に総合的予防検診を受け、この検診で、病気にかかる恐れのある人々が発見されている。食餌療法を必要とするものにたいしては、労働組合が無料の食券を交付し、この食券で工場大食堂あるいは多数のビュッフェで必要な食事を受け取ることができる。

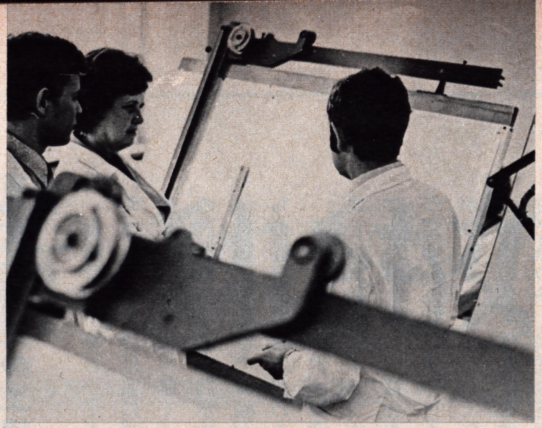
工場の従業員は工場診療所の医師のほかに、市内のさまざまな医療施設で資格の高い専門医の診察を受けたり、これらの専門医に相談したりしている。

従業員の健康を保護しているのは医師だけではない。工場の労働組合委員会は、すべての作業場で、照明が科学的に根拠のある基準にかなっているかどうか、温・湿度調節装置が正常に作動しているかどうか、温度条件が保たれているかどうかを監視している。組立て工場のコンベヤで働いている人々のためには、作業に合わせて流される音楽の曲目が定期的に新しいものに替えられている。

賃金のほかに

婦人時計師たちは、自分の毎月の賃金だけにもとづいて家計上の予算を立てているのではない。働いているものはそれぞれ、二つのフォンド（基金）——工場長フォンドと労働組合フォン







工場の大学——全ソ通信制機械工業大学分校の授業風景。若者たちはここで働きながら大学教育を受けている。

上　多くの職場で婦人が指導者になっている。工場の副設計技師長ナジェジダ・リソフスカヤ（写真）もその一人。若い男性技師たちの設計を注意深く検討中。

下　工場の労働組合委員会には婦人委員会があり、婦人従業員の労働、生活、休息の改善に積極的に取り組んでいる。

ドからの追加の物質的刺激を期待することができる。このような奨励金用としてだけでも、年間二五〇万ルーブルが割り当てられている。工場当局はこのほかに、年間一五〇万ルーブルを工場クラブ、工場所有の郊外休息施設、幼稚園と保育所、工場診療所その他の施設の維持と近代化のために支出している。ソ連の他のすべての企業の場合と同様、労働組合はここでも、工場内の諸問題の解決で重要な役割を演じている。工場労働組合委員会のなかで特別の役割をはたしているのは婦人委員会である。婦人委員会は婦人労働者の労働、生活、休息の改善を目的とする提案を作成している。提案はその後、工場当局によって検討され、実施に移されるのが通例である。

赤ん坊が生まれたら

交替時間が終わるころになると、工場の通用門前の広場は男性でいっぱいになる。妻や女友達を迎えに来ているのである。

この工場には愉快な伝統がある——婦人時計師の家庭で赤ん坊が生まれたときには、工場全体の働き手が自発的にお金を少しずつ出し合って、若い母親と生まれた赤ん坊に贈り物をするのである。この工場の従業員は総じて若いから、年間平均約二五〇人が4ヵ月

の産前産後の休暇をとっている。この間の賃金は労働組合フォンドから支払われる（月平均賃金にもとづいて）。同時に、月額賃金に等しい年間ボーナスが、若い母親が働いている作業班の年間作業結果にもとづいて支払われる。若い母親は出産後一年間は職場の地位を保障される。彼女の部署では、職業技術学校の実習生あるいは見習いとして工場に採用された中等学校卒業者が臨時に働く。

女子学生の工場

勤務時間が終わっても、多くの娘たちはまっすぐには家に帰らず、職場の近くにある建物へ急ぐ。そこには夜学の計器製造中等専門学校と通信制の全ソ機械工業大学の分校がある。彼女たちの労働は学習に変わるのである。

若者たちの学習への意欲は、工場当局と労働組合によって支持されている。学生たちにとって都合のよい交替時間が定められ、試験のときには有給休暇が与えられる。そして毎年、夏休みには通例の年次休暇が必ず与えられる。娘たちの多くが電力技師、建設技師、経済専門家、その他人文系の専門家などを志して学習している。なんらかの理由で中等教育を受けることのできなかった者たちは、青年労働者夜間学校で学んでいる。第二モスクワ時計工場全体では現在四三〇〇人以上が勉学に励んでいる。

ところで工場の要員はどこから補充されているのだろうか。二つの職業技術学校が資格を持った時計師を養成している。10年制の普通中等学校の卒業者も入っている。経験の豊かな職長と、職業技術上の進路指導にたずさわっている職員が、新入者の専門の選択に協力している。これらの職長と係員があれこれの作業にたいする新入者の適性テストを実施して、その専門を決めるのである。また婦人組立て指導員が若い労働者の教師になっている。この組立て指導員という称号は、資格の高い婦人従業員に与えられている。

一週間の仕事が終わるとき

金曜日ともなれば、工場の玄関に次のようなお知らせが張り出される。「土曜日と日曜日、郊外の自然の中へ出かけませんか。スポーツ競技、アマチュア・コンサート、歌と踊りのコンクールが開催されます。入賞者には賞品が出ます。軽音楽団も同行します。集合場所は工場通用門。労働組合委員会」

ここでは、このような郊外への〝集団遠足〟がよく催される。家族を同伴して、工場の船でモスクワ川に遊ぶこともあるし、工場の水上競技基地へ行くこともある。この水上競技基地はモスクワ近郊の風光明美なところにある。工場には25隻のヨットと7隻のカッターがある。これは夏の話だが、冬ともなると労働組合がしばしば、週末に郊外電車を借り切って、同好者を雪におおわれた森へスキー散歩に連れて行くのである。

多くの婦人従業員が休暇を利用して、国内の別の都市へ旅行したり、海外旅行に出かけたりしている。このような旅行の大部分は、その経費を労働組合と工場当局が支払っている。

祝日には、工場は従業員のために市内の一流のコンサートホールや劇場を借り切る。そして名の知れたプロの芸能人やアンサンブルが公演する。

もっとも、祝日といえば、それはほとんど毎日のようにある。だれかが結婚する、きょうはだれかの誕生日、あるいはだれかが新居に引っ越したお祝いとか（工場は従業員のために数多くの住宅を建設している）……このような出来事はしばしば作業班全体によって祝われる。〝主人公〟は贈り物や、お祝いには付き物の花を贈られるのである。

☆　☆　☆

トピックス

拡張されるハバロフスク空港

ハバロフスク空港の改造と拡張が開始された。あらゆる型の飛行機をさばける新しい滑走路の建設が行われている。この滑走路には、どんな天候でも飛行機の着陸ができる無線誘導装置と、灯火信号設備が設置される。安全性と通過能力を高めるため、補助滑走路（複数）の増設も予定されている。同空港はさらに最新式の設備を導入し、飛行機の整備時間を大幅に短縮する給油の集中システムが新設される。

改修後のハバロフスク空港は、一時間に一五〇〇人の乗客をさばく。また空港のそばに、合計一七一六人収容の2つのホテルが建てられる。

ハバロフスク空港には新潟やピョンヤン（朝鮮民主主義人民共和国首都）からも飛行機が飛来している。空港の改修が完了すれば、現在の空港ビルの一連の施設は国際線用に回される。これによって外国機の乗客と乗務員へのサービスが大幅に改善される見込み。

本職は数学者、それとも女優？

アダ・バスキナ

彼女は花束をもって入って来た。「きっとホテルの部屋じゃ、あまり居心地が良くないだろうと思って。女性には美のない生活なんて耐えられませんもの」――整った顔立ち、弧をえがいたまゆ、軽快な身のこなし。そこには何とも言えない優雅さがあった。これは外面的な印象だ。話をしているうちに別のことが分かってくる。私の前にいるのは、鋭い頭脳と幅広い教養の持主だということが。彼女の不思議な魅力は、いっそう大きな印象を与える。なぜなら私は、キシニョフ大学（モルダビア共和国）の先任講師で物理・数学博士候補であるこのモルダビア女性マリア・サガイダクが農民出身の一代目の知識人だということをすでに知っているからだ。

「私の両親はコルホーズ員で、いまでもモルダビアの農村――ベルフニエ・クグレシトゥイに住んでいます。私はそこで18歳まで過ごしました」とマリアは語る。

「若い頃の母は、医者かせめて看護婦にでもなることを夢みていました。しかし貧しい農民だった私の祖父は、この気まぐれにあきれかえるだけでした。なぜ娘っ子が学ぶ必要があるのか、そんな余分なカネがあるなら土地を少しでも買ったほうがましだ、と。かつての夢から母のもとに残ったのは、読書への愛と私に学問をさずけたいという熱烈な希望でした」

マリア・サガイダクは金メダルをもらって中等学校を卒業し、大学へは、入学試験の5科目すべてを〝優〟で合格して、物理・数学部へ入った。

四つの熱中

モルダビアの首都キシニョフは、マリアに数多くの新しい印象を与えた。農村の子どものための教育課程は、都会の子どものものと同じだ。しかしそれでも、マリアは自分の成長における空白を感じる。彼女は本をたくさん読んだが、それは乱読だった。映画はよく見たが、芝居は見たことがなかった。雑誌から複製画を切り抜いたことはあっても、原画を見たことはなかった。こうしてマリアは新しい趣味に没頭する。今度の趣味は音楽、演劇、体操の三つだった。

しかしのちに第四の熱中が、三つの熱中を駆逐する。

大学でマリアがむさぼるように読む数学の新刊書の中で、世界的に有名なモスクワの学者レフ・ポントリャーギン・ソ連科学アカデミー会員の論文が目にとまった。著者の科学的直感、広大な知識、容赦ない論理が彼女を驚かす。彼女は彼の著書を研究する。彼が提案した方法の一つを、彼女は自分の最初の自主的な研究の基礎にすえた。ポントリャーギンは、いわば模倣のための手本だった。彼女はいつか将来、彼と会うことを夢みる。

さらに3年が過ぎた。大学を卒業したばかりのマリア・サガイダクは、モスクワのステクロフ記念数学研究所へ、レフ・ポントリャーギンが指導する部の研究生として派遣される。

部の中はたえまない創造の精神でみなぎっていた。毎週のゼミナールでは大胆な仮説が述べられ、激しい論争が行われ、のちに国際的な出版物に発表されることになっている研究の結果が報告される。

しかしマリアは、自分と部の研究員との間の学問上の力の差を、あまりにもはっきりと感じる。次第にこれが、彼女の自尊心を病的なまでに傷つける。もっともっと学ばなければならない……

だから彼女は、かつての卒業論文の指導教官アンドレイ・プシェニチヌイ教授がキシニョフ大学の大学院課程に招いてくれた時、喜んで同意した。

テレビ局が来た学位論文審査会

物理・数学博士候補の学位を請求する自分の論文の審査会が始まる30分前。マリア・サガイダクは説明用の図を貼るために大学の講堂に入る。すると突然、照明ライトの閃

光が目をくらませる……彼女は目を開け、目の前の光景を見てすくんでしまった。左右にテレビカメラが据えられ、通路はケーブルでうずまり、尊敬すべき学者たちはそれにつまずいて、いら立たしげに肩をすくめている。

このようなごたごたは、マリアに影響をおよぼした。彼女は用意しておいた文句——「尊敬する学術評議会員のみなさん」を、やっと聞こえるような声で言うと黙り込んでしまった。教壇とならんで立っているテレビ・ディレクターがささやくように言う。「マリア、君は女優じゃないか!」気を取り直した彼女は学者の役になりきったかのように、考えておいたセリフを思い出しながら、教鞭を持って図から図へと進む。

だが、ここで説明しておかなければならない。なぜテレビカメラが? どこで女優の技術を身につけたのか? 実は、マリア・サガイダクは映画女優なのだ……

こんなわけだった。彼女の知人の映画監督エミーリ・ロチャヌーは『瞬間』という映画を撮っていた。ヒロイン役に理性的で生き生きした、情緒豊かで控え目な女優が必要だった。「お宅の奥さんはどうかな」と彼は言った。「わが家じゃ学者妻は間に合っているが、女優妻にはまだ不足しているからね」と、マリアの夫エブゲニーは冗談を言った。冗談は、時には危険なことがある……

キシニョフのテレビ局が数学者マリア・サガイダクの学位論文審査風景を撮影しに来た時には、主役としての彼女の名の載った映画ポスターがすでに三度も出回っていたのだ。多くの観客は女優サガイダクを知っていたが、学者サガイダクを知ってはいなかった。テレビ局はそこに目を付けたのだ。

論述後、彼女はまる一時間質問に答える。確信をもって、堂々と。学術評議会は全会一致で学位の授与に賛成投票をした。

少女と怪物

「湖で少女が泳いでいると、突然岸に怪物が現れます。怪物は少女を捕まえようとします。怪物は少女よりも速いのですが、真直ぐにしか進めません。少女は遅い代わりに、簡単に方向を変えることができます。怪物から逃がれるためには、少女はどうふるまわなければならないのか? この問題は簡単に公式で表わされます。解決方法はいくつかありますが、最適方法を選ばなければなりません。あなたは分かりますか?」

これは、自分の研究の要点や、講義科目の要点を私に説明しようとする彼女の三回目の試みである。彼女は夜遅くまで講義の準備をし、新しい課題、比ゆ的な例を選び出す。この仕事は、このようなテーマの教科書がないので、いっそう面倒だ——教科書は目下印刷準備中だが、その著者はほかならぬマリア・サガイダクである。

二つの職業の間で…

キシニョフ大学の数学・サイバネチックス講座のスタッフには、いまのところ女性は一人しかいない。しかし学生の間では、いまでは女性の方が多いから、マリア・サガイダクが紅一点でいるのも、そう長くはないだろう。

「専門家は自分の職業に没頭しなければなりません。いっさいの横好きは危険です」と彼女は語る。

「それでは映画は?」

「映画は私の仕事の妨げになりません。私は撮影現場のにぎやかさが好きです。活気ある仕事で結ばれた集団の中にいる自分を感じるのが好きなのです。そこでは、私は自分を抑えないで、感情のおもむくままにまかすことができるのです」

しかしマリアは自分の映画の経歴についてはたまにしか思い出さない。たとえば最近、3日間続けて夫にじゅうたんの掃除を頼んだ。しかし4日目にはかんしゃくを起こした。

「私は炊事もすれば掃除もする。私は結局、映画スターなのかしら、それとも映画スターではないのかしら?」

彼女の小ぢんまりしたアパートには趣向をこらし、厳しい好みに合わせて家具が備えつけられている。2枚の高価なじゅうたん、数枚の見事な絵。豪華そのものだ。ほかにも書物やレコード、音楽を吹き込んだ録音テープがたくさんある。彼女はビバルディ、メンデルスゾーン、グリークが好きだ。現代絵画にも関心を持っている。

「人々の中の何をもっとも高く評価しますか?」

「知性です。もっと正確に言うと、天性の頭脳です。故郷の村へ帰ると、老人たちと何時間も話すことがあります。かれらの中に何とすばらしい賢者がいることでしょう」



忙しいマリアだが、たまの余暇には編み物で気をほぐす。

"もしもし、ミス・モスクワ どうぞ!"



「ミス・モスクワ、あなたはコハクを身につけてる?」
「つけてるわ。それも、いま流行のやつをね、マドモワゼル・パリ……」

これは単なるおしゃべりではない。国際電話の交換手たちが、仕事の合い間に話しているのだ。呼び出しが少しずつ減ってくる夜おそく、彼女たちはやっと一息ついて、たあいない会話を少し交わすことができるのである。

彼女たちの会話を"圧縮"して紹介してみよう。

「ミス・モスクワ、221・24・67をお願いします」
「くり返すと221・24・67ですね……承知しました」
「ところで、そちらお天気はいかが?」
「何て言ったらいいかしら。まあまあね。日中は温かで、気温は20度……あ、つながりました! 221・24・67ですね。パリからお電話です」

新しい二人の会話が始まり、口ばやに、興奮して話している。国際電話の料金は安くはない。だから人々は、遠いところの相手と話し合える喜びもさることながら、手短に話そうとする。

姿の見えない話し手が、別れの挨拶を交わす。そして再び、交換手たちの会話がつづく。

「……それで?」
「ああ、昼間は雨だったけど、急いでたから家に傘を忘れちゃったの」
「でも、住まいは近いんでしょう? ミス・モスクワ、169・81・84をお願いします」

交換手たちの合い間合い間をぬっての会話は、一つのテーマをめぐって一晩中つづくこともある。

「さあ、近いかしら? 地下鉄の駅で5つ目よ」
「そちらの地下鉄はすてきなんですってね……」

電話が出現して以来、交換手は女性の仕事と相場が決まっているのも面白い。

なぜ交換"嬢"でなければならないのか? なぜ軍隊以外に男性交換手はいないのか? 男性にくらべて、女性には明らかな優位性がある。声が高いので聞き取りやすいこと。そのほかにも、女性は早口でしゃべることができる。これは経済的に大いに有利である。

こうして、パリでもリオデジャネイロでもモスクワでも、交換手に呼び出しがかかる。ところで、モスクワの交換手はだれでも、夏よりも冬の方が、春よりも秋の方が、電話の利用客が多いことを知っている。さらに、一日のうちでも、そのピーク時が地図の上を、ちょうど太陽と歩調を合わせるかのように移って行くことを知っている。

ところが利用者の中には、優先的につないでもらえるなら、2倍の料金を払ってもいいと申し出る人もいる。このような場合、だれを優先すべきか? 申し込み順は、当の申し込み者には分からない。だが、世界のすべての電話交換手は、どう対処すべきかを知っている。彼女たちは国際電信電話諮問委員会の勧告を順守しているからである。

あらゆる通話は、延期させたり中断させたりすることができる(といっても驚かないでほしい)。もし、台風や洪水などの"災害信号"が入ったら、の話である。その次に、国連事務総長、政府首脳、ハーグ国際司法裁判所の呼び出しが優先される。毎年、国連の定期総会が始まる秋には、多くの国がモスクワ経由でニューヨークと通話をする。こうして、謙虚な電話交換手たちは、地球で行われているもっとも重要な仕事の参加者になる。

ランプが点滅するパネルの周辺では、近年、興味深い変化が起こっている。モスクワとフランクフルト・アム・マイン、モスクワと東京を結ぶ交換台の"強化"が要求された。ミス・ワシントンの声がますます頻繁に聞こえるようになっている。これはソ米間の関係強化の歓迎すべき要素である。長い呼び出しのあと、海のむこうから遠い声が、仲間を代表して世界の電話交換手たちに返答してくることもある。

「本日は交換業務を行っていません。こちら、ただいまストライキ中です」

モスクワの交換手がよく聞きとれなかった個所を英語やフランス語で問い返すと、突然ロシア語で返事が返ってくることがある。もちろん、訛ったロシア語ではあるが。米国やイギリスからも、ますます頻繁にロシア語が聞かれるようになった。世界の多くの電話交換手が、ロシア語を勉強し始めているのだ。

しばしば珍妙なこともある。

「もう赤の広場を掃除しましたか?」とマドモアゼル・ベルンが話しかける。ミス・モスクワは、初めは何のことか分からず、きょとんとする。

それから、マドモアゼル・ベルンがスイスの新聞で、すべてのモスクワっ子は必ず、順番に赤の広場の掃除をするという記事を読んだばかりだということが分かる。

何分かのあいだ、モスクワの電話局には笑い声が響く。

交換台に座っているミス・モスクワは世界の一二八ヵ国で知られている。モスクワはこれだけの数の国と電話で話をしているのだ。ミス・ニューヨークは、ミス・モスクワがサリンジャーやアプダイク、ヘミングウェイが好きで、フォークナーもいいが、ちょっと重々しい、などと話したのでびっくり。

「まあ、アメリカ文学を読んでるの?」
「あなたはどんなロシア・ソビエト文学をお読み?」
「ドストエフスキー……」そして沈黙。

モスクワの電話交換手たちは、ひじように勤勉で誠実だ。彼女たちはフランス語、英語、ポーランド語、ドイツ語、チェコ語、イタリア語を知っており、最近では日本語を話せる者も出てきた。

……南フランスでのことだった。モスクワ女性の旅行者が偶然、現地の女性と話をしたところ、彼女はロシア人だった。だが、ロシア語はひとこともしゃべれなかった。彼女が3歳のとき、ファシスト軍が彼女を母親から引き離したのだった。もちろん、すべては忘れてしまった。ただ、アリョーシャ小父さんという名前だけが、記憶に残っていた。それに、住んでいた村の名前がセレギノだということも覚えていた。モスクワ女性の胸は、どきんとした。だが彼女は、自分の考えを口には出さず、相手の女性の住所だけを書き留めた。それから、期待が裏切られないことを祈りながら、このことをモスクワの隣人に話した。この隣人は戦時中に、カルーガ近郊のセレギノ村で、末娘を見失ったのだった。

その後の経過は、今日のこの技術の世紀でしか考えられない速さで進んだ。二人が、実の母と娘であることが判明したのである。

さっそく、モスクワ時間で18時に、フランスへ電話がかかった。中央国際電話局では、交代時間を終えた交換手たちも家へは帰らなかった。電話がつながった。しかし、親子の会話は言葉にはならなかった。受話器の相手は、両方とも泣いていた。

「娘かい」と一方がようやく言った。ミス・モスクワはそれをフランス語に通訳した。語る者はフランス語を知らず、聞く者はロシア語を知らなかったからである。

「お母さん」とパリからフランス語が届いた。やがて、母と娘は再会した。

国際電信電話諮問委員会は、二〇〇〇年までに単一自動システム(世界通話)を創設するよう提案している。10億台を超える電話の数である! たとえば、日本のある県に住んでいる人がブラジルへ電話をかけるとしよう。日本から送られた信号は、自動交換機がそれを受信できるために、万国共通でなければならない。未来のこのシステムの基本原理は、すでに決まっている。地球は、万国共通の番号を持つ八つの区域に分けられる。それぞれの区域の電話番号は、一つの決まった数字で始まる。ヨーロッパだけは二つの数字—3と4で始まる。北米と中米のすべての電話番号は1で、アフリカのそれは2で、南米は5で、オセアニア諸国は6で、ソ連は7で、アジアと極東の国々は8で、中近東諸国は9でそれぞれ始まる。

だが、どんなに技術が発達しても、それを使うのは人間である。もし機械が故障すれば、人間がそのあいだに入って、それを助ける。そのときは、やさしい人間の声が聞こえるだろう。「どちらへおかけになりたいのですか?」

それは必ず女性の声である。つまり、そこでも、交換手が活躍するのである……

国内問題

モスクワ市民の健康のために

『今日のソ連邦』評論員 ミハイル・エフィーモフ

二つの会議

1月下旬に党のモスクワ市委員会で二つの会議が開かれた。これらの会議に強い関心を寄せたのはソ連の首都の住民だけではなかった。会議の一つは、ソ連共産党モスクワ市委員会のモスクワ市発展社会・経済問題委員会の会議、もう一つは、ソ連共産党モスクワ市委員会とモスクワ市ソビエト執行委員会によって招集され、体育とスポーツのいっそうの発展にかんする措置を策定した市アクチーブ（活動家）の会議だった。

党市委員会で開かれたこれら二つの会議は、これらを一つに統一して考えるほうが理にかなっているように私には思われた。なぜなら、そこで問題になったのは、結局においてモスクワ市民の健康だったからである。モスクワ市がなんらかの危険な伝染病にとらえられていたというのではない。（〝アジア型〟インフルエンザのいつもの冬の流行が〝伝統〟となったと考えないならばのことだが。このインフルエンザはソ連では危機的な規模にまではいたらない）。そして首都には全体として〝不可抗力〟的状況はなんら発生していなかった。ただ、一つの会議では、市の自然保護計画の遂行が（繰り返すが、計画の遂行である）問題となったが、次の会議では、前記のように、体育とスポーツの問題が取り上げられたのである。

少しばかり本題からそれさせていただきたい。15年前に日本のジャーナリスト・グループがノーボスチ通信社を訪れた。そして「現在日本の社会を最も深刻な不安におとしいれているものは何か」という問題について、われわれの間でかなり率直な意見が交わされ、そのなかで、それは「公害」だという簡潔な答えが出てきた。正直なところ、当時のわれわれにとっては新しかったこの用語を、ロシア語にどう翻訳したらよいか分からなかった。別れに際してわれわれの仲間たちは、間もなくソ連の人々もきっと、この恐るべき問題にぶつからねばなりますまいと言った。しかし幸いなことに、この警告は的中しなかった……

モスクワ川での魚釣り

根っからのモスクワっ子である私にとって、われわれの首都が愛すべきものであることは言うまでもない。すべての人が自分の生まれた町にたいして、このような感情を抱いていることは恐らくたしかだろう。しかしこのことは、われわれがモスクワには欠点がないと見ていることを意味するものではない。モスクワにも欠点はある。にもかかわらず私は絶対に確信している――東京に惚れ込んだ根っからの〝江戸っ子〟でも、モスクワに来れば、モスクワのいくつかの長所を認めないわけにゆくまい、と。それは、さながらモスクワを描いた風景画の構成部分ででもあるかのような、晴れたきれいな空である。それは、われわれが水道からじかに飲んでいるうまい水である。そして最後にそれは、クレムリンから町はずれの工業地区までのモスクワ川の岸辺でモスクワっ子が夢中になっている魚釣りである。そして町のなか、モスクワ川に無数にある水浴びのできる川岸と水浴場！ これらは東京や大阪の住民にとっては夢のような話ではなかろうか。

しかしこれらはすべて、モスクワ市民の健康保護のために払われている組織的、財政的、経済的な巨大な努力のうちで、目で見ることのできるものだけである。モスクワは一九七一―七五年の5年間に、環境保護のために約一億ルーブルを支出した。他方、一九七六―八〇年の5年間分として市はこのために五億ルーブルの資金を配分された。

市の環境保護対策

モスクワでは近年、一一〇〇のガス浄化装置とチリを捕捉する装置が作動を始め、約三〇〇の小型ボイラーが撤去され、衛生上好ましくない三〇〇の企業と職場が市域外に移され、大気中への廃棄物を少なくする改良された技術工程が28の企業に導入された。会議で報告されている通り、中央高層大気気象観測所のデータでは、モスクワ市の大気は年ごとにきれいになっている。

市ソビエトは一九七七年に、環境の状態を観測、監視する自動化システムを開発、導入する決議を採択した。この電子装置はとくに、首都の空気が清浄であるかどうかを一時間ごとに監視することになる。

これまでに遂行された仕事の規模をもっと十分に示すためには、モスクワ（その人口は八〇〇万弱）がたんに最大の政治的、文化的中心地だけではないことを言っておく必要がある。モスクワはソ連最大の工業中心地でもある。そしてモスクワがソ連経済のなかではたしている役割は少なくとも、東京が

日本経済ではたしている役割よりも小さくはない、と私は考える。モスクワの工業生産のなかで第一位を占めているのは機械製作と金属加工である。ここには〝ジル〟型自動車を生産しているリハチョフ記念自動車工場、「かまとつち」冶金工場、「クラースヌイ・プロレタリー」工作機械製造工場その他の巨大工場が集中している。モスクワでは一五〇〇以上の工業企業が仕事をし、そのさまざまな製品は世界の70ヵ国に輸出されているというだけで十分だろう。

このようにざっと数えあげるだけでも、モスクワの環境保護に支出された五億ルーブルが何につかわれているかを理解するには十分だ、と私は思う。

モスクワ市発展社会・経済問題委員会はまた、工業廃棄物の加工、利用、無害化の諸問題をも非常に綿密に審議し、新たな下水施設の使用開始の措置をも承認した。

清浄と衛生上のすべての基本的要件という意味では、50年前のモスクワは万事がうまくいっている都市ではけっしてなかったと言わねばならない。18世紀の初めに建設された粋なペテルブルグ（現在のレニングラード）とはちがって、〝ばあさん〟のモスクワ（一一四七年の創設）は、かっきり一〇〇年は遅れていた。そして一八七八年1月になってようやく下水問題が審議された。ところがこの構想が実現されるには、さらに20年（！）という歳月が必要だった。ついでに言えば、この時までにロシアの約10の都市がすでに下水施設を持っていた。

全国では年に二〇億ルーブル

モスクワの水を清らかなものにし、空気をきれいにしておくことが、ソ連の自然保護関係の他のすべての仕事に優先しているかのような印象を読者は受けないでほしい。

環境保護は、発達した社会主義国の国家政策の一部である。これについては、ソ連邦憲法第一八条に次のように述べられている―「ソ連邦においては、現在および未来の世代のために、土地と地下資源、水資源、動物界と植物界の保護と科学的裏づけを持つ合理的な利用のために、大気と水の汚染防止、天然資源の再生産の保障、人間をとりまく環境の改善のために必要な措置がとられる」

この条項は、今年だけでも自然保護と、天然資源の合理的利用のためにソ連が支出する二〇億ルーブルによって裏打ちされている。これには、同じく自然環境の清浄さにかんする配慮をその目的とする、工業生産の技術工程の改善にあてられる金額はふくまれていない。

市民スポーツの振興

さてここで、モスクワがその市民のりっぱな体格と健康についてどのように配慮しているかについて若干述べておこう。日本のスポーツ愛好家は、一九七六年モントリオール・オリンピックでソビエト・チームが獲得したメダル全体の1/4がモスクワっ子のものだったことに恐らく興味をおぼえるだろう。その数は73個で、一九七二年にモスクワっ子がミュンヘンから持ちかえったものより11個多い。しかしオリンピックのはなばなしい成績の背後に、首都の大衆スポーツの発展を妨げている諸問題を見ないわけにゆかない。そして問題は、モスクワが一九八〇年に第22回オリンピックをむかえるということにあるのではない。市当局と党組織はつねに責任をもって住民の健康に気を配らねばならない。先に開かれた会議では、大衆スポーツ競技の水準が不十分なものであること、青少年スポーツ学校が比較的貧弱なことが指摘され、多くの普通教育学校がいまだに体育にかんするカリキュラムの要請を満たしていないことが注目された。

市の党委員会ビューローとモスクワ市ソビエト執行委員会はその決定のなかで、モスクワの各区にスポーツクラブを創設するという具体的課題を提起した。これは大きな、骨の折れる計画である。区当局と市の社会団体の努力が、この計画の実現に集中されるだろう。そして現在体育やスポーツを楽しんでいる人たちがモスクワ・オリンピックのスタートに立たなくても、それは少しも困ったことではない。そのことよりもはるかに重要なことは、さらに多数のモスクワ市民が自分の筋肉の力を感じ、スポーツ競技の魅力を味わうことである。「80年オリンピック開催地モスクワ」というタイトル自体がほかならぬこのことを求めているのではなかろうか。

トピックス＊

クジラの骨の遺跡

ソ連科学アカデミー民族学研究所の所員たちは、ベーリング海峡に面したチュコト半島沖の島イッティグランを調査中に、これまで知られていなかった古代エスキモー文化の遺跡を発見した。この島のシニャビン湾の岸沿いに長さ六〇〇ｍにわたり、セミクジラの頭蓋骨とアゴ骨が二列に並べられていた。最初の列には60個の頭蓋骨を数えた。この骨の小道の近くに石で舗装された道が発見されたが、この道には至る所に穴があり、その周囲もやはり石で囲まれている。なお、この島からはクジラの椎骨とか肋骨など他の部分の骨はまったく見つかっていない。隣のアラムカムチェチェン島でも、岸に沿ってまるで道路のくいのように長さ5ｍのクジラのアゴ骨が地面に埋め込まれた遺跡が発見された。

恐らくこの遺跡は12―13世紀に作られたもので、捕鯨の前の儀式を行う場所だったに違いない。

よい上司を見つける方法

ユーリー・トロフィーモフ

任命制か選任制か

エジンバラ公フィリップ殿下は、英国で官僚主義が強まった結果として、近い将来、すなわち紀元二〇〇〇年までに英国で多くの民主的自由が失われるだろうと予言した。

殿下がクライド放送局を通じて演説したのは、一九七七年10月27日のことである。この二ヵ月前にソ連の『リテラトゥールナヤ・ガゼータ』(文学新聞)は、経営指導者の活動にたいする監督をどのように改善するかという広範な討論の総決算をした。

かなりの数の読者は、いまのところ管理者の通常の資格再評価で十分であり、また資格再評価を形式的にではなく、規則正しく行うならば、それは社会的監督の目的にかなうものだという意見だった。部下にたいする無記名のアンケート(あなたはだれと一緒に働きたいか? あなたの上司のどこが気に入り、どこが気に入らないか?)をもっと広範に実施できるし、総括された回答を具体的な指導者の活動の評価へ是非とも加えるべきだ、というのである。

他の読者——社会学者ヤコフ・カペリュシはかれらを〃ロマンチスト〃と呼んだ——は、政治機関のモデルにならった管理者の直接選任制を主張した。

第一のグループの中で多数を占めたのは、当然のことながら指導者自身であり、第二のグループの間では平の労働者職員が多かった。社会学者カペリュシは自分の総括的な論評や議論に先立って、かれ自身が選任制の考えに賛成であり、こういう考えは以前から提起されていると前置きした。

リガ市での経験

ラトビア共和国の首都リガ市からの報道が紙上討論のきっかけとなった。そこの「コムタートル」(整流子)工場では労働者はすでに七年ほど投票で自分たちの職長を選出している。実験としてそうしているのだ。

定期的な選挙でワルデマルス・オゾルスが落選した。工場の指導部は労働者たちの希望を入れるつもりで、少しも成功を疑わずに純粋な気持でかれの立候補を提案したのだった。オゾルスは技能資格の高い労働者で、多くの人がかれの所へ相談にやってくるし、かれ自身もおそらく指導者になるのに異存はないようだった。

もし資格のない者が職長の職を占めれば、かれの職場の生産性は目立って低下する——18%ほどかまたはそれ以上に下がる、ということはとうに明らかにされている。このような損失を避けるために、「コムタートル」工場は下級指導者の選抜にあたってサイバネチックス・システム〃カードルイ〃を利用しはじめた。

機械はえこひいきをしないし、機械的に客観的である。しかしオゾルスの場合に明らかになったのは(今回だけではない!)、機械に感情がないということは機械の強みであるばかりでなく、弱点でもあるということだった。

コンピュータはオゾルスの職業的技能を高く評価し、かれの創造的積極性、組織能力、自主的な決定能力の合計点を出した。原則としては働き手の情緒性や心理的適合性のような重要な指標も忘れられていなかった。オゾルスは合計点では他の候補者を上回っていた。

職長の地位を希望している人には、前もって立候補の意思があるかどうか、労働者たちに自分の方針や職長になった場合の作業計画について語る希望を持っているかどうかということが質問された。投票日の二週間前に立候補者の名前が工場の放送で発表され、候補者名簿が職場に掲示された。

そして選挙(少なくとも80%以上の従業員が参加した直接・秘密選挙)の当日、労働者たちは最も前途有望な候補者を落選させたのである。この結果は指導部には驚きだったが、だいたいにおいてこのことを予想していた工場の社会学者は秘かに喜んだ。

心理的な下らぬことやいろいろな気分がこの場合に役割を果たしたと思われるだろう。確かにオゾルスは職場の同僚にたいして時にはまるで面倒臭そうにあいさつした——職長の地位に推薦されてからはとくにそうだった。それに自分よりも低い技能資格の働き手を見くびることがあった。かれの働き手としての特質にどうしても反映しない、従って優秀な働き手を選ぶよう命ぜられた機械には捕えがたい同じようなニュアンスがこのほかにもあった。

コンピュータは故障のない働き手である。コンピュータはあえて言わせてもらえば、候補者の〃機械的〃特質——正確さ、熱心さ、高い生産性を評価した。おそらくオゾルスのやや冷たい合理性も肯定的な特質のうちに付け加えられたのだろう。

この新しい方式の課題ははるかにデリケートだ。それは、職務上の形式的指導者にするために、優秀な働き手の中からいわゆる形式主義的でない指導者を発見することである。同一人物における形式的指導者と形式主義的でない指導者との一致こそ、仕事の結果にとっても、実務的積極性の結果にも影響を与える職場のふん囲気にとっても、もっとも好ましいものである。

もし指導的ポストに人を命令によって任命するとすれば、この形式的指導者が形式主義的でない指導者になるかどうか、あるいは権力の一定部分の所有者としての権威にもとづくのではなく、自分の個人的権威にもとづいてかれがどれだけ長い間人々を指導することができるのかということは不明である。他方、あらゆる形式主義的でない指導者が仕事やかれの部下の気分にたいする責任の重みに耐えられるとはかぎらない。

論旨はきわめて単純である——指導部には不公平が起こりうるし、思考の惰性が作用する場合もあるが、選任制は誤りの比率を引き下げる。もし人々自身が最適任者を指名するとすれば、同一人物における形式的指導者と形式主義的でない指導者の一致の確率はいっそう高まる。

選任制は管理の民主化を助成し、労働者を生産の真の主人として確立する。

「こういう方法しかない! 選挙による任務の交替しかない。これは大きな政治的意義を持っている。思いあがった管理者の粗野な態度、冷淡さ、職権乱用についての記事がどれほど新聞に載ったことだろう! 選任制のもとではこのような人々は集団の先頭に立つことができないだろう。人々は暴君を自分の上司に選ばないだろう」と、アルマアタ市のG・コルジョフは書いている。

かれらはだれを選ぶのだろうか?

スベルドロフスク市のV・ソモフは次のように主張する——「私はやはりこの構想に反対だ。選任制について深く考えれば考えるほど、そこにはますます小さな意義しか認められない。指導的地位には、綿密に抜てきされた、仕事で検証された、よく教育された人を任命する必要がある。部下が自分にとってもっとも都合がよいと考えている人を任命することは必要でない。生産管理はあまりにも責任重大な仕事だから、幹部の選抜を職場集会にまかすことはできない」

キエフ市のI・フェシチェンコは書いている——「問題は選任制を導入することにあるのではない。それがなくてもやって行くことができる。もっとも良いのは〃下から〃の資格評価である。この資格評価では、評定される指導者は、これらの評価を与えている具体的な人については知らされてないが、部下がかれに与えた評価については知らされるのである」

昇進の可能性

発行部数二五〇万部の新聞紙上で職長の選出の経験(リガ市ばかりでなく、他の都市の場合も)が討議されていた間、反響の中で優勢を占めたのは関係者の肯定的な意見だった。しかし読者たちがさらに上級の経済指導者の選任制の問題に移行した時、『リテラトゥールナヤ・ガゼータ』紙あての投書の中には次のようないら立った反響が現れはじめた——「従業員総会での工場長の選出は疑わしい、おぼつかないことのように思われる。企業のすべての働き手が一人残らず工場長の役目、かれへの要求、出てくる候補者を知ることができないからだ」

まさしく知ることができない。しかし選任制の構想をあまり権限のない人人の騒々しい集会に帰着させることは正しくない。民主主義の経験は十分に豊富なものであり、選挙のために多くの方法を提案している。

たとえば、良く知っている環境のもとで、労働者が班長、職長、職区長を選び、一方職区長、分工場長、部長が工場管理のさらに上級の責任者を選ぶようにすることはできないか? はたして任命制度のもとで人はすぐに工場長になるだろうか? おそらく仕事の経歴のあらゆる段階で、人は直接の職務よりほんの少し広く仕事を知っており、このことがまさにかれに昇進の基盤を与えている。問題は、この昇進に影響を与える人々の範囲を、事実上どのように拡大するかにある。

ソ連の閣僚の$\frac{3}{4}$は普通の工場労働者から出世した(他の高い地位にある人についても同様である)。かれらは自分の権限のわくを形式的には越えている仕事に参加しなかったとしたら、現在の地位にまでけっして昇進しなかっただろう。

ソビエト社会がすでに職務上の高慢さ、〃機関〃の個々の働き手の派閥的思考から完全に守られていると主張するとしたら、幼稚と言えよう。しかし民主政治の手段をたえず改善する以外に、偽称の〃ボス〃を退ける方法は他にないし、またありえない。各国はこれをそれぞれの方法で解決している。

ソ連憲法第九条は、ソビエト社会の政治体制発展の基本方向は、社会と国家の業務管理に市民をより広範に参加させ、社会組織の積極性を高め、人民の監督を強化し、公開性を拡大し、世論をつねに考慮することであると述べている。

新憲法は一九七七年10月に採択された。これは、英女王の夫君が西側に〃選挙の自由〃と〃個人の責任〃の喪失を予言した時とほとんど同時期のことである。

衰えない人気 ロシアの亜麻

ワシリー・ジャダエフ

亜麻（あま、リンネル）は遠いむかしからロシアで栽培されている。そしてあたたかい羊毛も、高価な絹も、綿（わた）も、そして万能の合成繊維も、亜麻の地位を低めることはできなかった。

亜麻は播種面積1ha当たり平年作で四五〇kgの繊維と種子が得られる。これだけの原料から一二二〇mの織物、一二〇枚の麻袋、一一〇kgの麻縄、特別に薄い巻きたばこ用紙9kgを作ることができる。そのうえ種子からは一六〇kgの油（亜麻仁油）、その他精・油、食品、医療品などの貴重な原料もいろいろ取れる。

ソ連は、国際市場における亜麻製品の重要輸出国の一つである。ソ連は亜麻の播種面積、総収穫量、亜麻製品の生産量で世界第一位を占める。

夏の朝の亜麻畑はことのほか美しい。咲き乱れる亜麻の花で、空がいっそう明るく澄んで見える。そしてすべてのものが淡い青色の流れに身を沈めているかのようである。

亜麻は最も古い農作物の一つである。人間は亜麻を九〇〇〇年ちかくも前に西アジアで初めて栽培した。亜麻布もここで初めて作られた。子供の息づかいのように軽やかな亜麻布は文字通り金の重さではかられた。一方のはかり皿に亜麻布が置かれ、他方のはかり皿には金貨か貴金属の塊が置かれたのである。

亜麻の繊維は保ちがよい。それは腐敗を予防するシリカ（二酸化硅素）を含んでいるからである。エジプトのミイラが着けていた織物だけでなく、亜麻を原料として作られた紙に書かれた古文書や本もこのことを立証している。

亜麻繊維の質は、1kgの繊維から得られた紡績糸の長さを示す番号によって表示される。つまり、仮に10番手の亜麻繊維という場合、1kgの原料亜麻から10kmの紡績糸あるいは3mの織布が得られるということである。ソ連欧州部の北部地域では、40番手の亜麻（1kgの原料から12mの織布が得られるもの）が栽培されている。ロシアのレース編み職人たちは、このような繊維から、重みがほとんどない驚くべきレースを編んでいる。

ソ連の亜麻コンビナートは現在、さまざまな織物を生産している。レース織り亜麻布の婦人服とブラウス、透かし織り亜麻布のワイシャツが広く普及している。

最近2年間の出来事は、亜麻栽培に今後大きな変化が起こることを物語っている。第10次5ヵ年計画（一九七六—一九八〇年）の年平均の亜麻繊維生産量五一万一〇〇〇t（織物に換算してほぼ10億m）は、まだ限界ではない。亜麻栽培のこれからの発展は、播種面積の拡大よりはむしろ、その利用の合理化によって行われる。まず何よりも、亜麻の栽培と取り入れの総合的な機械化が大規模に導入される。

亜麻と合成織物はたがいに対立するものではなく、同盟者である。化学の発展は、天然繊維がその意義を失い、舞台から去らねばならぬことをけっして意味するものではない。亜麻製品は高価なものではなく、生活のなかで広く利用され、これにたいするソ連国民の需要は大きい。合成繊維はわれわれの生活のなかに確実に入りこんできてはいるが、現在恐らくいちばん人気があるのは亜麻織物だろう。

（カメラ　B・ザドビリ）



刺しゅうをあしらった亜麻のイブニングドレス



伝統の織物によるトップモード

夏の朝、この可憐な花が亜麻畑一面に咲き乱れる。





亜麻織物を使ったビーチウェアー



種子からも油を始め、その他いろいろな原料製品が取れる。

亜麻の取り入れ作業

イデオロギー問題

ソ連憲法と良心の自由

教授・歴史学博士　アレクサンドル・オクロフ

かつて、米国のマルクス主義者で理論誌『ポリチカル・アフェアズ』の元編集長ベティ・ガンネットは書いている――「おそらくソビエト生活のどのような面も、ソビエト国家の宗教や教会にたいする態度ほどに中傷され、歪曲された面はなかっただろう」。残念ながら、現在でも反ソ主義の本質は変わっていない。もちろん、反ソ主義はソ連における良心の自由の問題を回避しなかった。この分野での歪曲は、ワシントンで作成される半年ごとの公式な報告書の中でさえ行われている。

われわれは、ソ連における信者の真の地位について語るにあたって、宗教をマルクス主義の世界観と和解させ、とがった角を丸くするつもりはまったくない！　歴史を見れば分かるように、マルクス主義者はつねに宗教的イデオロギーに反対してきたし、宗教問題を階級闘争の主要な問題にたいして従属するものとみなしてきた。

しかしすでに革命以前に、レーニンは宗教的イデオロギーにたいする態度と、信仰をもつ勤労者にたいする態度とを明確に区別することを考えた。レーニンはこの問題でのいかなる暴力の行使も、良心の自由の圧迫や制限も許しがたいと考え、信仰をもつ労働者や農民にたいして同志的な態度をとり、「彼らの宗教的、政治的偏見にたいする軽蔑的な態度で彼らをおしのけることなく、かえって政治闘争と経済闘争のあらゆる行為を根気よく、分別をもって、辛抱づよく利用して共同闘争の基盤のうえで彼らを教育し、自覚したプロレタリアートに接近させる」ように要求した（レーニン全集、日本語版、第8巻、五一五―五一六ページ）。

信者も平等な市民

ソ連共産党の科学的、マルクス主義的諸原則にもとづく新ソ連憲法は、信者も信者でない者も含めて、ソ連のすべての市民の広範な権利と自由を明記している。それはいったいどんな権利か？　なによりもまず労働の権利、休息の権利、健康保護の権利、社会保障を受ける権利、教育を受ける権利、文化の成果を享受する権利、科学的、技術的、芸術的創造の自由、経済、文化、社会・政治生活のすべての分野におけるすべての市民の同権その他である。

良心の自由のために新憲法は、以前の三つの憲法に含まれていた保証を引き継いでいるだけでなく、それらの保証を、一九三六年憲法の採択時以後の四〇年間にソビエト社会で起こった変化を考慮に入れて、より深く解釈している。

新ソ連憲法には次のようにうたわれている。「ソ連邦市民は出身、社会的地位および資産状態、人種的および民族的所属、性別、教育、言語、宗教にたいする態度、職業の種類と性格、居住地その他の事情にかかわりなく、法の前に平等である」。「ソ連邦市民の同権は経済的、政治的、社会的、文化的生活のすべての領域において保障される」。

「ソ連邦の市民には良心の自由、すなわち任意の宗教を信仰する、あるいはいかなる宗教も信仰しない、宗教的儀式を執行する、あるいは無神論の宣伝をおこなう権利が保障される。宗教上の信仰に関連して敵意と憎悪をかきたてることは禁止される」。これは新憲法の二つの条項――第三四条と第五二条の文章をそのまま引用したものである。第五二条の内容におけるきわめて本質的な補足は、敵意と憎悪をかきたてることを禁止している最後のくだりである。

なぜ信者は減っていくか？

読者のみなさんにもおわかりのように、これらの条項は宗教と信者にたいするソビエト国家の深い根拠を持つ原則的な立場を反映しており、ソビエト法は教会の「権利を侵害し」、「信者を迫害している」と主張する捏（ねつ）造者に得心のいくような回答を与えている。

これらの条項は、より広い角度でソビエト人の権利を見る基礎をわれわれに与えている。これによって、いかに社会があらゆる種類の社会的、民族的抑圧を一掃し、市民に生活の基礎そのものにふれるすべての権利を保障して、全面的な発展のための現実的な可能性をつくり出したかを、ひと目で見ることができる。ソビエト政権の時代に、宗教の立場は目立って弱まり、信者の数は減少の一途をたどっている。しかしこれは、けっして何らかの圧力によって引き起こされたのではない。これは抑圧の一掃、物質的状態の改善、全般的文化の成長の合法則的な結果である。

実生活は、神にたいする社会的要求の消滅だけが、神を無意味なものにすることを示した。過去の宗教体系が死滅したのは、それが「あまりにも不合理」だったからではなく、エンゲルスが指摘したように、その社会的基礎が崩壊したからなのである。しかしエンゲルスは、宗教との闘争における科学的知識をも過小評価しなかった。

世界の新しい解釈と、そこでの人間の新しい地位を与えたのは、10月革命だった。10月革命は別の尺度で人間を考えることを教え、あらゆる種類の経済的、社会的抑圧から解放された人間の生活が、そのあらゆる面で、自然に宗教的基盤を取り除いていくことを示した。

マルクス主義は、人間的本性の永遠性や普遍性にかんする抽象的な形而上学的観念から人間の思想を解放し、人間の本質という伝統的な哲学的問題を科学的に解決し、その深い社会的意義を解明した。

著名な宗教家でさえ、これを否定することはできない。ローマ・カトリック教会の神学者であり、バチカンのローマ法王大学の教授であるジュリオ・ジラルディは『マルクス主義とキリスト教』という本の中で次のように書いている。「現代世界でのマルクス主義の成功は、議論の余地がないし、めざましい。マルクス主義は大衆やインテリゲンチアを、貧者と富者を、古い文化をもつ民族や若い民族をソ連へと引き付けている。マルクス主義は積極的な、確信をもった、情熱的な、高尚な信奉者をもち、自分たちの英雄、自分たちの受難者をもっている」。ジラルディはマルクス主義のこの力を、「マルクス主義はなによりもまず人間の価値、人間の尊厳を主張する人道主義的な教義である。マルクス主義は人間への信頼を人間に取り戻させ、生活は意義を持った、生きるに値するものだ！　ということを人間に教えることをめざしている」ことのうちに見ている。

教会の地位についてのウソと真実

しかしブルジョア世界には今日にいたるも、ソ連における教会の地位についてのさまざまな作り話を書き立てている人々が少なからずいる。たとえば、有名なマルクス学者N・フレッチャー教授の著書『生き残りの科学』を例に取ってみよう。その中で著者は、ソ連では信者が弾圧や迫害を受けている、教会は降伏しておらず、無神論は破たんをきたしている、と主張している。

著者は次のように書いている。「住民の信心深さ、その教会への信奉が、国民生活のもっとも活動的な要因であり、これらの要因の前では、社会や国家のどのような対抗措置も無力である」

これについてのロシア正教会の首長ピーメン総主教の意見はこうだ。「信教の自由はソ連憲法によって保証されている。ロシア正教会をふくむすべての宗教団体は、国家にたいして平等の地位にあり、それぞれが自治権を持っている。ソ連には宗教上の項目にかんする住民の登録や統計はない。就職にさいして、あるいは人口調査やパスポートの交付の時等に、信仰の有無を問われない。ソビエト法は聖職者をふくむ信者の市民権のどんな侵害にたいしても、厳重な責任を規定している。すべての宗教の信者および聖職者は、ソビエト国家の完全な権利をもつ市民であって、国の政治的、経済的、社会的生活に積極的に参加している」

宗教団体の活動

われわれはさらに次のことを言っておかなければならない。それは、信者の宗教上の要求を満たすために、ソ連では二万以上のロシア正教会の教会、カトリック寺院、ユダヤ教教会、ルーテル派教会、回教寺院、旧教寺院、ラマ教修道院、バプテスト派やセブンスデー・アドベンチスト派の礼拝堂等が活動していることである。幹部を養成するために宗教団体は、正教会の六つのアカデミーや神学校、カトリックの二つの神学校、回教アカデミーと回教学院など合計18のアカデミーや神学校、約20の男子および女子修道院等をもっている。ソ連の宗教団体は広範な出版活動を行っている。定期刊行物『モスクワ主教管区ジャーナル』『ウクライナ正教徒通報』『兄弟通報』『ソ連東方回教徒』等のほかにも、近年、宗教団体によって聖書、コーラン、神学書、祈禱（きとう）書、教会暦が再三にわたって大量に出版された。これらにさらに次のことを付け加えることができる。すなわち、信者の宗教上の要求を満たすために、ソビエト国家は全人民的財産である教会の建物や礼拝の対象を、宗教団体に無料で利用させているのである。

読者のページ



昨年の12月末、埼玉県志木市の中学生、木村美奈さん（12歳）とお母さんの幸子さんは、10日間にわたってソ連を旅行してきました。美奈さんはアエロフロート（ソ連国営航空）東京支店がモスクワ＝東京空路開設10周年を記念して行ったクイズに応募して、3万8500人の応募者の中から、見事に1等のソ連招待旅行に入賞したもの。美奈さんのソ連旅行にはお母さんが付き添いとして同行しました。ここに、アエロフロート東京支店に寄せられたお二人の手紙をご紹介します。

ロシア語をたくさん覚えました

木村　美奈


アエロフロート機に乗り込む木村美奈さんとお母さん。

このたびはソ連に招待してくださってありがとうございました。私は生まれてはじめて飛行機に乗りました。それがアエロフロートですから、一生忘れません。機内で出た紅茶、アイスクリームは、とてもおいしかったです。スチュワーデスの人がもう少し日本語を話してくれたらなあと思いました。モスクワに着く時は飛行機の中で、耳が痛くてよってしまいました。

ソ連では、いろいろな人に話しかけられて、親切にしていただきました。モスクワでも、レニングラードでも、キエフでも、昔の物がりっぱに保存されていて、みんな大切にしているのが印象に残りました。

学校の友達には、絵はがきとマトリョーシカを、おみやげに買ってきてあげました。妹には、民族衣装のお人形を買ってきてあげました。妹はマーシャと名づけて、大喜びしています。

私は大きくなったら、絶対にもう一度ソ連に行きたいと思います。そのころには、今よりもっと飛行機も開発されて早く着くのではないかと考えています。

私はロシア語をたくさん覚えました。スパシィーバ、ドーブロエ・ウートロ、ズドラースィッチェ、ダ・スヴィダーニャ、ダー、ニェート、ワダー、キピヤトーク、ボリショイ、マーレニキー、ス・ノービム・ゴードム、パジャールスタ、スコリカ・ストーイト、スパコイノイ・ノーチ、ダイチェ、グジェ、マロージェノエ、ヤポーニア。数字は一から十まで、アジン……。

今度行く時は、ロシア語をしっかり勉強して行こうと思います。そして、アイスクリームをたくさん食べてこようと思います。

スパシィーバ　ダ・スヴィダーニャ

友好的なソ連の人々

木村　幸子

このたびは、モスクワ、レニングラードご招待いただきまして、本当にありがとうございました。おかげ様で一月四日、無事に帰って参りました。もう疲れもとれまして、楽しかったソ連での日々を、写真を見ながら、娘の美奈と思い出しております。

飛行機は三人がけですので、新幹線のように狭い、と思っておりましたが、帰りの飛行機では自由席で空いておりました。ひじかけをあげましてベッド代わりにする人たちを見て、三人がけの席はこういう時便利だな、と気づきました。機内食はおいしかったのですが、レタスのそばについていたマヨネーズは時間がたっていたせいか食べられませんでした。ごはんも少し出ましたが、柔らかくておいしいとは言えません。紅茶はとてもおいしくいただきました。スチュワーデスの方も、必要な時だけしか通りませんのでよかったと思います。同行の人達の話では、サービスの良すぎる航空社の飛行機に乗りますと、次から次へとキャンディや飲みものが出てゆっくり眠れない、ということでした。ただ困ったことはトイレの水を流すには、どこをどうすればよいか分からなかったことです。美奈は帰りの飛行機でようやく見つけたと言っております。

モスクワでもレニングラード、キエフでもソ連の人々が笑みを浮かべて、「ヤポーンカ？」とそばに寄ってきてくれます。親切でやさしい、と聞いておりましたが、本当にソ連の人々は友好的でした。それから古いものを大切にする人々の気持ちには感心しました。トレチャコフ、プーシキンの美術館や、エルミタージュ、武器庫、たくさんの宮殿、どこでもみごとに修復された美しい芸術品が当時のままに保存されていて、二十世紀の今、私たちが簡単に見ることができるのですもの、こんな素晴らしいことはありません。バレエやオペラも素晴らしいと思いましたが、キエフで見た民族舞踊はまた良かったと思います。食べものにははじめは困りましたが、帰る頃は慣れておいしく食べられました。野菜、くだものが少ないのですね。

インツーリストのガイドさんもよく説明して下さいました。本当にソ連っていい国ですね。赤の広場に立った時、聖ワシリー寺院を目の前にした時、あ、ロシアに来た、という実感で胸がいっぱいになりました。今度はぜひ主人にも行かせてあげたいといつも思います。またいつか、夏にもぜひ訪ねたいと考えています。今度はゆっくり見学し、街の中へも出かけてみたい、ロシア語を学ぼう、と思っています。

本当にいい贈り物をありがとうございました。私の一生の思い出になりそうです。

「宇宙に耳をすます大電波望遠鏡」楽しく読ませていただきました。次回は6m望遠鏡の特集か、遅れましたがスプートニク打上げ20周年特集など企画下されば幸いです。

（宇都宮市　渡辺　公鋭）

『今日のソ連邦』の中に新たに「読者の声」という欄を作ってはどうでしょうか。この欄に、日ソの友好と善隣を願う読者同士が、お互いに連帯感を深めるために、『今日のソ連邦』を読んで感じたこと、知らせたいこと、などを寄せる欄です。ぜひ検討してください。

（東京都　石田　祥）

編集部では、本誌にたいする読者のみなさんのご意見、感想、提案、質問などをお待ちしています。どしどしお寄せ下さい。

オリンピック・マークを付けた1番機



出発準備をするオリンピック・マーク一番機（一九七八年1月24日、シェレメチエボ空港で）

1978年1月24日、モスクワのシェレメチエボ空港から、モスクワ・オリンピックのシンボルマークと〝Official Olympic Carrier〟の文字を付けたアエロフロートの1番機が、ワシントンへ向けて飛び立った。これらのマークと文字のシールは、日本の〝新時代社〟が納入したもの。マークの大きさは直径90cm、文字シールの幅は45cm。これらのシールは、国際線に就航しているすべてのアエロフロート機に付けられる。

美津濃がモスクワ五輪組織委と契約


80年オリンピックに用具を納入する契約書に署名する水野・美津濃社長とコワリ80年五輪組織委副議長（一九七八年1月25日）

モスクワ・オリンピックの組織委員会と日本のスポーツ用具メーカー〝美津濃〟のあいだで、1978年1月25日、オリンピックで使用される用具にかんする契約が結ばれた。

この契約にもとづいて美津濃は、アテネからモスクワまでの聖火リレーのたいまつと走者用の装備、タリン（エストニア共和国首都）で行われるヨット競技の各級種目の技術要員用のユニフォームを納入し、また、同社が納入した用具やユニフォームを利用する選手団の、選手村における運動着や用具の補修や取り替えを行う。

この契約には、日本側からは水野健次郎・美津濃社長、ソ連側からはウラジーミル・コワリ80年オリンピック組織委員会副議長が調印した。調印のあとコワリ副議長は、「美津濃は以前から、大規模な国際競技会で立派な評価を得てきた。同社との協力はモスクワ・オリンピックでも、双方に有益なものになるだろうと期待している」と語った。

ソビエト民主主義

所得の増加は国家の義務

教授 ミハイル・クルトゴロフ

憲法の規定にまで高められた方針

一九七七年10月7日に採択されたソ連憲法には、新しい憲法上の原則が書き込まれている。すなわち国家に、市民の所得と生活水準を高める政策を一貫して続ける義務が負わせられているのである。注意していただきたいのは、ここで問題になっているのは市民の所得の減少を**食い止めることではなく**、それを**増やすこと**だということである。ソビエト政権はその経済政策においては、社会主義社会での生産の使命は物質的、精神的財貨の生産者、すなわち勤労者自身の利益に直接奉仕することであるという原則から出発している。

実際、第9次5ヵ年計画（一九七一―一九七五年）では国民福祉のためにソ連の国民所得の80%以上がふり向けられた。ソ連国民の実質所得はこの10年間に1・6倍増えた。国家政策の原則となった、市民の物質的福祉を全面的に向上させるというソ連の方針は、この原則を憲法上の規定にまで高めることを可能にした。

ソ連憲法第二三条は「国家は労働生産性の向上を基礎として、勤労者の労働報酬と実質所得の水準を高める方針をたえまなく実施する」と述べている。この方針は一貫して実現されている。一九七一―一九七五年の労働者と職員の月平均賃金は20%増えた。社会的消費基金（これについては以下に述べる）からの市民への支払いと特典の額は、一九六五年と比べて2倍以上に増えた。貨幣で支払われる年金や手当の額は2・4倍に増えた。

社会的消費基金からの特典と支払いの分を加算した一世帯当たりの月平均賃金は、一九七六年には三七一ルーブル（現在の公定レートで約一二万四〇〇〇円）だった。そのほか、ソビエト国家は住宅、学校、文化・生活施設、医療施設の建設に一世帯当たり毎年約二九〇ルーブル支出している。これは昨日と今日のことだが、明日はどうなるのだろうか？

第10次5ヵ年計画（一九七六―一九八〇年）では国民の物質的、文化的生活水準を向上させる方針が続いている。平均賃金は16―18%増える。5年間に住民一人当たりの実質所得は21%増える。

ソ連ではどこからこのような政策を実施するための資金が得られるのか？個人の賃金を補う〝社会的基金〟とは何か？

これらの資金は国家予算から出ている。国家は手に入れた利潤を社会全体の利益のため、再配分するにすぎない。

社会的消費基金の役割

社会的消費基金は無料の教育と職業訓練、年次有給休暇、老齢、疾病のさいの物質的保障、世界でもっとも安い家賃、無料の医療等を保障している。このようにこの基金は、ソ連市民の一連の重要な憲法上の権利を実現するための物質的な基礎になっている。国家は社会的消費基金の不断の増大を保障している。

第10次5ヵ年計画では、社会的消費基金は五二五〇億ルーブルに達する。これは第9次5ヵ年計画より34%多い。

社会的消費基金は事実上10年ごとに倍増している。現在ソ連の家族の総所得の相当部分がこの基金によって形成されている。予算研究の資料によれば、一九七六年には工業労働者世帯では社会的消費基金からの年金、奨学金、手当、その他の支払いと特典（無料の教育と医療を含めて）の総所得に占める比率は22・3%、コルホーズ員世帯では20・7%だった。四人世帯ならば、社会的消費基金から年間平均一四七二ルーブルの支払いと特典を受け取っている。

社会的消費基金の明確な方針にもとづいた利用によって、普通中等（10年制）教育への全般的移行のような重要な社会的措置を基本的に完了することができた。これは新憲法に明記されている。そして、その保証措置の一つとして、教科書の無料支給が実施される。ソ連には約五〇〇〇万人の普通教育学校生徒がいる。もし平均して一人7冊の教科書を利用するとすれば、三億五〇〇〇万冊という膨大な数の教科書が国家の費用で支給されることになる！

一人の生徒・学生にたいする一年間の国家の支出は、普通教育学校では一六〇ルーブル、中等専門学校では六四〇ルーブル、大学では一〇〇〇ルーブル以上である。教育はすべての段階で無料で行われており、しかも中等専門学校と大学の学生の大部分は国から奨学金を支給されている。

国家は就学前児童施設の経営のために相当の資金を支出している。ソ連の子どもの三人に一人（都市では二人に一人）は保育所または幼稚園に通っている。保育所では一人の子どもの保育に年間五〇〇ルーブル以上、幼稚園では四五〇ルーブル以上が支出されている。そしてこれらの支出の80%は国家によって支払われている。

社会的消費基金の不断の増大は、国民保健、体育、スポーツの発展の強固な基礎になっている。

さらに、社会的消費基金は住宅・公共施設管理費の3分の2を負担することによって、安い家賃を確保している（家賃は一般家庭の所得の3―4%を超えない）。家賃はソ連では一九二八年以来変わっていない。

ソ連憲法第二三条はわずか数行から成り立っているに過ぎないが、その背後には二億六〇〇〇万人のソ連市民にとって切実に重要な諸問題を解決する保証が秘められている。

トピックス

80年五輪の選手用メニュー

80年オリンピックの開催まではまだ2年以上もあるが、モスクワに特別に設立された料理会議では今からもう、世界中からやってくる選手とツーリストを迎える準備をしている。

料理会議の指導者アントニーナ・ニカショワは次のように語った。「私たちはすでに選手たちの給食の案を作成し始めました。正しい栄養補給を科学的に組織するために、科学者、医師、著名なコーチ、そして当のスポーツマンたちとも相談しています。各競技の特殊性や、各国と各大陸の諸民族の料理の特徴も考慮に入れています。

特にいろいろと複雑な問題が起こるのは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの選手たちのメニューを作成する場合です。この点でモスクワの料理人たちに援助の手を差しのべてくれたのが、パトリス・ルムンバ記念民族友好大学の学生たちです。かれらの助言にもとづき大学食堂のコックたちは数十の特別料理を試作して、私たちの会議に提出しました。そのうちの多くの料理は専門家の好評を得ました。私たちの計画では、遠い国から来た選手たちにたいするサービスを、選手たち自身がモスクワのコックの助けを借りて自分用のどんな料理でも、たとえばもっともエキゾチックな料理でも作れるような体制で組織したいと思っています。

オリンピック大会といった華やかな出来事にインスピレーションを受けた料理人たちの空想力は、もちろん、一連の新しい料理を生み出しました。サラダ、温かい料理、デザートなど、オリンピック・メニューのそれぞれの欄にはスポーツマンたちのこの世界的なフォーラムに向けて特に作り出された料理が載るでしょう。ソ連の民族料理も広い範囲からいろいろな種類が用意されます。こうして、コーチや選手たちは五〇〇種類の料理から好きなものを選べることになります」

（この記事のロシア語原文は前号64ページの「ロシア語のページ」に掲載されています）

建設進む世界最大の水力発電所



建設中のサヤン・シューシェンスコエ水力発電所

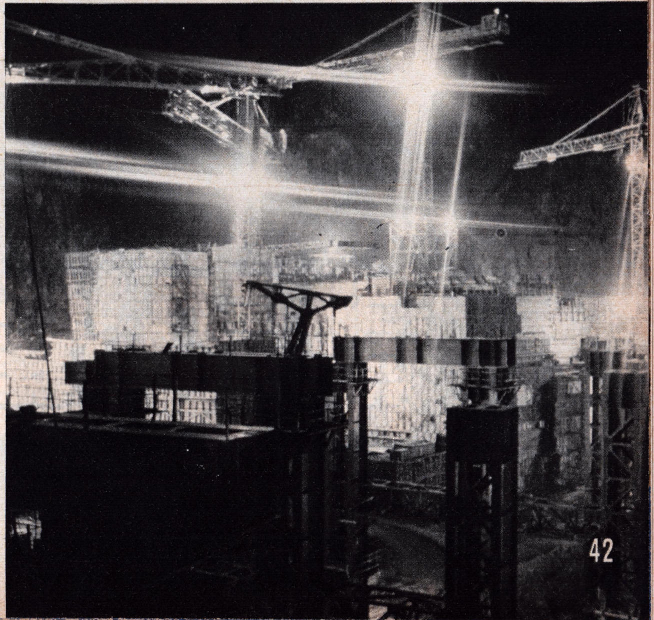
カメラ　R・デニソフ



▲水力発電所建設関係者の住む団地

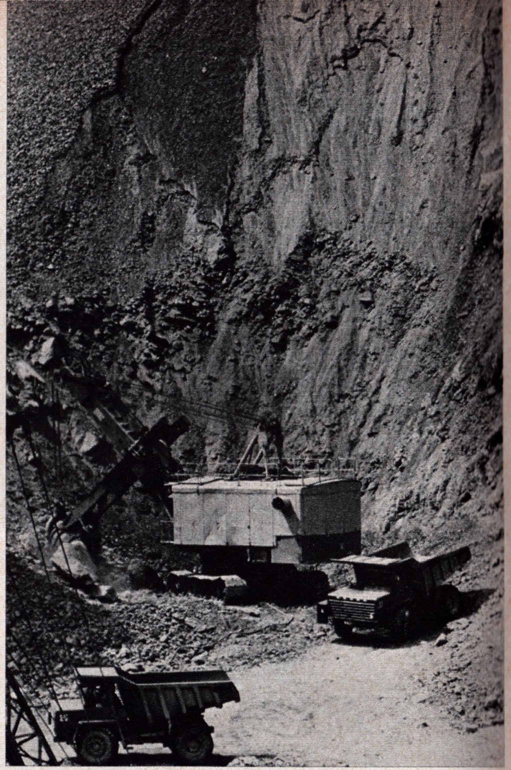


◀ここにもまた新しい家庭が誕生した。



▼建設工事は昼夜を徹して進められている。

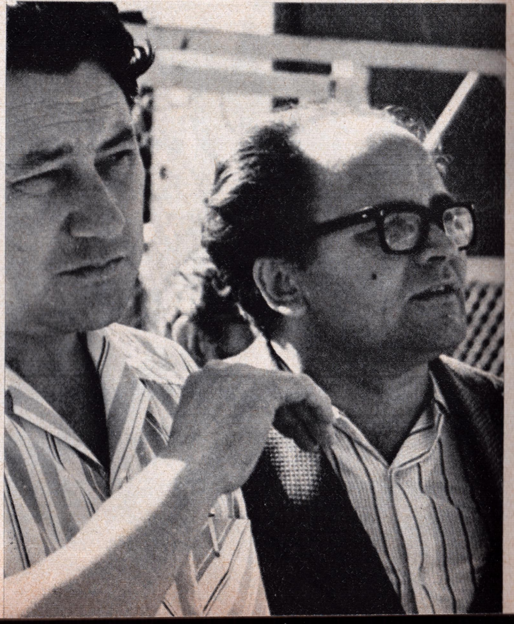
◀サヤン・シューシェンスコエ水力発電所建設総責任者スタニスラフ・サロフスキー（左）は、現場の見回りから日課を始める。



ダム下流面の基礎穴を掘る。

シベリアの大河エニセイの上流に、出力六四〇万KWのサヤン・シューシェンスコエ水力発電所が建設されている。その10基のタービンは、年間二三五億KWhの電気を生みだす。この発電コストはソ連でもっとも安く、1KW当たり0・04コペイカになる。

この世界最大の水力発電所の規模をもう少し具体的に知っていただくために、数字をいくつか紹介してみよう。





コンクリート打設エウラジーミル・オストロベルホフ



ダムの高さは二四二m。これは、同じエニセイ川のもっと下流にある現在世界最大出力（六〇〇万KW）のクラスノヤルスク水力発電所のダムの高さの2倍である。ダム天端の長さは一〇〇〇m以上。このダムは世界最大のコンクリート建造物になる。その基礎には、一〇〇〇万立方mのコンクリートが打ち込まれる。このダムは、エニセイの一七〇〇万tの水圧を支えることになる！

これらすべての数字の結合が、未来のこのユニークな大水力発電所を構成する。

ダムの設計にさいしては、いくつかのプランが提案された。そして学者たちは、最適の設計を選定した。つまりダムは、湾曲面を貯水池の方にせり出し、両端部を岸の強固な岩盤に食い込ませて、水圧の大部分を岩盤に伝えるのである。一方、ダムの基底部は、独創的な太い金属性の錨で、あらかじめ深さ六〇—一二〇mまでセメント溶液で補強された川底の岩盤に"つながれ"る。

サヤン・シューシェンスコエ水力発電所では、貯水池の水の量と電力の必要量とに応じて、稼動する発電機の数が異なるようになっている。したがって、貯水池の水位とダム下流の水位は変動が激しくなる。これにたいしても、学者たちは解決策を考え出した。エニセイの25km下流に、川の水位を安定させるためのマイナ水力発電所（出力三二万KW）を建設するのである。

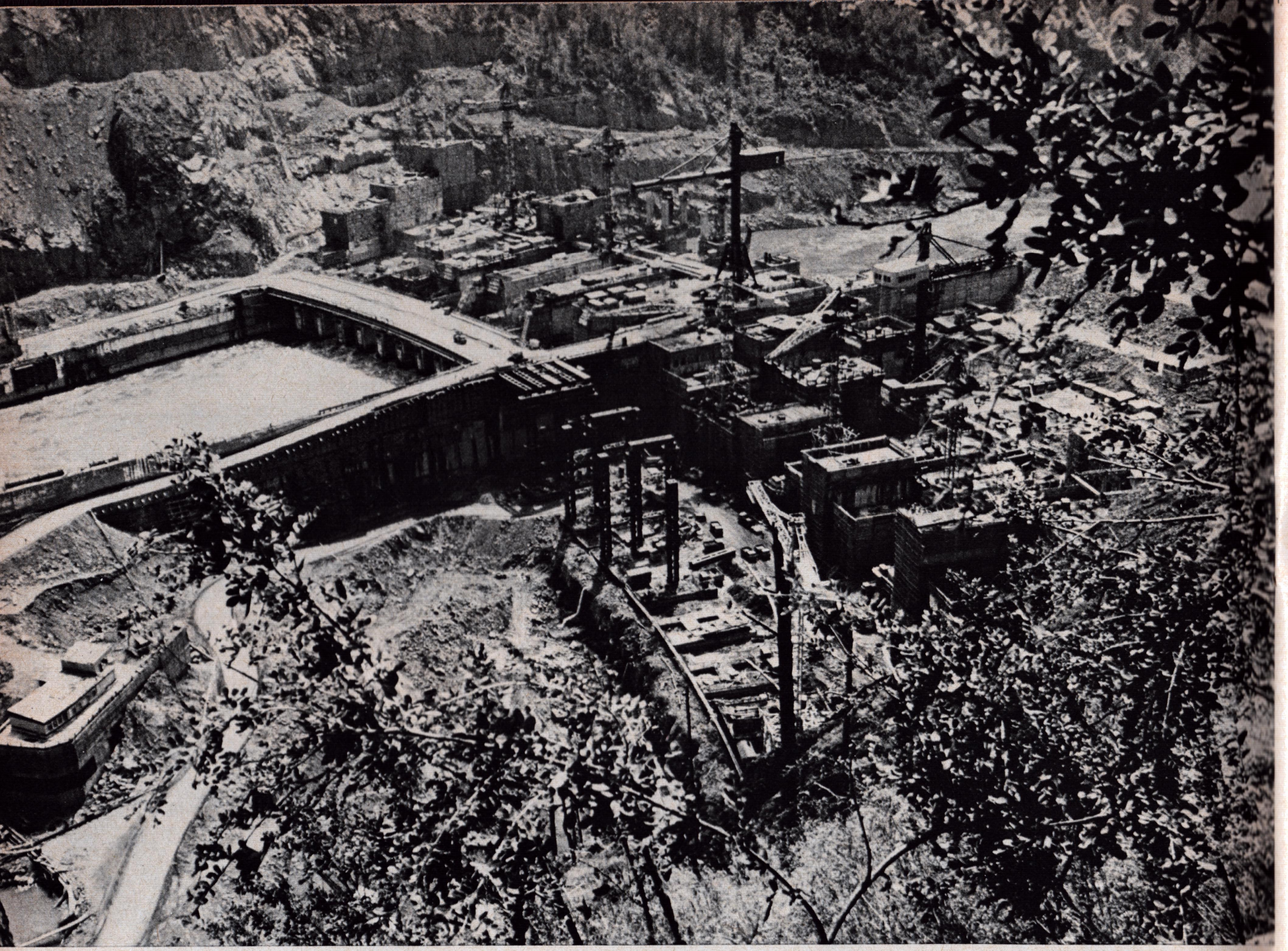
サヤン・シューシェンスコエ水力発電所の最初の発電機は、今年の末に商用運転を開始する。一九七九—一九八〇年に、さらに4基の発電機が運転を開始する。一九八三年には、設計出力六四〇万KWに達する計画である。

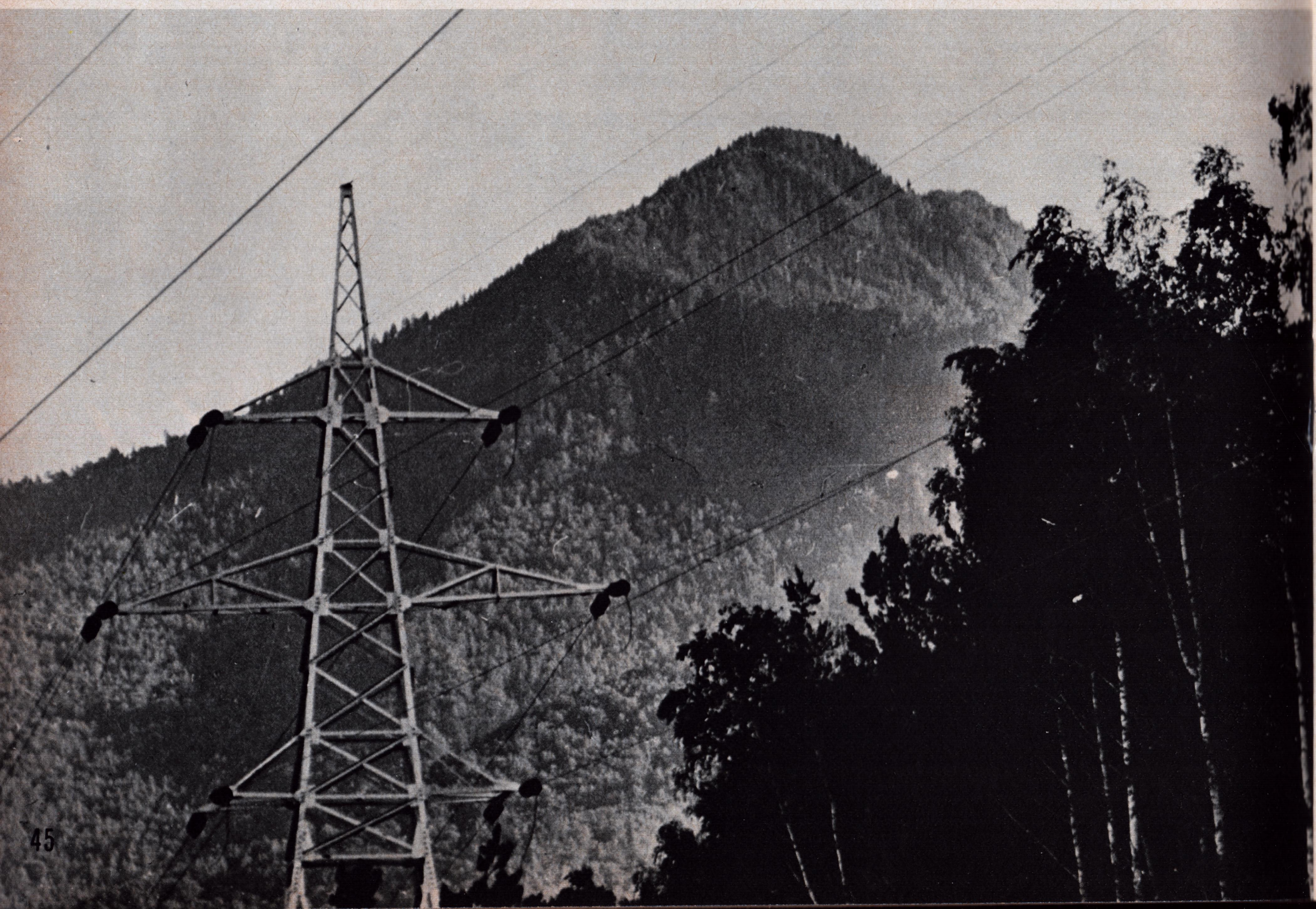
この新しい水力発電所は、建設中の

上右　建設作業本部の会議

上左　サヤン・シューシェンスコエ水力発電所のダムサイト

◀
サヤン山地を貫く高圧送電線







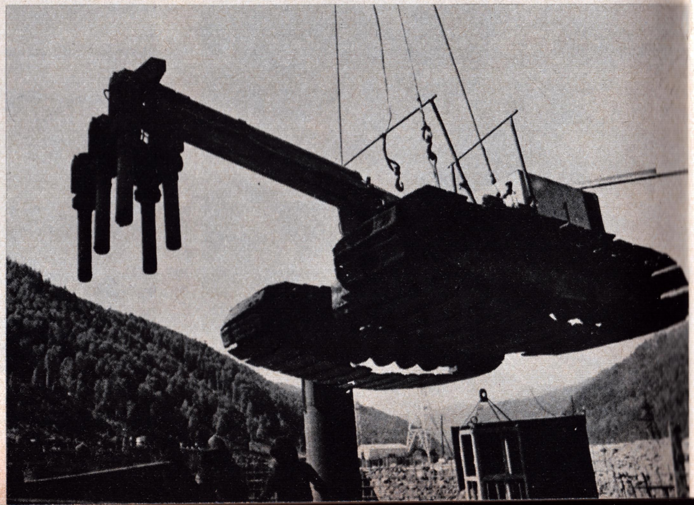
仕事が終わって、楽しい夜のひととき。

マリア・クラブレワは建設技手





▲ロッククライミング特殊建設隊の登山指導員ボリス・エゴロフ



◀水力発電所工事で最も手間がかかるのは、ダム本体のコンクリート打設作業。この発電所の建設用に特別に開発されたこのバイブレーション・トラクタは、コンクリート打設作業の能率を20倍以上に高めた。

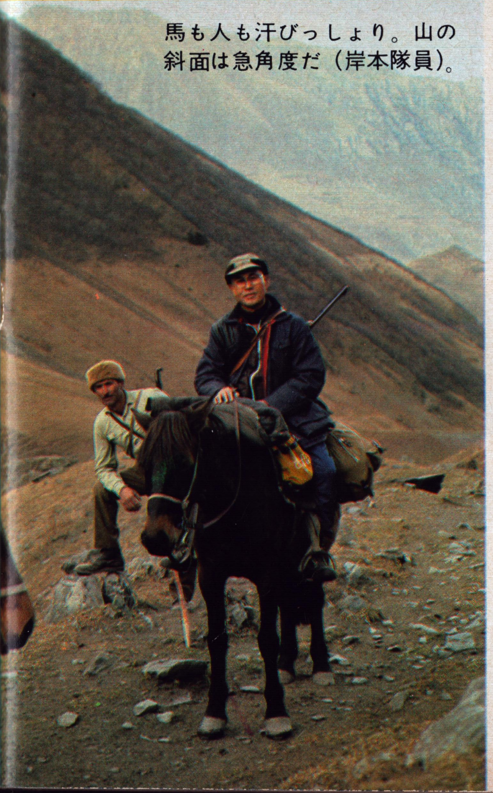
サヤン地域産業コンプレクスの基礎になる。このコンプレクスには、アルミ工場、車両工場、非鉄金属加工企業、エレクトロニクス企業、軽工業企業、食品工業企業など、一〇〇以上の企業が参加する。サヤン・シューシェンスコエ水力発電所はまた、ソ連統一電力系統の新しい強力な一環にもなる。



夕暮れに染まるカフカズの山

カフカズに獲物を追って（下）

文と写真　宮城哲生



馬も人も汗びっしょり。山の斜面は急角度だ（岸本隊員）。



自動車で登れるのはここまで。あとは馬とロバの助けを借りる（小宮団長）。

カフカズにしか生息していないという珍獣ダゲスタン・ツール（山岳山羊）を射止めようと、日本人狩猟団はオルジョニキーゼ近郊のベースキャンプで、期待と興奮で眠れぬ一夜を過ごした。

小宮荘次郎団長、岸本重根、尼カ崎興三両隊員と筆者らは、十分準備を整えてから、朝十一時、青く晴れ渡ったカフカズ山脈の四〇〇〇メートルの高峰に向って、キャンプを後にした。ちなみに、装備としては単身ボルト式固定式のライフル銃を銃弾四十発と一緒にけい行した。ライフル銃は口径七・六ミリのウエザビーである。

テレク川に沿って一時間ほど走ると、もう自動車では登ることはできない。山麓では五頭の馬と二頭のロバ、北オセチアの地元狩猟家六人が、一行を待っていた。ここから、日本人狩猟家たちは馬で山頂に登るのである。猟場で必要な食糧、飲料水、寝袋や洗面具、応急措置の医薬品などは馬とロバで運び上げられた。

カフカズの山は険しく、急斜面には石がゴロゴロと転がり、荒々しい。だが、馬一頭がやっと通れるほどの山路を伝って、猟場に着くと、ここからは、驚くほど美しい山並みが眺望できる。

標高三八〇〇メートルの高所に私たちの山小屋があった。山小屋は白樺の丸太で組立てられ、石で隙間をふさぎ、五—六人用のベッドとストーブを備えていた。

夕暮れに沈んでゆくカフカズの山脈深くに抱かれながら、私たちはソ連人狩猟家たちと屋外の石のテーブルに夕食の宴をひろげた。蒸したニワトリや種々様々なサラミソーセージ、自家製のチーズやリンゴなど、ロバの背で運びあげられた食糧は、いかにも美味であった。

また、トウモロコシで作ったアラカーという名の地酒は、標高三八〇〇メートルの晩秋の食卓では格別な飲み物となった。飲料水は山の麓で、登はんの途中峡谷を流れる川でポリエチレン容器に充たしたものだ。白樺作りの山小屋の前には顔や手を洗う、簡単な設備さえもできていた。

十一月の山頂の山小屋は、いくらストーブに白樺の木をくべても、冷える。わたしたちは、寝袋の中で着のみ着のままでまるまった。

翌朝午前二時日本人とソ連人狩猟家たちは、星明りをたよりに、急な足場を長い棒を使いながら、カフカズ山脈を更に頂上に向かった。夜、山麓で草を食って、早朝リーダーの後について山頂に帰って来るダゲスタン・ツールの群れを待ち伏せするのである。

午前八時、日本人狩猟団長のライフル銃が四〇〇〇メートル級のカフカズ山脈の山々に轟き渡った。つづいてまた一発……。

こうして、北オセチアのソ連国営狩猟場とソ連政府観光総局のスタッフ、地元の狩猟家たちの協力のもとに、カフカズ山脈で日本人狩猟家たち



日本人とソ連人狩猟家たちは石の卓を囲んで、舌つづみを打った。

は初めて大物ゲームを射獲することができた。トロフィーは専門家の立会いのもとに測定され、金賞、銀賞に値することが判った。

ソ連における狩猟は、われわれ外国人にとっては、未だ知られない大きな魅力のひとつだ。その可能性については、まず、つぎのように述べてみよう。ソ連で生息する七〇〇余種の野鳥のうち一六〇種が狩猟の対象とされており、年間に四〇〇〇万羽から五〇〇〇万羽が射止められている。

地上約一〇〇種類の哺乳動物のうち、ソ連では六十五種が狩猟のゲームになっている。ダゲスタン・ツールだけでも、数万頭が生息している。

このように、ソ連ではハンティングは健全なスポーツのひとつと見なされて様々な対策が立てられている。では、現代の人類が直面している環境保全と動物保護という重大な課題と、狩猟の発達とは矛盾しないであろうか。いや、矛盾はしない、ハンティングと動物保護は共存できる。

ソ連では合理的な狩猟は、自然と天然資源保護の全体的な対策の中で重要部門の一つと見なされている。すでにレーニンは狩猟に関する法令に署名している。ソビエト政権初期、によって、狩猟資源の利用、狩猟場の組織と運営規則についてまったく新しい状況が作りだされた。ソ連は狩猟動物相を保護し増加させる方法と手段を探究しつつ、狩猟の発達に力を注いでいる。

（おわり）


日本人狩猟団の射止めた獲物は大きい（小宮団長）


貴重な水は谷を流れる川で得る。

捕鯨にたいするソ連の立場

●読者の質問に答える●

静岡県の読者高橋正雄さんから「捕鯨にたいしてソ連はどういう立場を取っていますか？ その立場は日本の立場と一致しますか？」というご質問をいただきましたので、お答えします。

ソ連は二つの水域で——一九三三年から北太平洋で、一九四六年から大西洋で捕鯨を行っている。近年、国際捕鯨委員会（IWC）のクジラの捕獲量を減らすようにとの勧告に従って、ソ連はそれぞれの水域に二船団を操業させている。

ソ連の活動は、合理的な捕鯨の実施と貴重な海の哺(ほ)乳類の確保をめざしている。

一九四六年以来、ソ連は国際捕鯨取締条約の参加国である。ソ連では、この条約の諸規定とIWCの年次会議で採択される決定に完全にこたえる捕鯨規則が適用されている。

国家監督局はソ連の捕鯨船がこれらの規則を守っているかどうかを定期的に監視している。捕鯨シーズン中は各船団に二人の国家監督官が乗っている。ソ連の法律は規則の違反者に刑法上の責任を含むさまざまな処罰を加えることを規定している。

一九七二年からIWCのわく内で捕鯨にたいする国際的監視の慣行が導入されたが、これにもとづいて捕鯨を行う国は監督官を交換している。今日まで外国の監督官はソ連の捕鯨船が条約に違反した例を一つも指摘していない。

このようにソ連は捕鯨規制措置を申し分なく守っている。ソ連は捕獲割当量の遂行状況を定期的にIWCに報告しているが、それは他の国にソ連の捕獲量を監視する可能性を与えている。

ソ連は北太平洋で捕獲を禁止されたコクジラの捕獲を厳しく規制し、IWCの現行規定に従ってもっぱらベーリング海とチュクチ海の地元民の必要のためにこのクジラの屠(と)殺を許可している。捕獲制限はすでに一九六四年に実施され、一シーズン中二〇〇頭を越えてはならない（実際の捕獲量はつねにこの数字を下回っている）。

すでに一九六五年にソ連は太平洋のクリール諸島にある沿岸捕鯨基地を閉鎖し、のちに北太平洋と南半球で操業していた船団——「アレウト」「スラワ」、「ユーリー・ドルゴルーキー」を捕鯨業からはずした。浮いた捕鯨船は海の哺乳類にたいする科学的調査・研究のために利用されている。たとえば、一九七五年にかつての捕鯨船「ブヌシーチェリヌイ」によって中部太平洋でソ米共同調査が行われた。

クジラの捕獲調整にかんする科学的な提案は、IWCのソ連代表団によって支持された。ソ連のこの立場は昨年キャンベラで開かれたIWCの第29回会議でも改めて確認された。この会議では、さまざまな種類のクジラの厳格な捕獲割当量の制定とならんで、疑いもなくこれらの哺乳類を増やす多くの対策が打ち出された。

ソ連は、クジラの合理的な利用にかんするIWCの科学小委員会の決定を支持し、今後の捕鯨は厳格な科学的基礎に立って、国際的な監視のもとで実施されなければならないと考えている。こういう条件のもとでならば、専門家が考えているように、捕獲対象のクジラの資源は減少しないし、捕獲を禁止されたクジラの頭数は回復するだろう。

IWCにおけるソ連と日本の立場は一致している。日本側の監督官はしばしばソ連の捕鯨母船に乗船し、ソ連の監督官は日本の母船に乗船している。ソ連の捕鯨者と日本の捕鯨者との間の、あらゆる誤解を防ぐ関係は良き伝統となっている。

トピックス

海難救助隊に新鋭タグボート

ソ連では遭難した自国船や外国船の救助に当たる強力な組織が常時活動している。最近、太平洋海域の海難救助隊に新鋭タグボート〝パルス〟号が配属された。パルス号は排水量四〇五〇t、出力九〇〇〇馬力の主機関で最高時速19海里を出す。フルスピードで九〇〇〇海里航続できる。航行水域に制限はない。

パルス号は、浅瀬や岩礁から座礁した船を引っ張る装置や消火装置など公海上の船舶救助に必要なすべての機材を装備している。乗組員は36名で、救出者46人を収容できる。また、55人ずつ収容できる2台のモーターボートと60人分のゴムボート6隻を積載している。



ブトレロフ街を南北に貫くメーンストリート。沿道には次々に新しいアパートが建つ。

モスクワの団地生活を見る (1)

ロベルト・ツファスマン　カメラ　F・グリンベルグ　S・スポーチン

本誌ではすでに何度か、大都市の生活と都市問題について読者のみなさんに紹介してきた。今回は、モスクワのごく平凡なアパートに住む人人に焦点を合わせて、彼らの日々の心配ごとや喜びを紹介しよう。では、アパートを〝視察〟するまえに、まず、その周辺の描写から……。

モスクワ、ブトレロフ街24番地。なぜこのアパートを選んだのか？　それは、多くの点でこのアパートが典型的だと思われるからである。

入居者の社会的構成（主として労働者、技師、ふつうの職員、研究員その他）も典型的だし、これら入居者の収入も平均的だし、子どもが1人ないし2人という家族構成も、多くの現代都市住民と同様に、平均的である。入居者同士のコミュニケーションの水準という指標においてもまた、ここは典型的である。この指標を俗な言葉に直せば、次のようなことになるだろう。どれだけ付き合いがいいか？　客もてなしは？　思いやりは？　まさかのときの助け合いは？　これについては、のちにもっと詳しく語ることにしよう。

このアパートの地理的条件もまた典型的である。ここは、首都のはずれの区にあり、新興住宅地のまっただ中にある。ついでながら、現在モスクワの引っ越し祝いのほとんどはこれらの地域で行われている。その数は、年に一〇〇万回を上回る。ブトレロフ街はまだ若い。コンクリートのアパートが建ち並んでいる場所には、比較的最近まで、傾いた柵をめぐらしたモスクワ近郊の村——コニコボ・ジェレブレボがあった。村は消え、名前だけが残った。

都心まで20分

何年かまえまでは、モスクワの中心部の住民は、新興団地の入居者たちから〝コニコボ・ジェレブレボ〟という住所を聞かされると、同情の入り交じった皮肉な笑いを浮かべるだけだった。だが、いまでは反応がちがう。地下鉄がすぐそばまで開通して、都心まで20分で行かれるようになったからだ。おまけに空気はきれいで、広々しており、すぐ隣に森がある。残念ながら住宅建設が急ピッチで進んでいるところでは、往々にしてその他のサービスは後れがちだが、ここではちがう。団地全体が小居住区として総合的に建設されているからだ。アパートの一階には、店舗、郵便局、貯金局、注文服店その他がある。住宅地の隣には一五〇〇人収容の普通教育学校もある。子ども用と大人用の診療所も一つずつある。現在、もう一つの幼稚園（住宅がふえたので）と学校（やはり手狭になったので）、さらに学校付属のスタジアム（あまり大きくはないが）が建設中である。

簡単に言えば、5年まえに入居した第24アパートの住民は、自分たちのまちに満足しているのだ。だいいち、これから紹介するこのアパートそのもの

が、なかなか悪くない。間取りは合理的に、便利に設計されている。それは容易に手に入ったのだろうか？　おカネの面からすれば、容易だった。なぜなら、入居者にはいっさいおカネがかからなかったからだ。ソ連では、ほとんどの場合、住居は無料で提供される（国営住宅の数に比べれば個人住宅や協同組合住宅の数は、取るに足りない）。

手に入りやすい住宅は、当然のことながら、希望者も多い。希望してすぐ入手できるというケースは、いまのところまだ〝夢〟にすぎない。ここに紹介する人々も、入居するまでには大いなる忍耐を強いられ、気をもまされたのだ。アパートはいくつかの企業、研究所、さらには地方権力機関（すなわちチェリョームシキ区人民代議員ソビエト）の共同出資で建てられた。つまり、ある人々は自分たちの職場の線で入居を申し込み、他の人々は区ソビエトの線で入居を申し込んだのである。ある者は長く待たなければならなかったし、あるものはあまり長く待たなくてすんだ。住宅条件の悪かった人ほど早く入居できた。社会的な功績も考慮された。たとえば傷病軍人には、かなりの特典がある。

毎月の家賃はどうか？　そもそも家賃はあるのか？　ある。だが、家計にはほとんど響かない。このアパートでは2部屋のフラットが月に約9ルーブル。これに、光熱費の約4ルーブルが加わっても、家族の平均収入の3％ないし4％にしかならない。

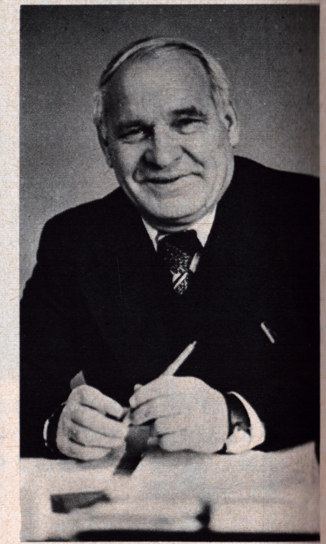

本誌で紹介するブトレロフ街24番地のアパート。このような大量建設には避けられない規格化の要素がないわけではないが、機能的な、典型的な現代建築である。

もう少し数字を並べてみよう。アパート（9階建て、一二八フラット）の建設に国家が支払った費用は九〇万ルーブル余り。この費用を家賃で回収するとしたら、償却までには数世代かかるだろう。だが、現在の入居者の曾孫までかかって、国にその支払いを済ませる義務はない。つまり、家賃はアパートの維持――修理、整備、公共サービス、植木や芝生、その他日常的な仕事に必要な経費の1/3もカバーしていない。足りない分は、国家が支出しているのである。

住民自身の手で

これらすべての仕事を行っているのは、団地管理事務所である。正直なところ、団地管理事務所の仕事は、まだまだ改善の余地がある。たとえば、水道の栓がこわれたとする。修理に来てもらうのに、半日も待たなければならない。修理工が足りないのだ（それほど人気のある職種ではないので、どうしようもない！）。しかし、これから紹介するアパートがある団地の管理事務所は、モスクワでも最良の部類に属する。それは、偶然通りかかった者にさえ、はっきり分かる。このアパート群は、うっそうとした緑に囲まれている。あたりは理想的なほどきれいで、特に住み心地がよさそうだ。子どもの遊び場も随所にある。これらすべては、精力的な管理者であるここの団地管理事務所長ワシリー・ホフロフに負うところが大きい。

ワシリー・ホフロフはつい最近、60歳の誕生日を迎えた。彼の仕事は決して楽なものではないが、彼はいたって元気そのもの。この団地管理事務所が管轄している団地には、22棟の大きなアパートがある。住民は一万三〇〇〇人を上回る。私がホフロフと途切れ途切れにしか話ができなかったからといって、不思議がらないでほしい。おばあさんが〝窓ガラスが割れたのですぐ入れ替えてほしい〟と頼みに来たかと思えば、団地管理事務所の教師（管轄区域内のアパートに住む少年少女のためにこのような職種が設けられている）が来て、団地のアイスホッケー・チームの新しいユニホームのための費用を要求したり、さてはモスクワの他の地域の団地管理事務所の働き手が、経験の交流のためにやってくる、といった具合だったからである。





右上　第23団地管理事務所長ワシリー・ホフロフ
右下　アパート委員会議長アナトリー・サンコフ



▶
ここの団地の普通教育学校はすでに手狭。近くにもう一つの学校が建設中。



▼すぐ近くにセルフサービスの店がある。主婦はもう都心から買い物を下げて帰らずにすむ。

「ここの団地は、実際のところ、悪くありません」とワシリー・ホフロフはあとで語った。「しかし私は、それは団地管理事務所のおかげではなく、何よりもまず住民自身のおかげだと考えています。とても私たちだけの力には負えなかったでしょう。たとえば、ここでは二四〇〇本の樹木を植えました。向こう3年間に、さらに五〇〇〇本の樹木と三五〇〇本の低木が植えられるでしょう。これらのほとんどは、住民の手になるものです」

「しかし」とホフロフは続けた。「環境の整備に責任のある人間が、手をこまぬいていたなどと考えないで下さい。人間は本来、自分の家をきれいにし、そこをきちんとさせようと思うものです。

子ども広場やアイスホッケーのリンクを整備するためにも、住民たちは少なからぬ努力をしました。ここには、アパートの空き部屋を利用して住民たちが労力と物を出し合って作った図書館もあるし、住民間の小さなもめごとを審理する同志裁判所もあります。生活は結構小さなことがらから成り立っているのです。概して、ここでは世論が、あらゆることに決定的な役割を果たしています。追い追い分かることですが、あなたが取材しようとしているアパートではいま、アパート委員会議長アナトリー・サンコフが積極的に活動をしています。サンコフは37歳。機械学研究所の研究員で、計器の専門家です」



新しいアパートの下の階はたいてい商店になる。この書店では、朝から晩まで一日中混雑している都心の書店よりも簡単に新刊書が手に入る。

ここの幼稚園はひじょうに評判がいい。だから、おばあさんのいる家庭でも、進んで子どもをあずけている。



アパート委員会（9人で構成）は、選出制の機関で、地方自治の独特な形態である。この委員会は五〇〇世帯の住民の利益を代表し、一棟だけでなく、隣接する三つの棟の住民をも統合している。このようにいっしょの方が、より合理的で、仕事の処理も楽だからである。

どんな仕事を処理するのか？　植樹や芝生のことはもう話した。だが、それがすべてではない。少しまえ、住民は自分たちで、マイカー用の駐車場を二ヵ所つくった。休日ごとに、人々は個人個人の創意で、アパートの庭の手入れを行っている。

「〃問題児〃対策はどうしていますか？」と私はサンコフに質問した。

「ここには、そのような子どもはほとんどいません。乱暴な振舞いや下品な行為をみんなが許さないというふん囲気ができているのです。かといって、みんながそれぞれ勝手なことをやっていて、互いに干渉しないということではありません。ですから、乱暴行為は実質的にありません。もちろん、腕白者はいます。しかし、それでこそ子どもなんですよ。

話はこのくらいにして、私たちが住んでいるアパートを、実際に見ていただきたいですね」

こうしてわれわれは、ブトレロフ街24番地のアパートの〃視察〃を始めたのである。これについては、次号で語ることにしよう。（つづく）

背丈を伸ばしたい？どうぞ！

―新抽出法の成長ホルモン

ゲオルギー・ロジンスキー

入念に栓をした試験管の底に、白い粉末がひとつかみ。全部で数mgもあろうか。だがこれだけでも、人間の背丈を数cm伸ばすのに十分な量である。この粉末の正体は――成長ホルモン。

モスクワ腫瘍学研究所の専門家グループは、すでに数年にわたって、人間の成長を調節する問題と取り組んでいる。この研究の指導者は、生物学博士のアナトリー・ラザレフ教授。

ラザレフ教授はこう説明した。

「成長ホルモンは、脳底にある内分泌腺――脳下垂体で作られます。

成長ホルモンは、体内で重要な役割を担っており、その主要な役割は、からだ全体や身体各部の生命機能の基となっている生化学的過程を調節することです。このホルモンが不足したり多すぎたりすると、人間の成長はとまったり、あるいは異常に成長しすぎたりします。つまり、正常な成長を維持するには、ホルモンが足りなければ、それを身体に加えるとか、多すぎれば、その作用を停止させるとかしなければなりません。もっともこれは、ソ連や外国の専門家によって以前から知られていることです。だが、このホルモンを純粋な結晶体として得るためには、脳下垂体からこの〃成長の元〃をどのように分離したらいいかがまだ分かっていなかったのです」

ラザレフ教授は、成長ホルモンの抽出方法を開発した。このソ連の医学者の方法に基づいてつくられた新しいホルモン剤の長所は、長期にわたってその効力を減じない点にある。

成長をとめたいと願っている人には、成長ホルモンの活動をとめるいわゆる抗血清がある。これもまた新しい方法によって得られた。抗血清は、ある場合にはガン細胞の成長をとめたり、糖尿病の治療にもよくきく。抗血清は、重症の糖尿病患者の糖代謝を正常にする。同時に、投与されるインシュリンの量は減少し、時には、全然投与しなくてすむようになる。

ラザレフ教授に新ホルモン剤の実験結果について語ってもらおう。

「われわれは、成長がすでに停止してしまったか、その反対に、年齢の割には異常に背の高い9歳から12歳までの子供たちを主として治療しました。たとえば、背丈が一〇六cmでとまってしまった9歳の男子が連れてこられました。この年齢で一〇六cmというのは、背が低すぎます。われわれは、試薬を少年に投与することにしました。そして2ヵ月間で少年の背丈が1.5cm伸びるという、最初の結果が出たのです。

ある患者には、その人のからだが成長能力を持っている間中治療する必要がありますが、ある患者には、一種の刺激のために2、3ヵ月の治療で十分なこともあります。もちろんこのホルモン剤は、患者にまだ成長能力がある場合にのみ有効です。成長能力の有無は、手のレントゲン写真で簡単に判定できます。関節軟骨が硬化していないかぎり、人間には成長能力があるからです。

このホルモン剤を広く臨床に役立てるにはまだ多少の時間を必要とします。なにはともあれ、まだわれわれの手許には少ない脳下垂体を、たくさん手に入れる必要があるのです」

ソ連ではいま、〃脳下垂体銀行〃を作ることが考えられている。そうなれば、ラザレフ方式で得られるホルモン剤は、だれにでも利用できるものとなるだろう。

トピックス＊

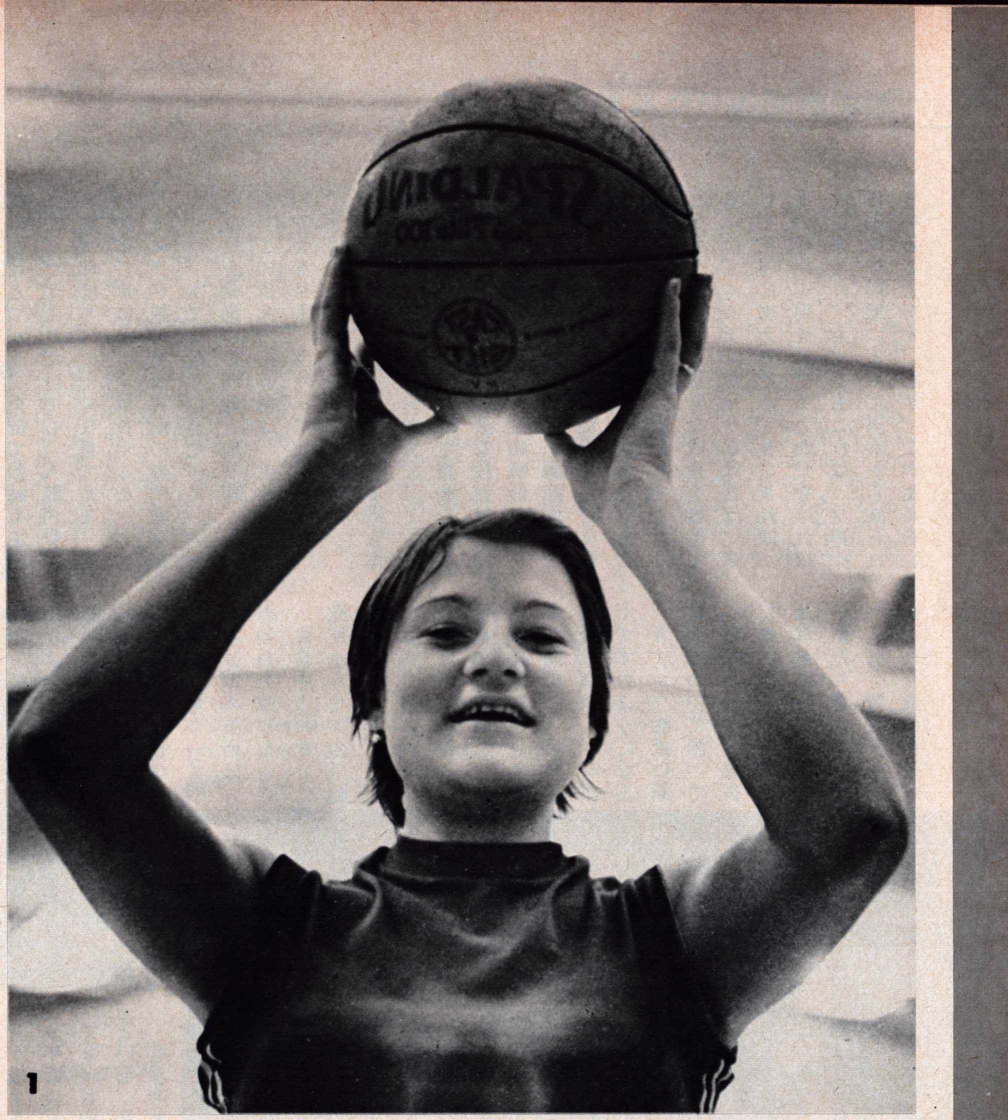
五輪史上最大の青年オリンピック村

モスクワの西方にイワキノ村がある。この小さな村は、80年オリンピックまでに、その姿を一変するだろう。ここは国際青年オリンピック村となり、9階建ての住宅のほかに、室内プール、喫茶店、スタジアム、ボート場、水浴場などが建設される予定だからだ。その広さは37ha。

国際青年オリンピック村は、各国の青年代表がオリンピック競技を見学したり、オリンピック文化行事に参加するための基地になる。各国のNOCは、IOCの規定に従って、オリンピック参加者数に応じて自国の青年スポーツ代表団を結成する。

この国際青年オリンピック村は、オリンピック史上最大の規模になるだろう。世界一〇〇ヵ国からの青年男女二〇〇〇人以上を受け入れる（モントリオールでは60ヵ国一二〇〇人だった）。

村での仕事は自発性を原則とし、義務的な行事は一切ない。文字通り、世界の若者の友好の村となるだろう。



全従業員にスポーツを！

ウラル重機工場スポーツクラブの活動

スポーツ

〃ウラルマシ〃――これはウラル中部のスベルドロフスク市にあるウラル重機工場の略称だが、この工場のスポーツクラブ（会員二万二〇〇〇人）の名称も同じ〃ウラルマシ〃。長年、ソ連サッカー選手権の第2部リーグで活躍している地元人気チームの名前も〃ウラルマシ〃である。

この大企業の従業員たちのスポーツ生活について、フィラレト・シャトロフ工場長に語ってもらおう。

企業や施設に体育団体を創設し、スポーツを盛んにするには、希望者がいるということと、そのための設備があるという二つの条件が必要です。そして、公式に登録された独自の名称を持った独立したスポーツクラブとして発足するには、体育・スポーツの発展においてこの団体が一定の成果を上げていることが必要です。われわれの工場ではこれらの条件を満たしています。

〃ウラルマシ〃は工場のスポーツクラブの正式名称です。このクラブは全ソ的なスポーツ協会〃ドルード〃に加盟

1 〃ウラルマシ〃バスケット・チームのオリガ・バルイシェワ選手。ソ連代表選手で、欧州・世界両戦手権、モントリオール・オリンピックに優勝。

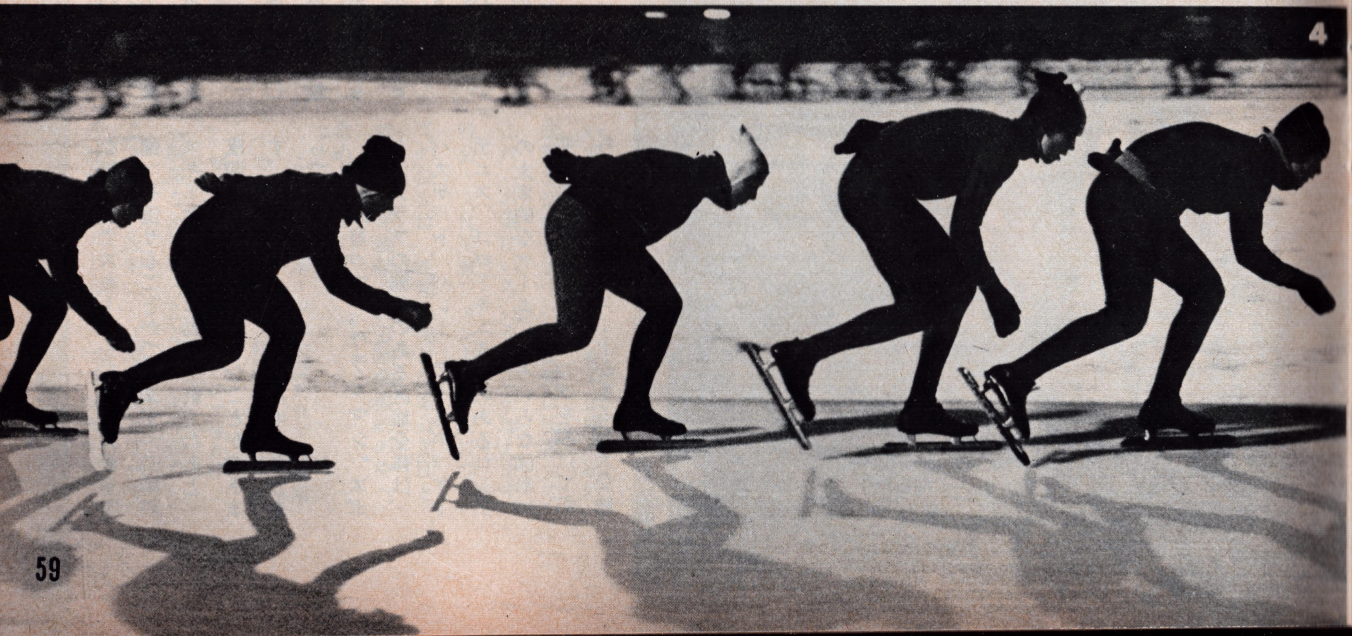
2 工場のスキーヤーたち。現在、スポーツクラブのスキー部員は一二五〇名。

3 工場のサンボ選手はウラル地区だけでなく、ロシア共和国全体でもトップクラスにある。部員は約五〇〇名。

4 人工リンク〃ユーノスチ〃で練習するスケート部員たち







しています（ソ連にはこういうスポーツ協会がいくつもあり、国民経済や文化などの特定部門の労働者・職員をそれぞれ会員にしている）。

〝ウラルマシ〟スポーツクラブの持ち主は、工場の労働組合です。労働組合工場委員会がスポーツクラブの全活動を指導しており、労働組合の予算から競技会を始めとする各種行事、スポーツ用具の購入などにかかる経費を支出しています。一方、上部団体である産業部門別の労働組合（この場合は機械工業労組）が専従のコーチや指導員の給料を払っています。〝ウラルマシ〟スポーツクラブにはそういうコーチ、指導員が80名以上います。

〝ウラルマシ〟スポーツクラブはどういう施設を持っていますか？

一万五〇〇〇人を収容するスタジアムを持っていますが、ここにはサッカー・コートと陸上競技用のタータン・トラックがあります。サッカー練習用に（何しろ、サッカーは〝ウラルマシ〟で最も人気の高い種目の一つなので）さらにコートが2面とスタジアムが一つあります。このスタジアムの隣には室内温水プール、体操用、バスケットボール用の体育館があり、工場の重量挙げ部とレスリング部が練習する部屋もここにあります。

一番新しい体育施設は、面積三〇〇〇平方mを上回る冬季用の室内陸上競技場です。ここはウラルの寒さが最も厳しいときでも、いつも暖かく暖房されていて、陸上競技、ハンドボール、バスケットの練習と試合が行われています。この室内陸上競技場の近くから松林が始まっていますが、ここにはスキー基地があり、いつでもごくわずかな借り賃でスキー（一二〇〇人分を常備）を借りることができます。工場のスキーヤーたちは勤務を終えたあと、夜間でもスキーを楽しむことができます。5kmのコースは夜間照明付きだからです。

率直に言って、〝ウラルマシ〟スポーツクラブの施設のある区域全体は、バスケット、バレー、アイスホッケー、テニス、ゴロトキ（人気のあるロシアの大衆的なゲーム。いろいろな図形に並べた丸棒を、スティックを投げて打ち出す）などのコートがある壮大な総合スポーツ基地です。

これほど設備の完備したスポーツ基地をつくる上で工場当局はどういう役割を果たしているのですか？

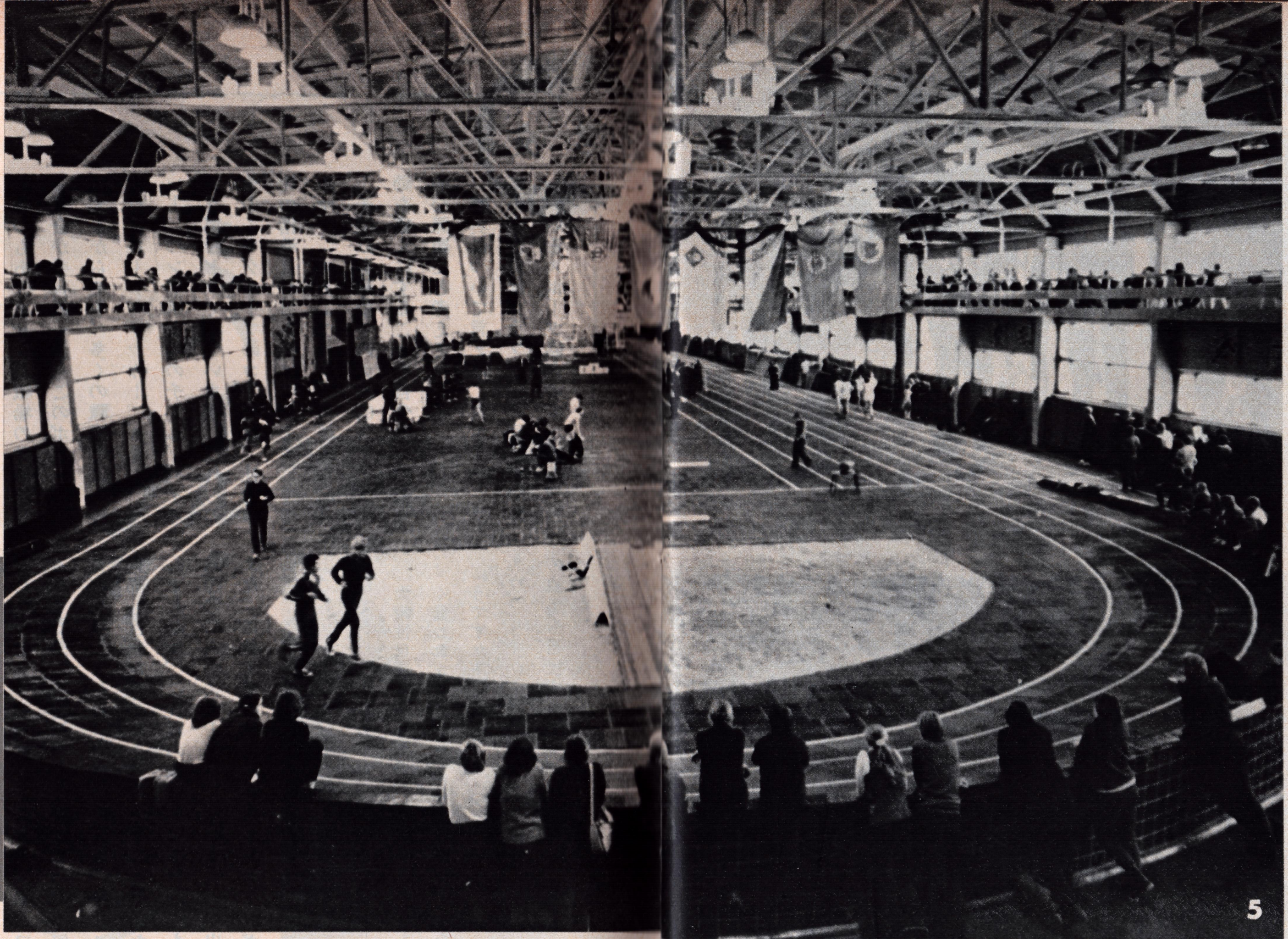
これらのスポーツ施設はすべて、工場の資金で建設されました。スポーツ施設の従業員（スタジアム作業員、衛生担当技手、電気係、掃除婦、運転手）の賃金も工場の同じ資金で支払われています。工場はまた、スポーツ施設の暖房費、水道料金、電気料金、修繕・改造費用を負担しています。昨年はスタジアムのグラウンドの改修とサッカー場の夜間照明設置だけでも、工場は一二万五〇〇〇ルーブルを支出しました。

工場はこういう多額の資金をどういう財源から得ているのですか？

工場の利潤からの控除で形成される社会・文化発展フォンド（基金）からです。これが工場のスポーツの基本的な財源になっているのです。すでにお話しした室内陸上競技場の建設には、この基金から六〇万ルーブルが支出されました。工場の労働組合の年次協議会に、労働組合委員会はこの基金の使い方について自己の提案や工場当局の提案を提出します。従業員は協議会でこれらの案にいろいろ修正を加えます。社会・文化発展フォンドの使用についての決定は、工場当局と従業員集団との間で毎年締結される団体協約の中へ含められます。

これらのスポーツ施設はだれでも利用できるのですか？　利用のさいに何か制限とか特典とかはないのですか？

制限などということは、あり得ないことです。反対に、工場当局とすべての社会団体――労組、コムソモール、



5　〝ウラルマシ〟スポーツクラブの一番新しい施設――室内陸上競技場。



6　工場のプールには子どもたちもやってくる。

その他の団体は、工場の事実上すべての従業員を体育・スポーツに参加させようと努力しています。かなり雄弁なと思われる数字をお目にかけましょう。現在、〃ウラルマシ〃スポーツクラブは各現場や部局にある78の体育部を統合しており、種目別の少年スポーツ学校を5校持っています。中高年層の人たちのために、いわゆる〃健康グループ〃が組織されています。ここでは医師の監視の下に負担を軽くしたプログラムで体育とスポーツをするのです。

　体育活動オルグのいないような職場は一つもありません。職場の労働組合委員会が委員の一人をこのポストに選任するからです。多くの職場では一般体育グループ、サッカー、スキー、バレー、ハンドボールのチーム、ハイキング部などができています。これらのチームやグループのコーチは、社会奉仕の指導員が引き受けています。〃ウラルマシ〃スポーツクラブの評議会、コーチ団は各職場での大衆的スポーツ活動を盛んにすることを自分たちの基本的な課題だと考えています。

　特典について言えば、スポーツクラブの全会員はクラブと、クラブが加盟しているスポーツ協会のすべての施設、設備、スポーツ用具を無料で利用できますし、クラブの試合に出場できます。なお、〃トルード〃スポーツ協会の会費は、ほかのスポーツ協会も同様ですが、年間たったの30コペイカで、タバコ一箱の値段です。

そうすると、ウラル重機工場ではスポーツは大衆的性格を帯びていると言っていいでしょうか?

　数字を少しだけ挙げましょう。昨年の種目別の工場選手権大会にはサッカーが40チーム、バレーボールが64チーム、アイスホッケーが30チーム参加しました。七六—七七年シーズンの工場スキー大会には五〇〇〇人の労働者、職員が出場しました。各現場や部局の体育部も自分たちのスキー選手権を開催しましたが、これらの体育部には合計八〇〇〇人のスポーツマンがいます。また、この工場には〃最優秀スポーツ一家〃のタイトルを争う特別の競技会まであります。まだまだ例を挙げることができますが、もう十分でしょう。

大衆性は高い技術水準を生み出すとよく言われますが、この点での成果はどうですか?

　〃ウラルマシ〃スポーツクラブは、この点でも自慢できます。たとえば、男子バスケットボールの世界最強チームの一つ、ソ連ナショナルチームにはわがスポーツクラブ出身のセルゲイ・ベロフ、アナトリー・ムイシキン、スタニスラフ・エリョーミンが加わっています。工場の女子バスケットボール・チームには、モントリオール・オリンピック優勝、世界・欧州両選手権優勝のオリガ・バルイシェワ選手がいます。また、ラリサ・ポゴレロワ選手も昨年の欧州女子バスケットボール選手権で優勝したソ連チームのメンバーでした。旋盤工のアレクサンドル・フョードロフもサンボの前欧州チャンピオンで、何回もソ連チャンピオンになってわがスポーツクラブの名を高めてくれました。〃ウラルマシ〃のサッカーチームはもう何年もソ連選手権リーグの2部に出場しています。ドイツ民主共和国、ポーランド、ハンガリー、ブルガリア、フィンランド、フランスなど、これまで何回も外国へ遠征しました。スベルドロフスクのわれわれのスタジアムでも外国のサッカー・チームとの親善試合が何回も行われました。

カメラ　E・コトリャコフ

トピックス

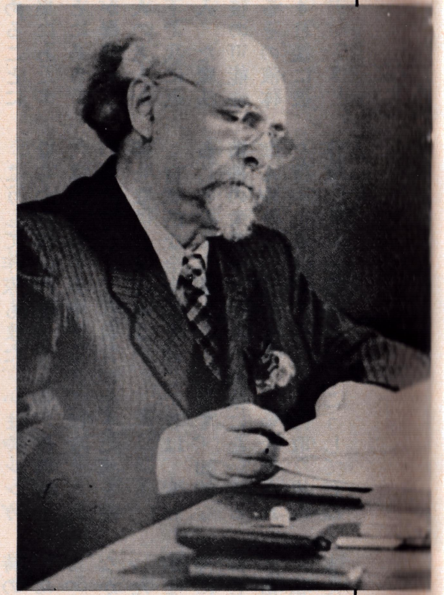
カムチャツカの地熱利用

　カムチャツカで天然の蒸気と熱水を利用する事業は、20年前に始まった。この間にソ連最初のパウジェツカヤ地熱発電所が建設された。この発電所は、半島の主要都市ペトロパブロフスクにキュウリ、トマトなどの野菜を供給する温室栽培コンビナートや漁業コンビナートなどへエネルギーを送っている。これによってパラトゥンカ川の渓谷が大きな保養地帯となり、二つのサナトリウムと多数の温泉付き休養施設ができた。地熱利用のお陰で、高くつくカムチャツカへの石炭や重油の輸送が削減され、以前は薪にされていた森林が保護されるようになった。

　地熱地帯の開発は続行中で、現在地質学者は一五〇〇mのボーリングに成功し、さらに二五〇〇—三〇〇〇mのボーリングを計画している。調査ずみの蒸気埋蔵量によりパウジェツカヤ地熱発電所の出力は二万五〇〇〇KWに向上する。

ミハイル・プリーシビン

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ



ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

　ミハイル・プリーシビン（一八七三—一九五四）の長い生涯は、表面的にはあまり事件に富んではいませんが、精神的にはきわめて充実したものでした。プリーシビンは生活や創作の意味についてのたくさんの日記的な覚え書きを残していますが、これをもとにして彼の死後、『忘れな草』が編さんされました。この本は、その深い哲学的な内容で人々を驚かせます。野に咲く控え目な草花からとったこの本の題名そのものに、象徴的な意味が込められています。それは、忘れ形見とか追憶などの概念を呼び起こします。

　プリーシビンは生涯——彼の言葉によれば——祖国の自然の中に人間の魂のすばらしい面を探し求め、発見しようと努力し、このすばらしいものについての知識と記憶を人々に贈ろうとしました。

　彼は疲れることなく、人間と自然の深い一致が必要なことについて、人間と自然は血がつながっているのだということについて、想起させようとしました。プリーシビンは日記に書いています——「寝るまえに再び、全生活の表現しがたい思いが戻って来た。人間は、それだけではただ人間でしかない。自然にあるもののすべてを自分の中で結合させ、これら自分の一部をそれぞれの場所に配置することによって、しかもそれが正しくそれぞれの場所に配置されるなら、生活には何か新しいもの——文化とか進歩とか創造とか、さまざまに呼ばれるものが得られる。そのとき、全自然は人間に含まれるだろう。

　人間の中で調和ある活動が得られなければ、自然は人間からこぼれ出て、美と醜、善と悪、真実と虚偽、闇と光、戦争と平和へと飛び散って、ばらばらになってしまう」

　この〃調和ある活動〃とは、人間による自然の積極的な理解と霊感化にほかなりません。プリーシビンは、詩は事物や現象の本質を捉える偉大な力を持っている、と考えていました。彼が詩人たちを〃自然の魂〃と呼んでいたのも偶然ではありません。

　プリーシビンが文学活動を始めたのは比較的おそく、33歳になってからでした。彼はロシアの中部地域——ロシアの文化にツルゲーネフ、レスコフ、ブーニン、レオニード・アンドレーエフ、フェートなど、一連の第一級の作家を生み出した場所で育ちました。

　プリーシビンの父親は小地主でした。幼いときからプリーシビンは、農村の自然の自由な世界や農民の生活に親しみ、おとぎ話や伝説に聴き入りました。すでに円熟した作家になってからも、彼は自分のことをこう語っています。

「私の経験の中の祖国という感情が、創作の基礎です」。

　プリーシビンのたくさんのおとぎ風の物語、おどろくほど豊富なロシアの話し言葉をちりばめたそのロマンチックな散文の文体は、芸術家によって詩的形象の複雑な体系に変えられている人民的世界観の特徴を、この上なくよく示しています。

　プリーシビンの最初の本（記録小説集）は、一九〇七年に出ました。このころまでに彼は、農学を修め、マルクス主義を宣伝したかどで数ヵ月、ツァーの監獄に入れられていたこともあります。彼は生活の中に不屈に自分の道を探し、それを作家の仕事の中に見出しました。

　全国を旅して、プリーシビンは『おびえない小鳥の国で』『見えない都市の城下で』『魔法の丸パンを求めて』その他の作品を書き、ロシアの農民の多様な生活を示しました。農民の生活、習俗、心理、文化を研究して、プリーシビンは重大な社会的諸矛盾を目ざとく見抜いていました。苦しい、困窮と悲しみに満ちた生活を観察しながら、同時にプリーシビンは、ロシアの農民の中にある精神力の強い、創造的な労働の能力ある、自然と和して生きることのできる天性を見分けることができました。

　一九一七年の10月革命ののちに、プリーシビンは人間の自由な労働の、新しい社会的諸条件のもとにおける新しい生活のあり方の、芸術的研究者となりました。

プリーシビンの作品は、きわめてリリカルで告白的です。彼は自伝的大作『カシチェイの鎖』や、自然についてのたくさんの中編や短編、おとぎ風の歴史小説『君主の道』、伝説的な〝生命の根〟についての哲学的散文詩『チョウセンニンジン』の作者でもあります。彼が何を書こうとも、どんな題材を扱おうとも、彼の作品の中にはつねに、作者の直接の声、緊張した精神的探求が生きています。

たとえば次のような文章には、彼の散文に特徴的なイントネーションがうかがえます。

「悲しみのあまり我を忘れ、目を伏せて道を歩いていた。水溜りには森が見え、青色の中に、木々が見事にそびえていた。こんなすばらしい空はどこから現れたのだろう？目をやると、空が見えた。私の芸術もまた、友よ、自然や空や木や水といっしょに、われわれには見えない人間の全体がわれわれの背中ごしに見える水溜り以上のものではない。私はただ、あなた方が注意を向けてくれるように書いているだけだ」

本号に紹介する『忘れな草』からの抜粋は、プリーシビンの創作の文体と内容についての概念を与えてくれるでしょう。プリーシビンは〝行為としての芸術〟という表現を好んで使いましたが、この表現のもとに彼は何を理解していたのかということを、少し詳しく説明したいと思います。

プリーシビンにとってそれは、自分の仕事への芸術家の完全な献身を意味しています。彼にあっては、創作と個人生活とのあいだの分離はありません。芸術は、自分から、エゴイズムから〝逃れることので きる喜ばしい能力〟なのです。

このような行為は、プリーシビンの考えによれば、原則的にはだれにでもできることで、人間は、自分の生活の芸術家になることができるのです。「生きているがままに書く」とプリーシビンは死の少しまえに日記の中でくり返しています。

「私が書くのは、愛するからだ」というのも、彼が心に抱いていたもう一つの考えです。「生涯かけて、詩の中へ散文を持ち込むために苦しんだ」

このような創造の苦しみ、この愛、生活と同等なこの作家の仕事が、プリーシビンという大きな芸術家、哲学者、散文の詩人を世界に与えてくれたのです。

〔随想〕『忘れな草』より

行為としての芸術

ミハイル・プリーシビン

作家の苦労は、材料を集めることにあるのではなく、材料の収集にあたって自分の個性を維持することにある。

そのさい私には、ある家が爆発したときに生き埋めになった一人の老人が思い出される。彼は廃墟の下で我に返り、無事に残った、お茶の入った魔法ビンをさぐり当てると、最後の可能性までもたせようと、薬効あるその液体を少しずつ飲みはじめた。4日後に彼は掘り出され、生き残った。

こうして作家もまた、いまやレンガならぬ材料に埋まっており、材料の下では、精神を集中するのではなく、その重さのもとで、自分の生きた魂を維持しなければならない。

自覚的な全生活を通じて私は、変わることなく喜ばしく、元気で、知的な精神の栄養の、不断の源泉にたいするぼんやりした要求を持っていた。それを持って私は、かつて独学に取り組み、作家にそれを期待した。こうして私は詩の中に、実際に喜びの源泉を見出した。

だがそれは、何らかの外的な原因によって、時には見えたり、時には見えなかったりする、定まりない源泉であった。詩人は従属的な人間であり、自由なのはただ、「見事な動詞が敏感な精神に触れた」ときだけだ。一方、私が探している喜びの不断の源泉は、偉業の道にある。

私のテーマ「行為としての芸術」もまた、詩を偉業に変え、それを〝聖なる仕事〟に変えようという試みである。

*

朝早く起き、露の朝のナイチンゲールの響きよい歌のもとで、生活の快さを吸収した。こうして今、自分の不安と弱さの起源が、何とはっきり見えることか。精神の集中を忘れたときは、いつもそうだ……

自分を集中させる能力は、ほかならぬ自由の、そしてもちろん力の発見である。そのための時間を惜しむにはあたらない。なぜなら、集中した人間は、時間を必要とする偶然事に遭うことが少ないからだ。

*

作家に〝創作の秘密〟を問うことは、私には雄ヤギに乳を要求するのに等しいと思われる。雄ヤギの仕事は、雌ヤギを愛することであり、雌ヤギの仕事は、乳を出すことである。

これは創作についても同じことで、問わなければならないのは生活であり、自分で生きることが必要なのであって、生活に惚れ込んでいる芸術家に、「自分も同じように惚れ込むにはどうしたらいいか？」を問う必要はない。

我を忘れて、生活を燃やしている火に、身を委ねなければならない。

生活はどこから見ても、どこから近づいても、同一に見える。なぜなら生活は、太陽のように丸くて、どこでも均一に燃えているからである。

*

私には、この世にあるかぎりの生活の最大の喜びは、生みの苦しみのあと自分の赤ちゃんを見たときの女性が味わうものだと思われる。思うに、この喜びは、われわれすべてがそれぞれの幸せの中で部分的に味わうあの喜びを、その中に含んでいる。このように、行為についての芸術の中で自分の日常生活のために見出した思想もまた、すべてに当てはめたくなる。

ただ私は、すべてがまだ眠っている日の出どきにだけ、純粋になることができる。他の者は、朝眠って、深夜に純粋になる。だから私には、サリエーリは行為の中にあったが、行為のない人間だったモーツァルトと比べると、彼には見るべきものが何もなかったように思われる。

問題は、私の考えの中にある行為とは、点数で測られる学校での行為ではないという点にある。私の言う行為は、つくられたものの耐久性で測られる。この観点からすれば、完全な個性を持った創造者として、モーツァルトは然るべく振舞い、それを理屈っぽい行為で置き替えなかった。

だから私は自分のことについて、私の詩は人間と私の友情の行動であり、したがって私の行為——書くことは、愛することである、と言いたい。

*

私は悲しみにおいても、喜びにおいても、いくらか困惑させられる。悲しみが訪れると、私は悲しみの対象をではなく、私の心臓のあたりで、糸巻きをますます固くしめながら、悲しみの特別な紘が張られるのを感じる。そして、それはすでに自分の歌をうたっている……頭に何かが浮かんでも、この歌のもとでは、脱穀機にかかった穀束のようなものだ。すべてが悲しみに変わる——私の愛も、栄光も、ロシアも。

逆に、喜びの紘が張られると、たとえ天気が悪くても、紙の上にはいいものができ、自然がすばらしければ、私は散歩に出かけ、一歩ごとに、私には奇跡が展開される。

朝起きて、私は感じる——喜びの紘がうたっている。

「右足で立った！」と隣のイリーナが扉のかげから言う。

あるいは、悲しみの紘を感じる。

「左足で立った！」とイリーナが理解する。

こうして一日中、この実在が私の意識を規定する。

だが私は、それがいやでたまらないのだ！ 私は自分の中に、私の実在を規定するような意識を探す。私は実在の紘を、自分で調整したい。私は、私の芸術が、私の実在の気まぐれになることをではなく、私の行為になることを望む。

私は初雪を見逃がした。だが後悔はしていない。なぜなら夜明け前に、夢の中で白い鳩が現れ、あとで目を開けると、狩猟でも必ずしも知ることのできない白い雪と朝の星の、あの喜びが分かったからだ。

飛び行く鳥の温かい空気が、翼であおられ、やさしく顔を包み、朝の星の



光のもとで、歓喜した人間が起き上がり、小さな幼な子のように請う――星よ、月よ、白い光よ、飛び去り行く白い鳩をとどめておくれ！　この朝、あらゆる光、すべての星、月や太陽、すべての明るく照らされた花や草や子どもたち、地上の生きとし生けるものの源泉としての私の愛という概念の関係は、このようなものだった。

それから私は、白地に黒くはっきりと、カシチェイ的な人々の幼稚なトリックを見て、自分自身のことを考えた――はたして私は、カシチェイの鎖を投げ捨てることができただろうか？

ひとりの詩人が記憶によぎる。彼は自分の実際に貴重な詩を、生活への贈り物とは考えずに、その詩によって自分の生活の代用とした。こうして彼は、自分の聖なる泉を忘れてしまった。

結局のところ、詩人の〝地位〟が彼を滅ぼしてしまったのだ。

だが他方では、どうあるべきか？　創造が鎖からの解放の力であるとするなら、その創造そのものはまた、鎖でつなぐこともできる。創造の力をいかに決意にまで維持し、いかに死そのものと闘うべきか？

それを考えていると、創造の力は、永遠の幼年時代をそのあらゆる姿で地上に維持しているのと同じあの貯えによって維持されている、という考えに到達する。こうして、ふたたび明快になる。ある者は、子どもたちを減らすことによって、生活の負担を意識的に軽減し、他の者は、ふやすことによって、自分のアリ塚の中で果てしない幸福にひたっているのだ。

すべての秘密は、自分にこのような明快さ、耕すのが楽しい畑を確保することにある。他の者は、それを羨ましがらない。彼の足もとにはやはり畑があり、手には同じ犂があり、同じ手綱があるからだ。すべては同じだ。だから私は、畝に沿って、歌をうたいながら行き、彼は、ののしりながら行く。

アナトール・フランスのように、自分を教養ある、際立った人間だと感じながら書くこともできる。あるいはロシアの作家たちのように、他人との論議のための問題を提起するかのように書くこともできる。

*

小説は、それ自体として読み返すことはできない。くり返すことができるのは、詩と英知だけである。だが小説は、何よりも安易に読まれており、書かれている。

小説は、安易な行為の詩である。本物の芸術は、内的な深い行為によって示唆される。そしてその行為は、不滅への人間の志向の中にある。

川は、隠れた泉によって養われている。みんなは川を利用するが、その背後には泉があるのだ。作家が書く場合も同じである。彼の魂の背後にあるものによって書かれるのだ。だが、われわれは全員、小声で尋ねる――その魂の背後にあるものは何か？

ひじょうによくあることだが、作家は輝かしいのに、彼の魂の背後には何もない。

だれもが、プーシキン、レールモントフ、フェート、ブロークの魂の背後にあるものを知っている。そしてここにわれわれのすべてが知っている詩人がいる。いまその名をあげれば、みんなは声をそろえて言うだろう――「ひじょうに軽快に楽しく書いている、ただし彼の魂の背後には何もない」



随想『忘れな草』より

20本の黒スグリの木の枝を摘んだ。疲れると、庭仕事という魅力的な空想の欺瞞を感じた。この空想が生まれたとき私に土地があったなら、私は庭仕事に出て、すばらしい庭師になっただろう。だが私には、庭はなかった。私は言葉の上で庭仕事をし、何千人もが散歩し、何百万人もが通れるほど大きな庭を、言葉でつくった。

私が同じ空想を抱いて言葉の上で行った仕事と比べれば、いまやこの剪定の仕事など、ものの数ではない。何たる**行為**の驚くべき例。

急に人々に語りたくなり、人々に簡単な材料を手渡したくなったら、行って語るがいい！　これらの簡単な言葉を語るためには、自分自身の中に全宇宙を展開しなければならない。頭の中で思想を感じ、知っても、語ることはできない。

自然もまたそのようなものだ。すべてを知るだけでなく、人間は語らなければならない。

散文詩

詩をもって散文に入った自分の運命に感謝した。なぜなら、詩は散文を動かすことができるだけでなく、もっとも灰色の生活を光り輝くものにすることもできるからだ。このような偉大な功績は、チェーホフのようなわが詩人散文作家のものでもある。

この点では、自分をひじょうに小さく感じる。だが、私の道は正しく、真にロシア的、すなわち人民的であり、それは疑いない事実である（私の読者がほとんど日常的に証明してくれる）。

*

きのう、私たちは歌声を耳にして、木の上を見た。そこにはゴジュウカラがいた。この敏捷な、永遠に多忙な小鳥は、小枝にじっととまって歌っていた。

そうだ！　考えなければならないのはただ、ゴジュウカラが歌っていたということだ！

今日、ゴジュウカラは同じ枝にとまって、口に小さな乾いた枝をくわえている。きのうは歌っていたが、今日はもう巣をつくっている。だが私は、きのうその歌を聞いたので、幸せだった。〈つまり〉と私は考えた。〈生活のもっとも峻厳で先鋭な真実でさえ、その中に、歌やおとぎ話を秘めているのだ〉――すると、どれほど、それを物語ったり歌ったりする運命が私に当たればいい！　と思われたことか。

空想は、すばらしい世界の先ぶれであり、その世界は、それ自身の中で克服され改造された灰色の現実そのものの中にある。

研究者の仕事は、偶然によって動かされてしまった人間や物を、もとの場所に納めることである……芸術家は、卵の白い石灰質の殻に絵の具を塗るのではなく、その中の胚に迫るように、生活そのものの中に入り込まなければならない。

物事を自分の目で、しかもそれと初めて出会ったかのように見なければならない。知性の殻を貫いて、クチバシを世界へ突き出すのだ。

芸術家はそれを知っている。だから、彼の最初の言葉は、おとぎ話。

私は初めて地下鉄を見たときのことを思い出しながら、地下鉄のエスカレーターで下へおりていた。あのとき、私は地下鉄を見、地下鉄のことを考えていた。いま、私は別のことを考えている。地下鉄は意識の中へ入ってこない。私には、本来の意味で生きているのは、驚きの中で生き、世界を見飽きることのない人々だけであり……他の人々は無意識的なくり返しの中で生きているように思われた。そしてこの原理にまで昇格した無意識的なくり返しが、いわゆる〝文明〟なのだ。

何か恐ろしい疫病が人類を捉えている……この病気は、人間が**物**にすっかり従属しているところにある。人類の救済、その回復は、**驚き**によって始まるだろう。

詩は、人々がそれによって生き、それを欲していながら、それを知らずに、それが分かっていないところのものであり、盲のようなこれらの人々にそれを示さなければならないところのものである。

私の中編は繁茂していく。私は考える――私が書いている生活についてのこれらのメモは、あらゆる中編以上のものではないのか？

この〝優位性〟を、私は自分の才能にではなく、生活への私の特別な信念、恐らくは愚か者の、**生活**には**すべて**が含まれている、ということへの信念に帰する。

この信念がなかったなら、私は詩人や小説家になっていただろう。だがこの信念は、私をもっぱら自分自身の体験に繋ぎ留めた。私は、芸術家としては自分の天賦の才に従って、学者としては信念と良心に従って働いてきた。これらのメモが、いまある形のままの方が、これらを叙事詩の材料として取るよりも、もっと価値があるということは大いにありうる。だれも、これらのメモほどに人間の生活の価値を説得できるような詩はつくれないだろう。

*

詩と生活を結ぶ橋は、敬虔なリズムであり、ここから驚きが生まれる。だが詩人よ、それから自分の法則をつくり、それに縛られることを恐れよ。おまえはただ、おまえに与えられた音楽的リズムにのみ耳を貸し、それに従って自分の生活を築くよう努力せよ。

もの言わぬ人々の生活に目を向け、暖かな国々へ飛び去り行くツルたちの呼び交わす叫びに耳を傾けよ。リーダーの不明瞭なひと声で、全群が方向を転じる。その響きの中には何という力があることか、リーダーが何とすばらしく思えることか！　果たして私はツルたちのまえにひざまずいて、請うべきか――「ツルよ、おまえたちの創造の秘密を私に明かしてくれ！」

リーダーにとって響きそのものが、行動するための必要から生まれたことがこんなにもはっきりしているのに、なぜ私に問う必要があるだろう。そのかわり、この行為の響きを聞けば、歓喜のあまり身が震える。

（さし絵　A・スベルドロフ）

考古学者 バーデル博士の発見

ワレリー・ジョーミン　カメラ　D・デバボフ

発掘は念入りに作成されたプランにもとづいて行われる。しかし、発見物によってはこのプランを修正する必要が生じる。そういう時、博士はすぐにいろいろな変更案の検討を始める。



74歳の今も、考古学に傾けるバーデル博士の情熱は少しも衰えない。

ソ連の有名な考古学者で歴史学博士のオットー・バーデルをモスクワの自宅に訪ねても、夏の間はなかなか会うことができない。74歳という高齢にもかかわらず、博士はたえず発掘調査や野外研究、発掘の予備調査に出かけていて、家をあけていることが多いからである。

バーデル博士によって調査された遺跡や考古学的資料の数は数千にのぼり、時代的にも旧石器時代から中世までと、広範囲にわたっている。50年の研究活動を通じて、博士はウラルからクリミアに至る広大な地域のあちこちに住んでいた原始種族の生活を探究し、多くの古代文化を発見した。

「私が大変ありがたいと思っているのは、自然に囲まれた土地で生まれ、育

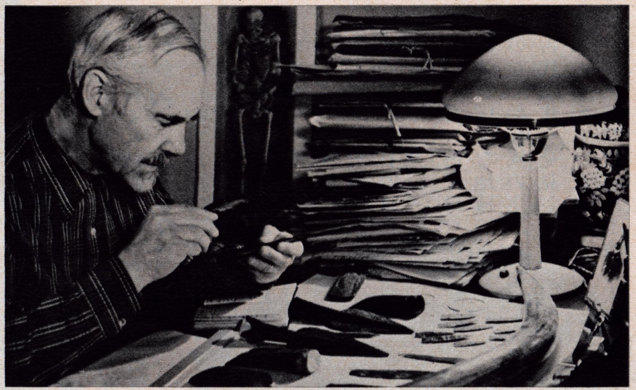


これらの青銅器は三五〇〇年前に生きていた人々の生活を語ってくれるかもしれない……



バーデル博士が発見した古代人の遺骨





発掘調査で見つかったものの多くは、分析と研究に長い時間がかかる。

ったことです」と博士は語る。「父は林務官でしたが、よく私を狩りに連れて行ってくれました。私は色々な木や草を見分けることができましたし、マッチ一本で焚き火をおこしたり、地べたに野宿することもできました。この経験が後に調査旅行の辛さを耐えぬく上で役に立ちました。なにしろ、私の調査旅行は長期にわたることが多いのです」

「私は考古学が本当に好きです」とバーデル博士は続ける。「もっとも、この仕事をしていると、がっかりさせられることも数え切れないほど起こるのですが。たとえば、クリミヤでわれわれが調査した六〇〇の洞窟のうち、旧石器時代の遺物が発見できたのは六つの洞窟だけでした。つまり1％ですが、これは大体のところ、そう悪い方ではありません。また、ジグリ丘陵のボルガ川沿いの部分には石器時代の人間が住んでいたに違いないと私は確信しているのですが、4年間探して、一つの収穫もあがっていません。ですから、もし調査の結果、とにかく何かが見つかったとすれば、それは常に大きな喜びであり、奇蹟といってもよい位のものなのです」

〃奇蹟〃は入念に考証される。一層、一層、順々に、考古学者たちが〃過去の覆い〃をはがしていく。一つ一つの掘り出し物（炭のかけらや木片、穀物の粒、花粉すらが貴重な発見物とみなされる）が記帳され、見つかった層、位置、発見当初の姿が記録される。

そのような〃奇蹟〃の一つを、細心の注意を払って標本化し終わるのに、一シーズンどころか10シーズンもかかることがよくある。そのうえ、すべての発掘物を研究室で加工し、完全に分析するのにほぼ同じ位の時間がかかる。だから、遺物を豊富に伴った旧石器時代の住居跡は、それ一つだけでも、一人の考古学者の一生の研究対象になりうるほどなのだ。バーデル博士には、そのような住居跡が30もある。

博士の持つ最大の考古学的〃領地〃は、カマ川流域（ソ連ヨーロッパ部の東北）であり、面積はおよそ五〇万平方kmである。博士とその弟子たちに率いられた調査隊により、この地域で石器時代と青銅器時代の住居跡が数十も発見された。

また、オットー・バーデル博士が、モスクワから二〇〇km東北のウラジーミル市の近くで発見したスンギリ遺跡は、考古学に一大センセーションをまき起こした。これはユーラシアで最も北に位置し、最も資料に富んだ旧石器時代の塚で、二万五〇〇〇年前の人々の生活や信仰についてのわれわれの知識を大きく広げてくれるものである。

マンモスの洞窟画

もう一つ、オットー・バーデル博士の名と結びついた、世界的に知られた旧石器時代の遺跡がある。それはウラルのカポワ洞窟の岩上に描かれた壁画群である。この洞窟画が発見されるまで、絵画の発祥地はヨーロッパの西南部だとみなされていた。19世紀末以来、この種の壁画はすべてそこで集中的に発見されていたからである。

「カポワ洞窟で発見された不思議な壁画についての報告を確かめるために、私たちが初めてその洞窟まで行った時、私は、もしかすると今日がこの世の見納めになるのではないかと思いました」と博士は言う。「洞内を懐中電灯で照らすと、湿った岩壁が頭上高く垂直にそびえているのが見えました。私たちは、29mもあるこの岩壁をよじ登らなければならないのです。しかし、ここで引きさがるわけにはいきませんでした。そして、私たちが洞窟内の最上部までたどりつき、鐘乳石の層を取り除いて、懐中電灯のゆらぐ光の中に、かすかな輪廓のある赤みがかったしみを見つけた時には、私はもう、自分の後にある真っ暗な断崖のことなど忘れていました。私たちの目の前には、マンモスのシルエットがあったのです」

カポワ洞窟の壁画の研究は、壁画が存在したという事実そのもの以上に思いがけない結果をもたらした。石器時代の壁画がある西南ヨーロッパの洞窟（現在、約50個所が知られている）は、カポワ洞窟から何千kmも離れている。二つの地域がこれほど遠く隔たっているにもかかわらず、両者の壁画は、手法といい、壁面における配置法といい、絵に添えられた不思議な記号といい、互いに似通っているのである。〃画家たち〃の種族が移住したのだと考えるのは無理だとされている。また、遺骨の人類学的研究によれば、両地域の種族はそれぞれ別の人種に属しているという。人間の最古の芸術に、確かに偶然ではなく、このような類似が存在する原因は何であろうか。原因がいかに説明されようとも、この類似は、人類が一つであることを新たに印象づける例証に違いないだろう。

「何千年も前の人々を理解し、彼らの世界に踏み込むことが、私たちにできるかどうか？　これは難しい問題です」とバーデル博士は言う。「それをめざして努力するのが、私にとっての人生の意義なのです。たとえいつか、この世にある古代遺跡がすべて発見されたとしても、考古学そのものは、私たちの歴史を、余すところなくありありと思い出そうとする試みとして、決して過去のものにはならないでしょう」

ロシア語のページ

А Б В

РЫБОВОДНЫЙ ЗАВОД ПРИ АЭС

Моско́вский институ́т “Гидропрое́кт” разрабо́тал прое́кт уника́льного рыбово́дного заво́да на берега́х водохрани́лища Ку́рской а́томной электроста́нции (центр европе́йской ча́сти СССР). Он представля́ет собо́й зда́ние длино́й 170 и ширино́й 72 ме́тра. Здесь под одно́й кры́шей разместя́тся инкубацио́нные це́хи, бассе́йны для выра́щивания мо́лоди и това́рной ры́бы. Проце́сс начнётся с получе́ния икры́ и заверши́тся погру́зкой ры́бы в автоцисте́рны для отпра́вки в магази́ны.

Как изве́стно, приро́да запрограмми́ровала то́лько оди́н не́рест — весе́нний, а специа́льный микрокли́мат, режи́мное кормле́ние и тёплые во́ды позво́лят создава́ть усло́вия для не́рестов в тече́ние всего́ го́да. Ина́че говоря́, заво́д как бы обеспе́чит ры́бе двена́дцать вёсен. Ежеме́сячно мо́жно бу́дет собира́ть и урожа́й. Он бу́дет весо́мым—сто два́дцать тонн.

Сейча́с ры́ба успе́шно “осва́ивает” водохрани́лище АЭС. Сюда́ запу́щены деся́тки ты́сяч малько́в.

ФАЗАНЬИ ЗАПОВЕДНИКИ

С фаза́нами — старожи́лами Кавка́зских гор — свя́зано мно́го леге́нд. Эта прекра́сная пти́ца изображена́ на карти́нах ста́рых грузи́нских мастеро́в жи́вописи. Она́ воспе́та поэ́тами, увекове́чена на барелье́фах. Фаза́н до сего́дняшнего дня—люби́мая в Гру́зии пти́ца.

Находя́щуюся сейча́с на гра́ни исчезнове́ния э́ту ре́дкую представи́тельницу перна́тых взя́ло под свою́ охра́ну госуда́рство. В разли́чных райо́нах Гру́зии со́зданы запове́дники фаза́нов. Для птиц устро́ены корму́шки, вы́сажены их люби́мые я́годы. Орнито́логи веду́т постоя́нное наблюде́ние за перна́тыми. Их уже́ учтено́ не́сколько ты́сяч.

Под защи́ту челове́ка взя́ты и други́е ре́дкие пти́цы и живо́тные, обита́ющие в гора́х Кавка́за.

本号のテキストは次号（6号）のトピックス欄に掲載される予定です。なお，前号のテキストの訳文は本号38ページのトピックス欄をご覧下さい。

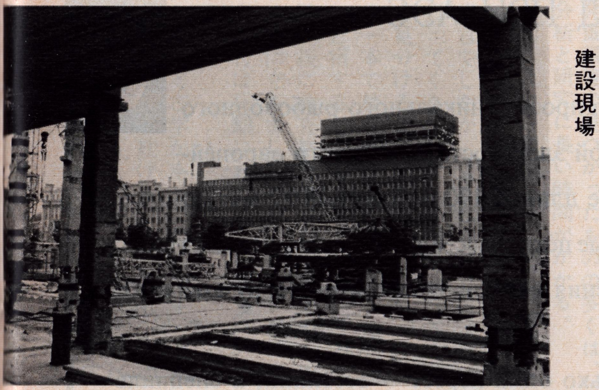
【注】

☆1行目：Московский институт “Гидропроект”〈モスクワの水工施設設計研究所〉
☆1行目：проект уникального рыбоводного завода〈ユニークな養魚場の設計〉
☆3行目：Он представляет собой здание длиной 170 и шириной 72 метра.〈これ（養魚場）は長さ 170m，幅 72m の建物である〉
☆4行目：Здесь под одной крышей разместятся инкубационные цехи. …〈ここの一つ屋根の下に孵化場，幼魚と商品魚を育てる池が配置される〉
☆5行目：… и завершится погрузкой рыбы в автоцистерны для отправки в магазины.〈(プロセスは)…魚を商店へ発送するために水槽車に積み込むことで終わる〉
☆7行目：Как известно, природа запрограммировала только один нерест …〈周知のように，自然は産卵期を年にたった一回しか予定していない…〉
☆8行目：режимное кормление〈規則的な給餌〉
☆9行目：Иначе говоря, завод как бы обеспечит рыбе двенадцать вёсен.〈言い換えれば，養魚場はいわば魚に12回の春を保障する〉
☆14行目：Она воспета поэтами, увековечена на барельефах.〈キジは詩人たちによって歌われ，レリーフにその姿を刻まれている〉
☆16行目：Находящуюся сейчас на грани исчезновения эту редкую представительницу пернатых взяло под свою охрану государство.〈今や消滅の淵に立っているこの珍しい鳥は，国によって保護されている〉

olympics-80

プレスセンターの建設始まる

オリンピックは全世界の耳目を集めるが、それはひとえに、マスメディアのおかげである。数字がこれをみごとに物語っている。ミュンヘン・オリンピックは約一〇億人が、モントリオール・オリンピックは一五億人がテレビで競技を観戦した。モスクワ・オリンピックでは二〇億以上の人々がテレビでその熱戦を見るだろう。これは、事実上全人類の半数に相当する。これに何億部もの新聞・雑誌による報道やラジオ放送が加わる。



オリンピック・プレスセンターの建設現場

80年オリンピックでは七〇〇〇人以上の報道関係者が活躍するが、これら報道関係者のためのプレスセンターの建設が順調に進行している。さらに現在のモスクワ・テレビ放送センターのならびにオリンピック用のテレビ・ラジオ放送施設が増設中であり、すべての競技場にはプレスセンター支局が設置される。そのほか、報道関係者が宿泊するモスクワ大学の宿舎の近くにも、通信用施設と報道活動のための施設ができる。

オリンピック・プレスセンターは、一六〇m×六四mの6階建ての四角い建物で、オリンピックのメーン競技場になるレーニン・スタジアムから車で10―15分のところに建つ。

三〇〇〇人の記者と約五〇〇人のカメラマンがこのプレスセンターのサービスを受ける（テレビ記者は、テレビ・ラジオ放送施設で働く予定）。ジャーナリストたちが出くわす最初の部屋は取材記者登録室。タス、フランス通信社、AP、UPI、ロイターの記者は、直接80年オリンピック組織委員会を通じて登録され、他はすべて各国の国内オリンピック委員会を通じて登録される。

取材記者登録室とならんでIOC、組織委員会、国際スポーツ・ニュース連盟などの代表部、オリンピック・ニュースサービス全体を統轄する指導部が設置される。これは、起こりうるすべての問題をそこで直接、能率的に解決するためである。

オリンピックでは、記者たちの労働時間は緊張の連続で、一日普通16―18時間にも及ぶ。プレスセンターの設計者たちは、記者たちの労働を軽減するために、少なからず努力した。プレスセンターの広間にはタイプや電話のある便利な机が置かれ、特別の台にテレビもセットされる。三〇〇〇の情報ファイル用ボックスや世界各国語の定期刊行物をそろえた部屋も開設され、特に記者たちのために、競技の説明や記録を記載した公報が能率的に準備され、配布される。

5ヵ国語の同時通訳設備、ラジオ・テレビ放送室、テレビ・インタビュー用のスタジオ等のある三五〇席の記者会見ホールもできる。ニュースを迅速に送るために、約一〇〇の長距離電話ボックスが設けられる。電話室には最新のテレタイプ、写真電送装置、ファクシミリが備えられる。

各競技場に設置されるプレスセンター支局は、メーンプレスセンターとすべての競技会場の記者席を結びつける。設計者は、一人の記者が一日に二つの競技を取材できるように競技施設の記者席数を決めた。各記者席やプレスセンター支局にはテレビがセットされ、記者たちは他の会場の競技も見ることができる。その他、各プレスセンター支局は、同じくオリンピック競技が行われるレニングラード、タリン、キエフ、ミンスクの各都市のプレスセンターと常時連絡するようになる。

（アレクサンドル・モイセーエフ）

☆ ☆ ☆

モスクワ・オリンピックと外国の会社

スイスの「スイス・タイミング」社は80年オリンピックの組織委員会との契約に調印して、「モスクワにおける第22回オリンピック公式時間測定者」に任命された。インスブルックとモントリオールの一九七六年オリンピックに参加したことで知られる同社はモスクワ・オリンピックでも、陸上競技をはじめボート、自転車、近代5種、水泳、水球、馬術の各競技で時間測定をすることになる。同社はこのほかにも、一連の種目で写真記録と特殊ビデオ記録、風速と風向にかんするデータ、確認用公式記録などを審判団に提供する。

モスクワ・オリンピック組織委員会と外国の会社との協力の事例は数多くあげることができる。オリンピック開始4年前の一九七六年9月には、早くもモスクワで、国際展示会「技術――オリンピックに向けて」が開催され、これには21ヵ国から三一二社が参加した。その際、47社が将来の協力にかんする組織委員会との議定書や覚書に調印した。同時に「第22回オリンピック公式納入業者」の最初の認定状が、表示パネルと最新式のスポーツ施設用照明装置を生産しているハンガリーの企業と、80年オリンピックの勤務員と審判員の制服を納入することになっている西ドイツの「アディダス」社に与えられた。

いまでは公式納入業者の数もいちじるしく増加し、なおひきつづき増加している。たとえばポーランド、米国、イタリアの会社、それに日本光学などの日本の会社が契約を結んで、組織委員会の認定状を得ている。

オリンピック競技実施に関連する組織上、経済上その他の問題の解決における国際協力は、最近のオリンピックの実際が示している通り、ますます大きな意義を持つようになっている。当然ながらモスクワも、この伝統に従った。モスクワがこのような活動をはじめると間もなく、西側の一部の出版物で、モスクワ・オリンピックは外国の援助なしには組織できないだろうなどといった声が広められた。

事実を見てみよう。「スイス・タイミング」社がその一部を請け負っている80年オリンピックの審判・情報設備では、競技の実施に必要な三六〇の設備のうち三三〇はソ連の企業が納入し、30だけが外国の会社に割り当てられている。スポーツ用具をオリンピックに供給する問題を例にとると、七五〇品目のうち六一〇品目はソ連の工業によって生産される。他の諸部門においても状況は同じである。

もちろん、なにもかもがうまく行っているわけではない。たとえば、テレビあるいはラジオの放送設備をなにからなにまですべて生産しているような国は世界広しといえども一国もない。そして恐らく、テレビ・ラジオ放送のような複雑な技術分野においては、協業という自然経済の方法によらざるを得ないだろう。そしてこの協業には国際的協業も含まれるのである。したがってソ連のテレビに、フランス、米国、西ドイツの会社のいくつかの装置があっても、それは少しも恥ずかしいことではない。結局、これで利益を得るのはほかならぬオリンピックである。

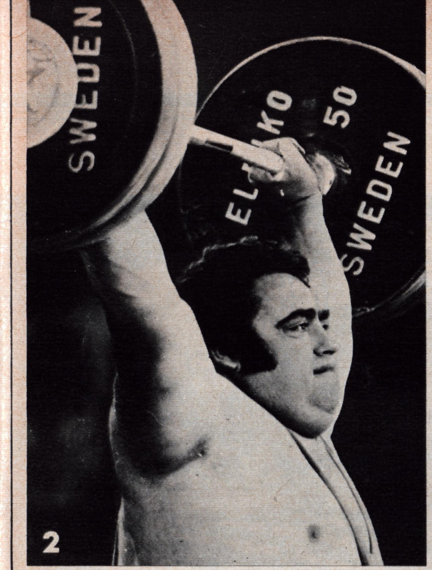
外国の会社への発注は、それらの会社の製品が、オリンピック競技や世界選手権大会にとって承認されたもの、伝統のものであり、関係の国際スポーツ連盟から品質を保証されている、という事情による場合もある。たとえばソ連では、十分に良質なスポーツ競技用ボ!ルが生産されているが、国際的伝統から、前記の理由により、モスクワ・オリンピックのバスケットボール競技用には日本のタチカラ株式会社のボール、またバレーボール競技用には日本のもう一つの会社、明星ゴム株式会社のボールがそれぞれ選ばれることになった。ついでながら、これら2社は、80年オリンピックにボールを納入するだけでなく、一二万五〇〇〇ドル、二五万ドルをそれぞれオリンピック基金に納めている。

このように、外国企業を公式納入業者として参加させることによって、オリンピックの組織者たちはその支出を部分的に補償することができるのである。しかし80年オリンピック組織委員会の経済計画のなかでは、これは決して本質的な計画ではない。業者自身が、オリンピックの組織に無私の寄与をすることで競争しているかのようである。

ここでの問題は、オリンピックの公式納入業者という名前が高い広告価値を持っていることにある。自社のサービスあるいは商品をオリンピックの組織者、観客、競技参加者に提供する企業家たちはそのことによって、オリンピックの標識を付けた製品にたいする国際市場での需要の増大という小さからぬ利益を得るのである。

ソ連スポーツ・ベストテン


1


2

第1位ウラジーミル・ヤシチェンコ

第2位ワシリー・アレクセーエフ

第3位イリーナ・デリューギナ

第4位ニコライ・アンドリアノフ

第5位イリーナ・ロドニナ、アレクサンドル・ザイツェフ

ソ連スポーツ・ジャーナリスト連盟が行う恒例の投票で、ウクライナ共和国ザポロジエ市の学生**ウラジーミル・ヤシチェンコ**（18歳）が、昨一九七七年度ソ連スポーツ・ベストテンの第1位に選ばれた。

ヤシチェンコは昨シーズン最大のセンセーションをまき起こした。7月3日、米国のリッチモンド市で行われたソ米ジュニア陸上競技会の走り高跳びでストーンズ（米国）の記録を破り、2m33の世界新を樹立したからだ。このような若い年齢で、恐らく陸上競技種目中もっとも円熟を要する走り高跳びの世界記録を更新した者はこれまでなかった。伝説的なワレリー・ブルメルでさえ、初めて世界記録を出したのは19歳の時だった。

ヤシチェンコは〝トランスフォルマートル〟工場付設の少年スポーツ学校で練習している。コーチのワシリー・テレーギンは流行の背面跳びを認めず、伝統のベリーロールに固執している。ヤシチェンコはこのテレーギン・コーチに少年時代から指導を受けた。両親（父は製鉄工、母は郵便配達人）も息子のスポーツへの熱中を励ましてきた。

昨年、ヤシチェンコは優秀な成績で特別中等学校（一連の科目を英語で教える）を卒業し、英語が得意。現在は体育大学の学生。

ベストテン第2位に選ばれた〝世界一の力持ち〟——重量挙げスーパーヘビー級の**ワシリー・アレクセーエフ**については、詳しい説明は要らないだろう。昨年も80回目の世界記録更新をやってのけ、アレクセーエフが公約している一〇〇〇回の世界新記録樹立が確かな根拠にもとづくことを証明した。

3位は新体操の**イリーナ・デリューギナ**。彼女はスポーツ一家の出身。母親はソ連功労コーチで、娘のコーチをしている。父のイワン・デリューギンは一九五六年オリンピックの近代五種で団体優勝したソ連チームの一員だった。イリーナは最近3年間、ソ連選手権で連続して総合優勝し、昨年は初めて世界チャンピオンになった。キエフの大学生で、まだ19歳。

モントリオール・オリンピックの男子体操で個人総合優勝した**ニコライ・アンドリアノフ**はベストテン4位に選ばれた。昨年のアンドリアノフは、超難度のエレメントで演技を更新し、後輩のウラジーミル・マルケロフと共にワールド・カップを獲得した。

第5位はフィギュアー・ペアの**イリーナ・ロドニナ**、**アレクサンドル・ザイツェフ**。この夫妻は昨年も大きな国際競技会のすべてで再び無敵の演技を見せた。世界のペア・スケーティング界をリードするこの名カップルは、常に新しいものの探究を続けている。

第6位に選ばれた女子スピードスケートの**ベーラ・ブリンゼイ**（キエフの学生）は、一九七七年2月まではごく少数の専門家にしか知られていなかった。米国のキングストーンで開かれた世界選手権での彼女の総合優勝は一大センセーションだった。ソ連の女子スピードスケート界はすでに長い間、正確に言えば6年以上もこのような成功から見放されていたからだ。中等学校を卒業するまでブリンゼイが熱中していたのはバスケットだというのも面白い。スケートを本格的にやるようになったのは、現代のビッグ・スポーツの選手としてはかなり遅かったが、その努力は昨年の世界選手権、欧州選手権の金メダルで実を結んだ。

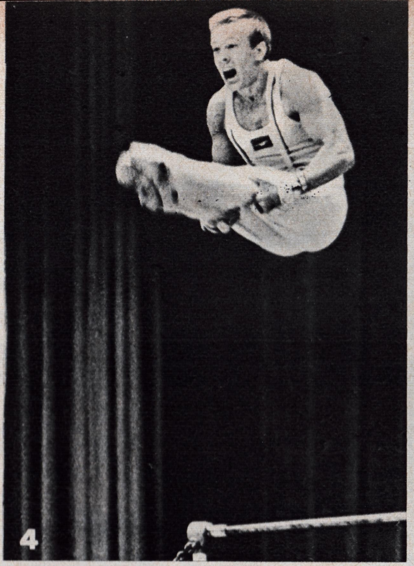
第7位はチェスの世界チャンピオン、**アナトリー・カルポフ**（26歳、レニングラードの学生）。昨年も、出場したほとんどの大会で優勝した。ことしは世界チャンピオンのタイトル防衛戦を控えている。

女子体操の**マリア・フィラトワ**がベストテン第8位に選ばれた。シベリアの小都市レーニンスク・クズネック出身のこの16歳の中学生はすでにオリンピックの金メダルを持っている。モントリオール・オリンピックで団体優勝したソ連女子チームのメンバーだったからだ。フィラトワはモントリオールでは代表チームの六番手と見られていたが、1年後の昨年は着実にトップクラスに進出した。そして、スペインで開かれたワールド・カップ大会の個人総合優勝でこの地位を不動のものにした。

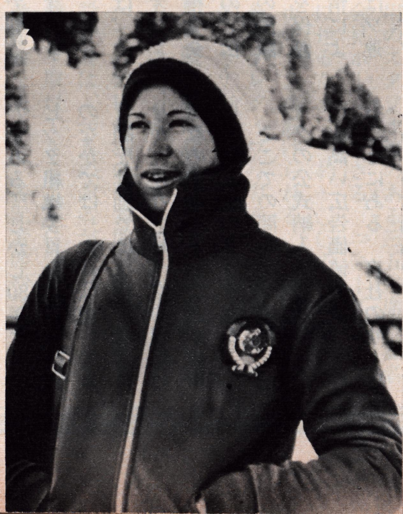
9位には自転車競技の選手が選ばれた。ソ連スポーツのベストテンに自転車競技の選手が入ることは余り多くないが、今回はエストニア共和国タルトゥ市の教師**アーボ・ピックース**（23歳）の名前を落とすわけにはいかなかった。モントリオール・オリンピックのロード・レース団体優勝に次いで、ピックースは昨年の春、欧州で人気の高い競技会〝平和の自転車競技大会〟で団体優勝と個人優勝を飾ったのだ。

第10位は女子平泳ぎの**ユリア・ボグダノワ**。レニングラードの13歳の中学生で、今回のベストテンの中ではもちろん最年少。マリア・アミロワ・コーチの指導のもとに昨年はスウェーデンの欧州選手権の平泳ぎ一〇〇mと二〇〇mに優勝するなど、めざましい活躍を見せた。


3

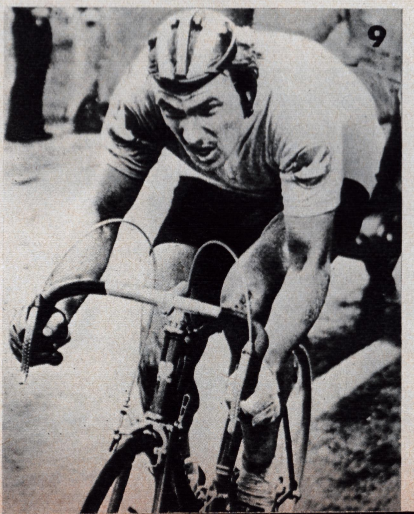

4


5


6


7


8


9


10

第6位ベーラ・ブリンゼイ

第7位アナトリー・カルポフ

第8位マリア・フィラトワ

第9位アーボ・ピックース

第10位ユリア・ボグダノワ

ビリニュスの芸術学校

ビタウタス・ミクリチュス　カメラ S・ペトルーヒン M・バラナウスカス



ビリニュスの中心部にあるチュルリョニス記念芸術学校の校舎



◀インスピレーションをかき立てるふん囲気の中で…

リトワ共和国の首都ビリニュス市の中心部に、三人のミューズ神が一つ屋根の下に住む美しい建物がある。これは傑出したリトワの美術家、作曲家、教育者だったミカロユス・チュルリョニス（一八七五—一九一一）の名を記念した芸術学校である。

この学校は、その構成と活動方法で十分にユニークな

実験的な学校で、音楽科、舞踊科、美術科を統合している。この学校を創立したリトワの著名な文化人たちは、一つの集団の中で将来の音楽家、舞踊家、美術家を養成することが全面的な教養を身に付けた人間を作るのに役立つことを希望した。芸術学校が活動を開始してからすでに15年以上も経過した今、この学校は芸術系の大学を志望する若者たちにすぐれた一般教育、理論と実技の教育を与えていると確信を込めて言うことができる。

当然のことだが、チュルリョニス記念芸術学校へ入学するための主要な基準は子どもの能力である。教師は綿密に候補者を選抜し、幼稚園、普通教育学校と緊密な連絡を保ち、リトワ共和国で行われているさまざまな児童コンクー

ビリニュスの芸術学校

ルを注意深く見守っている。要するに肝心なことは、才能を見逃がさないことである。音楽科へは初等普通教育学校の一学年から児童の入学を許可し、舞踊科へは三学年を修了後に、美術科へは四学年修了後に入学を許可する。

現在この学校では約七五〇人の男子と女子が学んでいる。二一〇人の教師がかれらの指導に当たっている。訓育・教育体系全体は良く計画され、調整されており、一人一人の生徒の能力をできるだけ完全に伸ばすと同時に、その芸術的興味の範囲を拡大することをめざしている。科の異なる生徒たちの創造的接触はきわめて緊密である。音楽科と舞踊科の生徒は若い美術家の仕事の最初の鑑賞者であり、美術科の生徒たちは学校の演奏会や舞踊公演の常連の客である。子どもたちは一緒に博物館や芝居に行く。ついでに言うと、リトワ共和国フィルハーモニーやアカデミー・オペラ・バレエ劇場との合意により、芸術学校の生徒たちは無料で音楽会や劇場に入れる。

もっとも、ここでは多くのものが無料だ。教育だけでなく、楽器も、芸術活動のための材料も、他の都市出身者用の寮の二人部屋も、食事も無料だ。

学校の空気そのものが芸術によって貫かれているようだ。窓には色とりどりの装飾ガラス、廊下やホールの壁には絵、庭には彫刻。これらはみな生徒たちの手によってつくられた。

夏休みになると、どの科の



▲制作に取り組む美術科の生徒たち



舞踊科の生徒が踊るショパン作曲の一幕物のバレエ



ピアノ・クラスのニヨレ・ダイネネ先生のレッスン



▶ハーモニーの世界に溶けこむ…



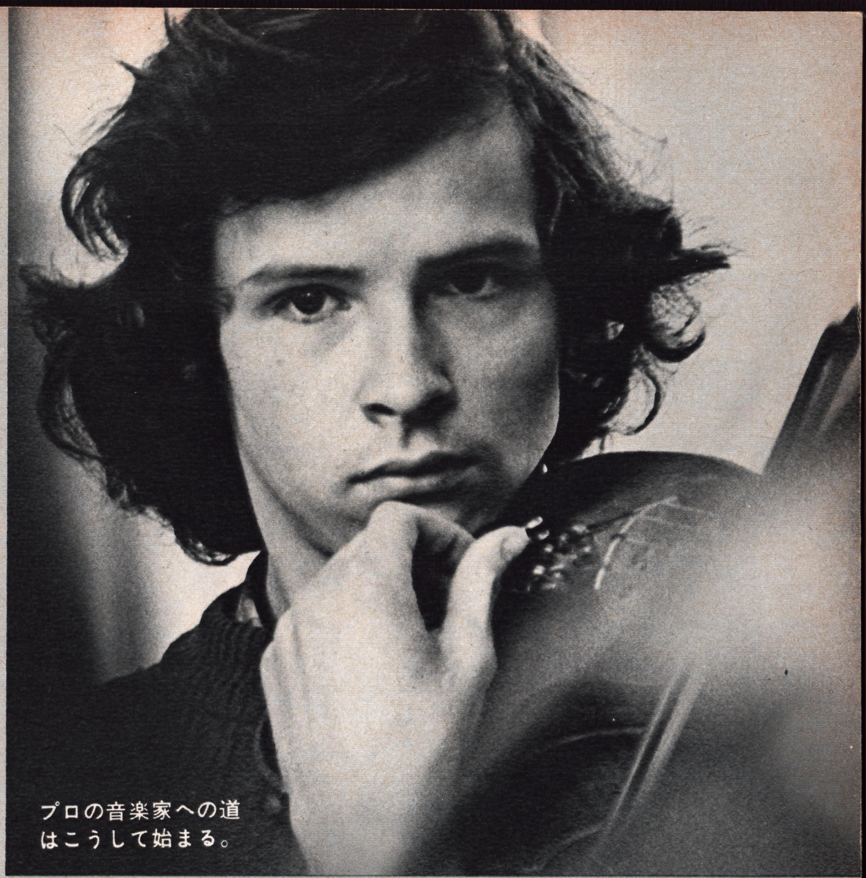
舞踊科の卒業生たちはリトワ共和国のオペラ・バレエ劇場や舞踊団で活躍することになる。

ビリニュスの芸術学校

生徒たちも、リトワのさまざまな地方へ民族学的調査旅行に出かける。生徒たちはその地方の自然の特色、民族的創造の特徴、つまり美術、歌、音楽、舞踊の特徴を知る機会を持つ。夏の調査旅行中に生徒たちは民族的な生活用具や衣装のスケッチをする。これらのスケッチは、さまざまな考古学的陳列物とともに、学校の民族芸術博物館に保存される。この博物館は生徒たちが民族芸術文化を研究する絶好の場所になっている。一個所に集められた民族芸術の作品は、その生き生きとした芸術言語の全体像と形式の相互作用をはっきりと理解させてくれる。

しかしいま学校が終わった。生徒たちは普通中等教育と中等専門教育を修了した。通常、ここの卒業生たちは音楽院や美術大学の入学試験を楽々とパスし、専門教育を続けている。舞踊科を卒業した者は、リトワ共和国アカデミー・オペラ・バレエ劇場や、さまざまなプロの舞踊団に喜んで迎え入れられる。

チュルリョニス記念芸術学校は創立以来、学校が今も誇りにしている大勢の青年男女を卒業させた。リトワの現在の有名文化人の多くは、この学校で過ごした幼年時代、少年時代を感謝の念を込めてなつかしく思い出している。



プロの音楽家への道はこうして始まる。



未来の女流彫刻家ラサ・タラビルダイテ

今日のソ連邦
一九七八年3月1日号
編集・発行 ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3―9―13、郵便番号141、電話03・447・3536）
印刷 大日本印刷株式会社